

---

朝霞市

---

# 宮台・宮原遺跡

---

県営住宅朝霞根岸台団地建設地内埋蔵文化財発掘調査報告

2006

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（空中写真）



有鈎銅釧

# 序

埼玉県は「質の高い住まいづくりと住環境の整備」を基本方針として、地震や火災などの災害に対して安全で安心して暮らせる住まいづくりの促進や、健康的で快適な質の高い住宅の供給などを進めております。このたびの、県営住宅朝霞根岸台団地の建設もその一環として計画されたものです。

朝霞市は埼玉県の南東部に位置し、市内のほぼ中央を目黒川が流れており、その兩岸の斜面には武蔵野の面影を残す雑木林と多くの湧水が見られます。水に恵まれた環境のため、<sup>いにしえ</sup>古より人々の生活が営まれ、多くの遺跡が残されております。また、建設予定地に隣接する旧高橋家住宅は、江戸時代中期の住宅と畑、山林が当時の景観を留めていることから、平成13年に国の重要文化財に指定されました。

朝霞根岸台団地の建設地は、朝霞市教育委員会が幾度かにわたり発掘調査を実施している宮台・宮原遺跡の中に計画され、その埋蔵文化財の取り扱いについては、各関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課の調整により、埼玉県県土整備部住宅課（現 都市整備部住宅課）の委託を受けて、当事業団が実施しました。

今回の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の有鉤銅釧<sup>ゆうこうどうくしろ</sup>が発見されました。東日本での出土例はほとんど無く、貴重な資料と言えます。また、平安時代では住居跡7軒が発見され、鉄製の鍬や小刀とともに字の書かれた須恵器が複数出土しました。

本書は、このたびの発掘調査の成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また普及・啓発の資料として広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、この発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県都市整備部住宅課、朝霞市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成18年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 福田陽充

# 例言

1. 本書は、朝霞市に所在する宮台・宮原遺跡第7地点の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表番地、および発掘届けに対する指示通知は、以下の通りである。  
宮台・宮原遺跡第7地点 (MYDIHR)  
埼玉県朝霞市根岸台2丁目5-1111他  
平成16年6月21日付け教文第2-26号
3. 発掘調査は、県営住宅朝霞根岸台団地建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県都市整備部住宅課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、西井幸雄、福田 聖、栗岡 潤が担当し、平成16年6月4日から平成16年10月29日まで実施した。
6. 整理・報告書作成作業は、平成17年10月3日から平成17年12月28日まで実施した。
7. 遺跡の基準点測量は、(株)精進測量設計に委託した。
8. 遺跡の航空写真撮影は、(株)GIS 関東に委託した。
9. 発掘調査における写真撮影は西井、福田、栗岡が、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
10. 出土遺物の整理および図版の作成は、西井幸雄が主に行い、須恵器、土師器に関しては赤熊浩一、兵ゆり子、金属製品に関しては瀧瀬芳之、縄文土器は金子直行、古銭は木戸春夫が行った。
11. 有鉤銅釧の科学分析は、別府大学の平尾良光、原 彰吾氏、東京文化財研究所の早川泰弘氏に依頼し、玉稿を賜わった。
12. 本書の執筆は西井が行い、I-1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、IV-5、V-2を瀧瀬が行った。
13. 本書の編集は、西井が担当した。
14. 本書にかかる資料は、平成18年度1月以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
15. 本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏から御教示、御協力をいただいた。記して感謝を表します。  
(敬称略)  
朝霞市教育委員会 東京文化財研究所 別府大学  
大谷宏治 木下尚子 甲元眞也 野沢 均  
原 彰吾 早川泰弘 平尾良光 北條芳隆  
三田光明

# 凡例

1. 本書中における X・Y の数値は、世界測地系(新測地系)による平面直角座標第Ⅸ系(原点:北緯36°00′00″、東経139°50′00″)に基づく座標値(m)を示し、各挿図における方位は、すべて座標北を示している。
2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10m×10mを基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として東西方向は西から東へ1～と番号を付し、南北方向は北から南へA～とアルファベットを付した。
4. 挿図の縮尺は、各図版中に指示した。

## 【遺構図】

全体図	1/400
住居跡	1/60
溝跡	1/300・1/120・1/60・1/80
土壙	1/60・1/10
ピット	1/60

## 【遺物】

須恵器	1/4
土師器	1/4
土製品	1/2・1/3
金属器	1/2・1/1
石製品	1/3
古銭	1/1
石器	4/5・2/3・1/2・1/3

5. 遺構の表記記号は、以下のとおりである。

SJ 住居跡

SK 土壙

SD 溝跡

P ピット

6. 遺構断面図に表記した水準の数値は、海拔標高で、単位は m である。
7. 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。また、灰釉陶器、彩色土器については、施釉・彩色範囲を網かけで示した。  
網は、灰釉の範囲が10%、断面を40%、赤彩は10%の網かけである。
8. 遺物観察表は次のとおりである。
  - ・口縁・器高・底径は、cm を単位とする。
  - ・( )内の数値は復元推定値・[ ]内の数値は残存値である
  - ・胎土は肉眼観察できるものを次のように示した。  
雲：雲母 片：片岩 角：角閃石 長石：長石 石英：石英 砂粒：砂粒子 赤粒：赤色粒子 白粒：白色粒子 黒粒：黒色粒子 針：白色針状物質 小礫：小礫
  - ・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
  - ・残存率は図示した器形に対する割合を表示した。
9. 土器類の色調の表記は、『新版標準土色帖』2002年度版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に従った。
10. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000、朝霞市発行の1/2,500を用いた。

# 目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	5. 弥生時代後期から古墳時代初頭	46
1. 発掘調査に至る経過	1	6. 旧石器時代	48
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	7. グリッド出土の遺物	53
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2	V まとめ	55
II 遺跡の立地と環境	3	1. 宮台・宮原遺跡の平安時代集落について	55
III 遺跡の概要	7	2. 有鉤銅釧について	57
IV 遺構と遺物	10	3. 埼玉県朝霞市宮台・宮原遺跡から出土した 有鉤銅釧の鉛同位体比	63
1. 住居跡	10	4. 埼玉県朝霞市宮台・宮原遺跡出土銅釧の蛍 光 X 線分析結果	65
2. 溝跡	31		
3. 土壌	38		
4. ピット	42		

## 挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	3	第27図	第7号住居跡出土遺物	31
第2図	周辺の遺跡	5	第28図	第1・2・4号溝跡	32
第3図	遺跡周辺の地形図	8	第29図	第1・2・4号溝跡(1)	33
第4図	遺構全体図	9	第30図	第1・2・4号溝跡(2)	34
第5図	第1号住居跡	11	第31図	第1・2・4号溝跡(3)	35
第6図	第1号住居跡出土遺物	12	第32図	第1・2・4号溝跡出土遺物	36
第7図	第2・3号住居跡	13	第33図	第3・5～8号溝跡	37
第8図	第2号住居跡遺物出土状況	14	第34図	第4・8号溝跡出土遺物	37
第9図	第2号住居跡出土遺物(1)	15	第35図	土壌(1)	39
第10図	第2号住居跡出土遺物(2)	16	第36図	土壌(2)	40
第11図	第3号住居跡遺物出土状況	18	第37図	土壌出土遺物	41
第12図	第3号住居跡出土遺物	18	第38図	ピット分布図	43
第13図	第4号住居跡	20	第39図	ピット(1)	44
第14図	第4号住居跡遺物出土状況	20	第40図	ピット(2)	45
第15図	第4号住居跡出土遺物	21	第41図	ピット出土遺物	45
第16図	第5・6号住居跡	22	第42図	第16号土壌	47
第17図	第5号住居跡	23	第43図	有鉤銅釧	48
第18図	第5号住居跡カマド	24	第44図	旧石器調査区	49
第19図	第5号住居跡遺物出土状況	25	第45図	土層断面図	50
第20図	第5号住居跡出土遺物(1)	26	第46図	旧石器時代石器	51
第21図	第5号住居跡出土遺物(2)	27	第47図	グリッド出土遺物(1)	52
第22図	第6号住居跡	28	第48図	グリッド出土遺物(2)	53
第23図	第6号住居跡遺物出土状況	29	第49図	宮台・宮原遺跡の住居跡の分布	56
第24図	第6号住居跡出土遺物	29	第50図	宮台・宮原遺跡出土の有鉤銅釧(復元図)	57
第25図	第7号住居跡	30	第51図	有鉤銅釧出土遺跡一覧	58
第26図	第7号住居跡遺物出土状況	30	第52図	帯状有鉤銅釧の類例	61

## 表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	6	第9表	第7号住居跡出土遺物観察表	31
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	12	第10表	第1号溝跡出土遺物観察表	35
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	17	第11表	第4・8号溝跡出土遺物観察表	37
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	19	第12表	土壌出土遺物観察表	41
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表	21	第13表	ピット出土遺物観察表	43
第6表	第5号住居跡出土遺物観察表(1)	24	第14表	ピット一覧	46
第7表	第5号住居跡出土遺物観察表(2)	27	第15表	旧石器時代石器計測表	51
第8表	第6号住居跡出土遺物観察表	29	第16表	グリッド出土遺物観察表	53

# 図版目次

- 口絵 1 遺跡遠景（空中写真）  
2 有鉤銅釧
- 図版 1 1 調査区北側全景  
2 調査区南側全景
- 図版 2 1 第1号住居跡  
2 調査区南側近景
- 図版 3 1 第2号住居跡遺物出土状況（1）  
2 第2号住居跡遺物出土状況（2）
- 図版 4 1 第2号住居跡遺物出土状況（3）  
2 第2号住居跡
- 図版 5 1 第4号住居跡遺物出土状況  
2 第4号住居跡
- 図版 6 1 第5号住居跡遺物出土状況  
2 第5号住居跡
- 図版 7 1 第5・6号住居跡  
2 第5号住居跡カマド
- 図版 8 1 第7号住居跡  
2 第7号住居跡カマド
- 図版 9 1 第1・2・4号溝跡調査区北側  
2 第1号溝跡調査区南側
- 図版10 1 第16号土壙  
2 有鉤銅釧出土状況
- 図版11 1 第18・26・27号土壙  
2 第19号土壙
- 図版12 1 第21号土壙  
2 第22号土壙
- 図版13 1 旧石器調査区断面  
2 第1号住居跡出土遺物（第6図）
- 図版14 1 第2号住居跡出土遺物（第10図）  
2 第3号住居跡出土遺物（第12図）  
第4号住居跡出土遺物（第15図）
- 図版15 1 第5号住居跡出土遺物（第20・21図）  
第6号住居跡出土遺物（第24図）  
第7号住居跡出土遺物（第27図）  
2 第1号溝跡出土遺物（第32図）  
第4号溝跡出土遺物（第34図）
- 図版16 1 土壙出土遺物（第37図）
- ピット出土遺物（第41図）  
グリッド出土遺物（第47図）
- 2 旧石器時代出土遺物（第46図）  
グリッド出土遺物（第47・48図）
- 図版17 1 第1号住居跡出土遺物（第6図1）  
2 第1号住居跡出土遺物（第6図3）  
3 第1号住居跡出土遺物（第6図4）  
4 第2号住居跡出土遺物（第9図1）  
5 第2号住居跡出土遺物（第9図2）  
6 第2号住居跡出土遺物（第9図3）
- 図版18 1 第2号住居跡出土遺物（第9図4）  
2 第2号住居跡出土遺物（第9図5）  
3 第2号住居跡出土遺物（第9図6）  
4 第2号住居跡出土遺物（第9図7）  
5 第2号住居跡出土遺物（第9図8）  
6 第2号住居跡出土遺物（第9図9）
- 図版19 1 第2号住居跡出土遺物（第9図10）  
2 第2号住居跡出土遺物（第9図23）  
3 第2号住居跡出土遺物（第9図24）  
4 第2号住居跡出土遺物（第10図29）  
5 第2号住居跡出土遺物（第10図30）  
6 第2号住居跡出土遺物（第10図33）
- 図版20 1 第2号住居跡出土遺物（第10図37）  
2 第3号住居跡出土遺物（第12図1）  
3 第3号住居跡出土遺物（第12図2）  
4 第4号住居跡出土遺物（第15図1）  
5 第4号住居跡出土遺物（第15図2）  
6 第4号住居跡出土遺物（第15図3）
- 図版21 1 第4号住居跡出土遺物（第15図4）  
2 第5号住居跡出土遺物（第20図1）  
3 第5号住居跡出土遺物（第20図2）  
4 第5号住居跡出土遺物（第20図3）  
5 第5号住居跡出土遺物（第20図5）  
6 第5号住居跡出土遺物（第20図6）
- 図版22 1 第5号住居跡出土遺物（第20図9）  
2 第5号住居跡出土遺物（第20図16）  
3 第5号住居跡出土遺物（第20図23）

- 4 第5号住居跡出土遺物 (第20図24)
- 5 第5号住居跡出土遺物 (第21図26)
- 6 第5号住居跡出土遺物 (第21図29)
- 図版23 1 第6号住居跡出土遺物 (第24図2)
- 2 第6号住居跡出土遺物 (第24図5)
- 3 第7号住居跡出土遺物 (第27図1)
- 4 第7号住居跡出土遺物 (第27図2)

- 5 第7号住居跡出土遺物 (第27図3)
- 6 第7号住居跡出土遺物 (第27図4)
- 図版24 1 第7号住居跡出土遺物 (第27図6)
- 2 第15号土壙出土遺物 (第37図1)
- 3 ピットー3出土遺物 (第41図1)
- 図版25 1 有鉤銅釧 (表)
- 2 有鉤銅釧 (裏)

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では「公営住宅の計画的な供給」の施策の中で、住宅にお困りの低額所得者に対して県営住宅の供給を推進している。県営住宅朝霞根岸台団地もその一環として計画された。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成14年6月24日付け住第591号で、住宅課長より文化財保護課長（当時）あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成14年8月20日付け教文第707号で、宮台・宮原遺跡の取扱いについて次のように回答した。

### 1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

名称 (No.)	種別	時代	所在地
宮台・宮原遺跡 (No.08-054)	集落跡古墳	縄文・弥生・古墳・平安	朝霞市根岸台2丁目

### 2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第94条の規定に基づく発掘通知を埼玉県教育委員会教育長あてに提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、住宅課、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、調査は平成16年6月4日から10月29日まで実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成14年9月19日付け住第1053号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成14年9月30日付け教文第3-540号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成16年6月21日付け 教文第2-26号  
(生涯学習文化財課)

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

発掘調査は平成16年6月4日から平成16年10月29日まで実施した。調査面積は2,900m<sup>2</sup>である。

6月初旬に現地で打ち合わせを行い、事務手続き等の準備を進めた。土を遺跡内で処理するため、調査区を南北に分けて実施することにした。

6月28日から重機により北側の区域の表土掘削を開始する。7月1日に現場事務所を設置、機材を搬入する。7日に第1回目の基準点測量を行い、補助員による遺構確認作業を開始した。8月初旬に第1回目の空中写真を撮影し、その後、旧石器の調査を行う。

8月5日から北区の埋め戻し及び南区の表土掘削を重機で行う。8月11日に第2回目の基準点測量を行い、補助員による遺構確認作業を開始する。9月中旬に第2回目の空中写真を撮影し、その後、旧石器時代の調査を行った。

発掘調査は9月22日に終了し、24日から重機による埋め戻し作業を行う。発掘機材は28日に搬出し、

31日に発掘事務所の撤去を行う。

発掘調査の終了後、発見届けを朝霞警察署に、保管証を朝霞市教育委員会に提出した。

### (2) 整理・報告書作成作業

整理作業は、平成17年10月3日から平成17年12月28日まで実施した。

10月3日から遺物の水洗・注記を開始し、続けて遺物の接合・復元作業を実施した。遺構図面に関しては、図面整理を経て、第2原図を作成し、スキャナーで取り込んだ後に、コンピューターによるトレース作業及び土層註記等を挿入し編集作業を進めた。遺物は復元が終了したものから実測作業に入り、10月下旬から併行してトレース・採拓をし、版下の作成を行った。

11月中旬に遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め編集作業を行った。

12月下旬に大部分の作業を完了させて、印刷業者を選定し、平成18年3月に報告書を刊行した。

## 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

### (1) 発掘調査 (平成16年度)

理事長	桐川 卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	中村 英樹
(管理部)	
副部長	村田 健二
主席	田中 由夫
主任	江田 和美
主任	長滝美智子
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
主任	菊池 久
(調査部)	
調査部長	宮崎 朝雄
調査部副部長	坂野 和信
主席調査員 (調査第一担当)	昼間 孝志
統括調査員	西井 幸雄
主任調査員	福田 聖

主任調査員	栗岡 潤
(2) 整理事業 (平成17年度)	
理事長	福田 陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	保永 清光
(管理部)	
副部長	村田 健二
主席	高橋 義和
主席	宮井 英一
主任	福田 昭美
主任	菊池 久
主事	海老名 健
主事	岩上 浩子
(調査部)	
調査部長	今泉 泰之
調査部副部長	坂野 和信
主席調査員 (資料整理第二担当)	金子 直行
統括調査員	西井 幸雄

## II 遺跡の立地と環境

宮台・宮原遺跡は埼玉県朝霞市根岸台2丁目に所在し、東武東上線の朝霞駅の北東約1.4kmの地点に位置する。遺跡は武蔵野台地北東部に位置し、標高は約23m、沖積面との標高差は約17mである。

遺跡が所在する朝霞市は、埼玉県の南東部に位置する。東側は荒川によって区切られ、市内のほぼ中央を南東から北西に目黒川が流れている。地形面は台地部の武蔵野面、目黒川流域の立川面、荒川低地の沖積面からなっている。

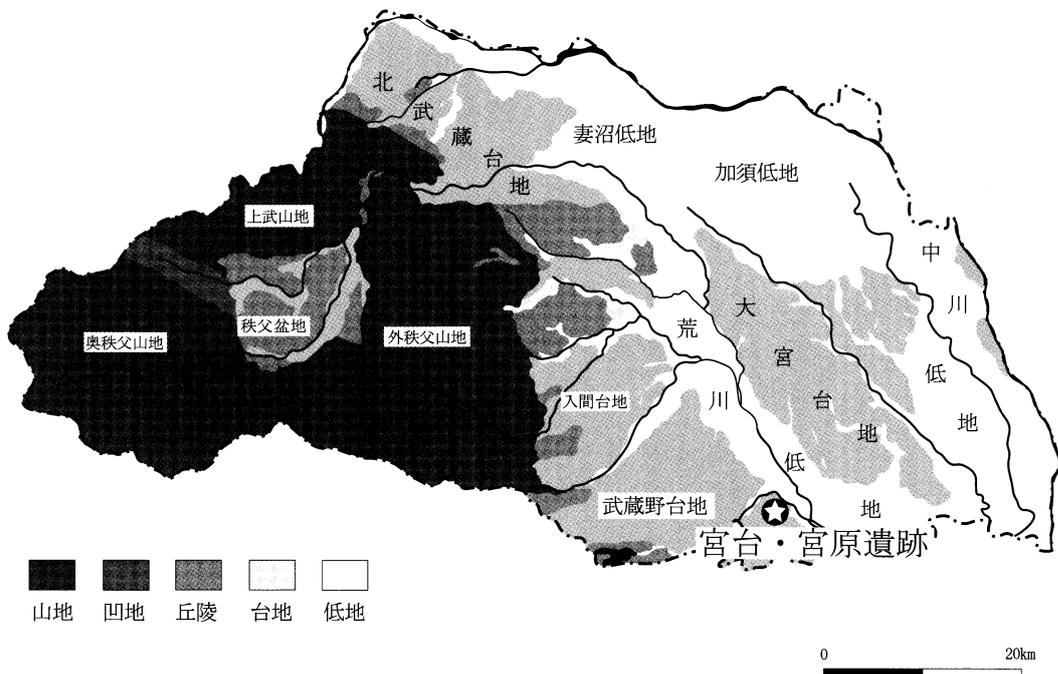
地域の中央を流れる目黒川は、多摩川の名残川と考えられ、流域の幅は数百mと広く標高差は15~20mである。地下水が目黒川の水位より高いため、崖線に多くの湧水が見られる。また、崖線の斜面には武蔵野の面影を残す雑木林があり、神社または公園として整備され、市民の憩いの場となっている。

本地域は台地上に旧石器時代から近世までの遺跡が多く所在している。次に、各時期の周辺の遺跡を

概観する。

目黒川流域には旧石器時代の遺跡が多く、上流域には多聞寺前遺跡、下里本邑遺跡、中流域には市場坂遺跡、池田遺跡、下流域には泉水山・富士谷遺跡が著名である。泉水山・富士谷遺跡からは国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代は、草創期中道・岡台遺跡から大形の槍先形尖頭器と石斧がまとまって出土し注目されるが、遺跡数は多くない。前期は環境の温暖化に伴う縄文進海によって、荒川低地に海が入り込むため貝塚が発達する時期である。隣接する富士見市・ふじみ野市・川越市では多くの地点貝塚が形成される。朝霞市では城山遺跡で小規模な貝塚が見つかる。中期になると遺跡数及び集落の規模が大きくなり、目黒川に沿って城山遺跡、泉水山・富士谷遺跡、新座市池田遺跡、嵯峨山遺跡などが知られている。後期になると遺跡数は減少し、和光市丸山台遺跡、



第1図 埼玉県の地形図

柿ノ木坂遺跡が知られる程度である。

弥生時代は、遺跡の西側に隣接する向山遺跡で、中期の宮ノ台期から後期全般にかけての集落跡と方形周溝墓群が多数見つかっており、銅釧、銅鐸形土製品、鉄剣、鉄斧、挟入柱状片刃石斧などが出土している。宮台・宮原遺跡第7地点の調査では、弥生時代に限定できる遺構は発見されていないが、第16号土壙から有鉤銅釧が、第1号溝跡から挟入柱状片刃石斧の一部が見つかっており、向山遺跡との関連が注目される。

古墳は宮台・宮原遺跡の北側に、根岸古墳群と総称される柵塚古墳、一夜塚古墳、狐塚古墳がある。その内、一夜塚古墳は昭和18年に朝霞第二小学校の校舎建設に伴い破壊されている。当時の記録では径約50m、高さ約7mの円墳で、内部主体は木炭槨であったとされ、出土品から6世紀前半代と推定されている。また、狐塚古墳も現在は消滅している。

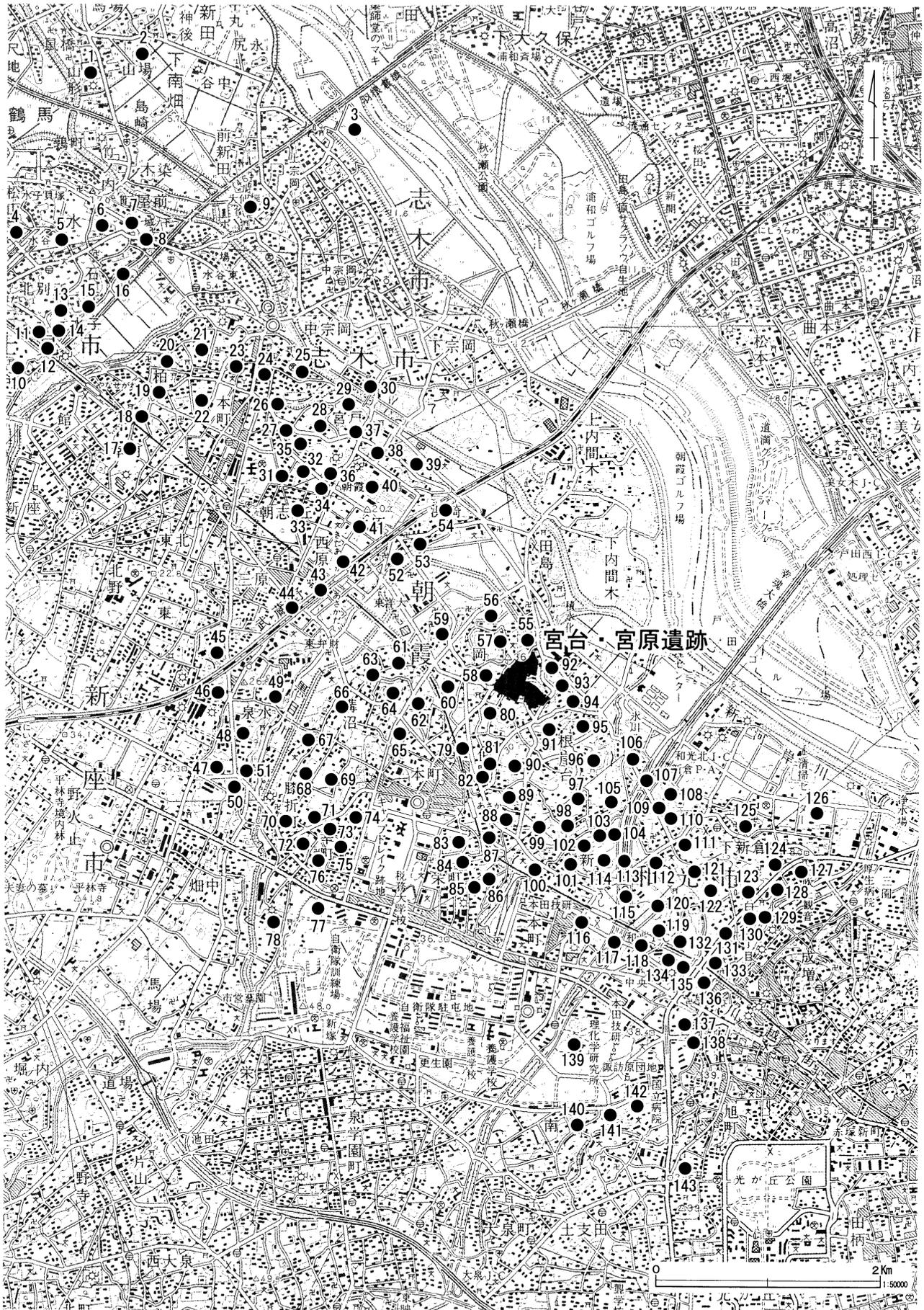
唯一現存する柵塚古墳は、根岸古墳群の盟主墳と考えられる。墳丘の規模は全長約60m、後円部径約40m、高さ約7mを測り、市内最大規模の前方後円墳である。平成9・10年度に保存整備を目的とする確認調査が実施され、周溝は幅約12~15m、深さは現地表面から2.5mで、主体部が2箇所確認されている。周溝からは多数の円筒埴輪と共に家形埴輪が出土している。墳丘の形状や埴輪から、6世紀第2四半期後半から第3四半期前半と考えられる。

古墳時代の遺跡は市内で16遺跡確認されている。その内、集落遺跡は12遺跡である。時期ごとに見る

と前期が9遺跡、中期が2遺跡、後期が9遺跡で前期と後期が多く、中期が少ない傾向が見られる。宮台・宮原遺跡では第3地点で弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡5軒と円形周溝墓1基、第4地点で方形周溝墓1基が検出されている。他の主な遺跡は、近接する向山遺跡で住居跡が多く検出されているが詳細は不明である。大瀬戸東遺跡は前期の住居跡5軒と後期の住居跡33軒。中道・岡台遺跡は前期の住居跡17軒と後期の住居跡5軒、ハケタ・中道遺跡では前期の住居跡2軒と後期の住居跡39軒が検出されている。

奈良・平安時代の集落は、朝霞市内に平成12年の時点で16遺跡が確認されている。照林氏はこれを8地域にグルーピングし検討している。それによると、宮台・宮原遺跡と向山遺跡、宮台遺跡が有機的関連をもつ一つの集落として捉え、向山遺跡報告書が未刊行なので詳細は不明であるが、多数の住居跡と掘立柱建物跡が集中することや、円面硯・緑釉陶器・灰釉陶器・石製丸靱など官衙的な遺物が見られることから、当該地域の中心的な集落であった可能性が指摘されている。また、宮台・宮原遺跡では掘立柱建物跡は検出されていないが、鉄鏃等の金属製品や墨書土器が出土している。

埋蔵文化財ではないが、遺跡範囲内にある旧高橋家住宅は、江戸時代中期に造られた住宅と畑、山林が当時の景観をよく残していることから、平成13年に宅地、畑、山林、雑種地及び道を含めて国指定重要文化財に指定されている。



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	山形	49	泉水山・富士谷	97	向原・中笹原
2	難波田代館跡	50	下の原第四	98	東流山・水久保
3	関根兵庫館跡	51	島の上	99	西流山第一
4	打越	52	西久保・宮山	100	北原新田
5	松山	53	中道・中道下	101	小井戸
6	水子貝塚	54	八部・峽	102	松山
7	東前	55	宮台	103	上谷津
8	観音前	56	城戸	104	向原
9	宿	57	向山	105	南ヶ谷戸
10	北通	58	中谷津	106	上之郷
11	栗谷川	59	中道・岡台	107	花之木
12	別所	60	榎戸・諏訪原	108	半三池
13	正網	61	古屋敷	109	峯
14	正網南	62	諏訪原・中道	110	峯前
15	東台	63	宮下	111	四ツ木
16	神明	64	大屋敷	112	漆台
17	西原大塚	65	行人塚・金子塚下	113	柿ノ木坂
18	新邸	66	後根	114	柿ノ木坂西
19	中道	67	芹沢	115	水久保
20	城山	68	北浦第三	116	丸山
21	中野	69	北浦第四	117	丸山台
22	氷川前	70	北浦第二	118	義名山
23	市場裏	71	北浦第一	119	谷戸島
24	市場	72	膝折宿	120	妙蓮寺
25	田子山	73	上の原第四	121	仏ノ木
26	富士前	74	上の原第三	122	宮ノ脇
27	大原	75	上の原第二	123	妙典寺
28	大山第二	76	上の原第一	124	下里
29	大山第一	77	蛇窪	125	午王山
30	馬場	78	子の神	126	榎堂
31	大新田第一	79	天ヶ久保第一	127	吹上
32	大新田第二	80	宮原・塚越	128	吹上貝塚
33	中通第一	81	天ヶ久保第三	129	吹上原
34	中通第二	82	天ヶ久保第二	130	吹上原横穴墓群
35	立山	83	平沢・原畑	131	市場峽・市場上
36	道合・立出	84	越戸	132	庚塚
37	大瀬戸	85	萱野第二	133	城山
38	八ヶタ・中通	86	萱野第一	134	中丸
39	長塚	87	原畑・越戸第二	135	浅川
40	八塚	88	原畑・越戸第一	136	城山南
41	北原・谷津	89	西流山第一	137	白子宿山
42	北割・西原	90	馬掘	138	越之上
43	南割・西久保	91	新井前	139	向山
44	弁財上・弁財谷	92	根岸通第一	140	西越後山
45	下の原第一	93	根岸通第二	141	越後山
46	下の原第二	94	根岸通第三	142	牛房
47	下の原第三	95	新屋敷	143	白子向山
48	島の上・泉水山	96	稲荷山・郷戸		

### Ⅲ 遺跡の概要

宮台・宮原遺跡は、武蔵野台地北東部に位置する、旧石器時代から中世の複合遺跡である。

遺跡は、朝霞市教育委員会が6回の発掘調査を実施しており、旧石器時代の石器集中・礫群、弥生時代の方形周溝墓、弥生～古墳時代の住居跡、平安時代の住居跡等が発見されている。

#### 【第1地点】

昭和59年調査、平安時代の住居跡2軒、時期不明の溝跡2条が検出された。遺物は縄文土器と、土師器、須恵器等である。

#### 【第2地点】

平成3年調査、旧石器時代の礫群3箇所（Ⅳ層）、弥生時代の住居跡8軒、平安時代の住居跡5軒、時期不明の溝跡2条が検出された。遺物はナイフ形石器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

#### 【第3地点】

平成7年調査、縄文時代の住居跡2軒、炉穴10基、弥生～古墳時代の住居跡5軒、時期不明の溝跡2条が検出された。遺物は縄文土器・石器、弥生土器、須恵器、鉄製品が出土している。

#### 【第4地点】

平成9年調査、旧石器時代の石器集中、礫群（Ⅲ層）、竪穴状遺構は平安時代の住居跡の可能性が高い。時期不明の溝跡1条は方形周溝墓の一部の可能性が高い。遺物は旧石器時代の石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

#### 【第5地点】

平成15年調査、旧石器時代の石器集中1箇所、縄文時代の土壇、弥生時代の方形周溝墓1基、時期不明の住居跡2軒が検出された。遺物は旧石器時代の石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

#### 【第6地点】

平成16年調査、遺構・遺物は検出されなかった。

#### 【第7地点】

今回の発掘調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の土壇、平安時代の住居跡7軒と土壇、溝跡、中世の溝跡が検出された。遺物は旧石器時代の石器、縄文土器・石器、弥生時代後期から古墳時代前期の有鉤銅釧、磨製石斧、平安時代の土師器、須恵器、金属製品、中世の陶磁器類が出土した。

旧石器時代の調査は、10mグリッドの一角に2×2mのトレンチを設定し立川ローム層の下底部まで掘り下げた。遺物はナイフ形石器の先端部破片が出土した。

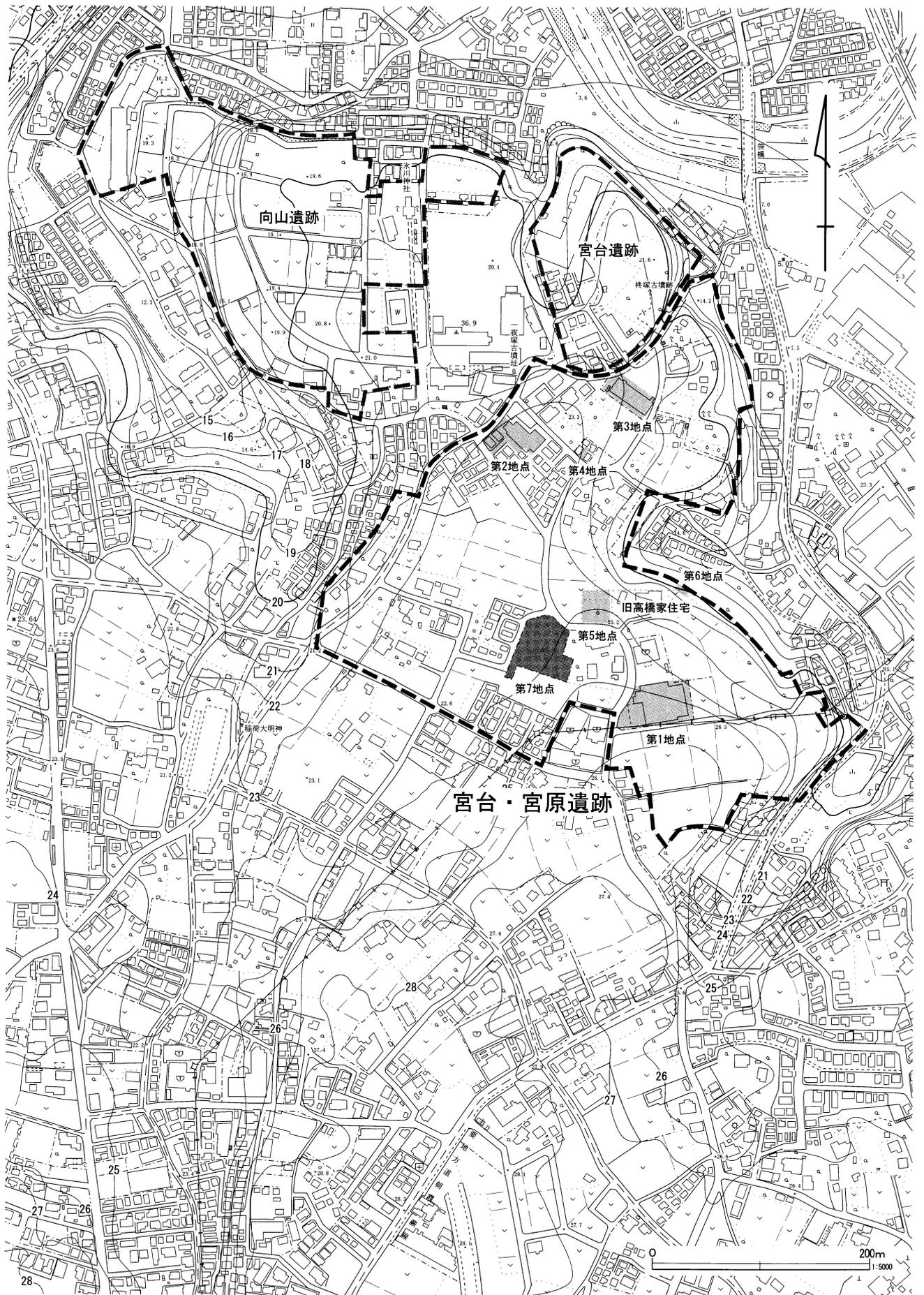
弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構・遺物は、第16号土壇から有鉤銅釧が検出された。しかし、土壇の形状は不整形で掘り込みも浅く、他に伴う遺物がないため、遺構の帰属時期は不確かである。

平安時代の遺構・遺物は、住居跡7軒と土壇、溝跡が検出された。第2号住居跡から、鉄鏃2点、刀子と墨書土器を含め、土師器の甕と須恵器の坏・蓋が多数出土した。第5号住居跡からは、刀子、椀形鍛冶滓、墨書土器と共に、須恵器坏、蓋、高台付壺、長頸瓶が出土している。

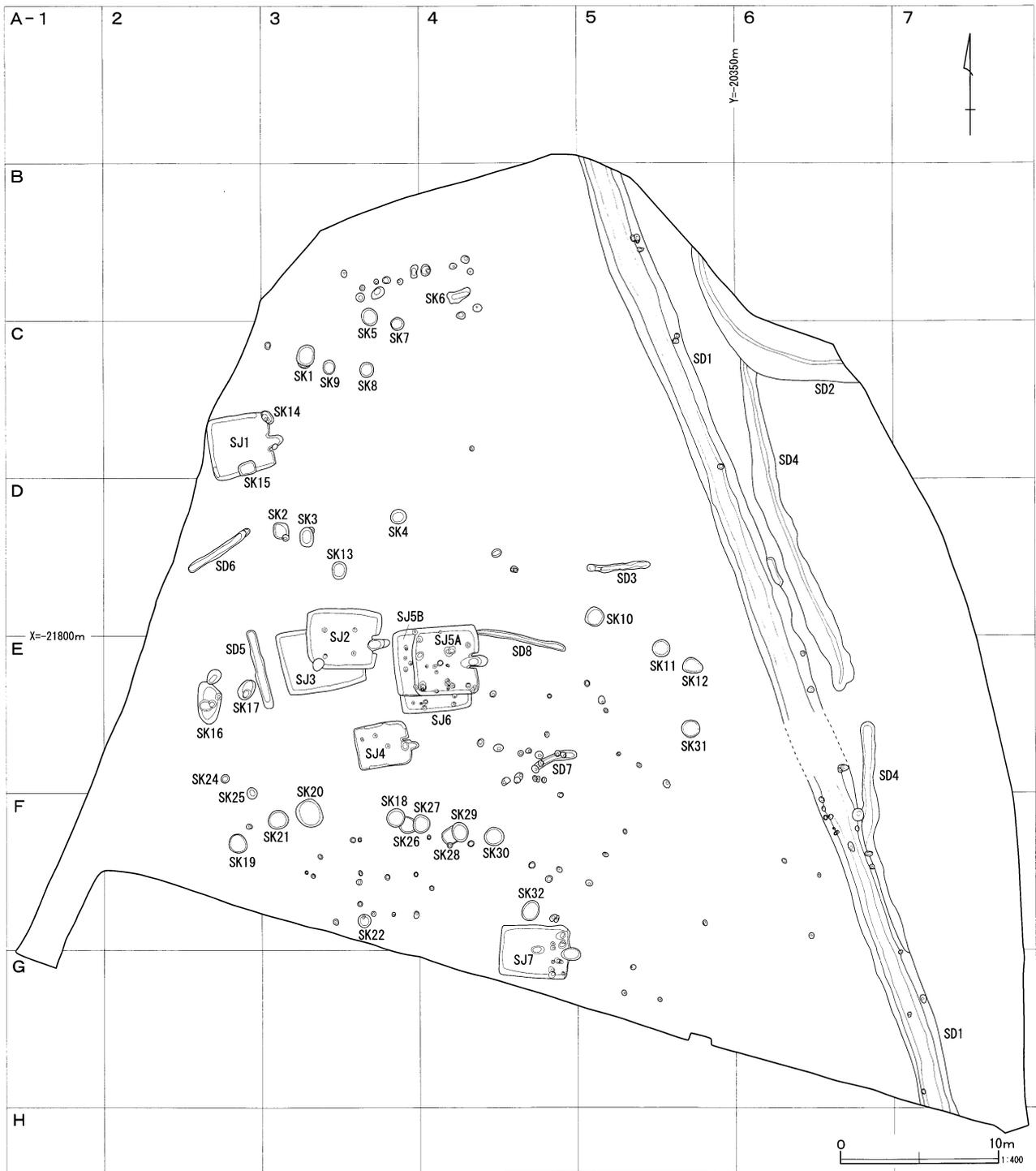
中世の遺構は、第1号溝跡が調査区を南北に横断しており、幅は約3.0mの深さ約1.0mである。この溝跡は朝霞市教育委員会が実施した別地点の調査区からも検出されている。覆土中に硬化面が確認され、道として利用されていた時期があったと想定できる。

宮台・宮原遺跡は、南北約530m、東西約500mと広範囲にわたっており、調査地点によって検出される遺構・遺物の時期が異なっている。大きくは遺跡範囲の北側の第2～4地点と南側の第1・5～7地点に分けられる。前者をAグループ、後者をBグループと便宜的に区分して見ていくことにする。

Aグループは弥生時代の住居跡、方形周溝墓が検出され、Bグループは平安時代の住居跡が検出されている。Aグループに関しては宮台遺跡・向山遺跡に近い位置にありそれとの関連が注目される。一方、



第3図 遺跡周辺の地形図



第4図 遺構全体図

Bグループは巨視的に見れば向山遺跡の奈良・平安時代の集落と有機的に関連するが、微視的には一つの小さなまとまりとして捉えることが出来ると思わ

れる。また、鉄製品が住居跡としては豊かで、椀形鍛冶滓等が見られることから小鍛冶との関連が指摘できそうである。

参考文献

照林敏郎 2004 「朝霞市における奈良・平安時代の集落について」『あらかわ』第7号 pp.83-102  
 照林敏郎 2005 「朝霞市の古墳時代遺跡につて」『あらかわ』第8号 pp.87-112

## IV 遺構と遺物

### 1. 住居跡

今回の調査区から、住居跡7軒が検出された。住居跡の分布は調査区の西側半分に偏り、N-29°-Wの方向で等高線に沿って直線状に並んでいる。また、カマドが全て東壁に造られ、主軸方向がN-80°-E前後に統一されている。

住居跡の配置は、第1号住居跡が調査区の北西端、第7号住居跡が南端に位置し、その中間に、第2～6号住居跡がまとまっている。このまとまりは第2・3号住居と第5・6号住居が重複しており、また、第2号住居跡と第5号住居跡が接近しているため、同時に建てられたと思われるのは1軒ないし2軒（第4号住居跡と第6号住居跡が接近している）であったと思われる。

第2・3号住居跡と第5・6号住居跡では床面に焼土の範囲があり、第5号住居跡からは椀形鍛冶滓が出土しており、小鍛冶との関係が想定できる。

#### 第1号住居跡（第5・6図）

C-2・3グリッドに位置する。第2～6号住居跡が調査区の中央でまとまっているのに対し、本住居跡は北側にやや離れて存在する。

住居跡は、第14・15号土壌が北東コーナーと南壁の一部と重複している。覆土の状況から土壌の方が新しい。

住居跡の規模は南北4.0m、東西4.0mとほぼ正方形である。掘り込みは遺構確認面から約0.2mと比較的深い。主軸方向はN-76°-Eである。

覆土は上層に耕作による攪乱がかなり入っていたが、床面の残りは比較的良好であった。掘り方は、中央部を残し周辺を浅く窪めており、ロームブロックを主に埋めていた。住居跡の中央の床面は硬化面として確認された。

カマドは東壁の中ほどに位置する。南側の袖部の一部に攪乱が見られる。覆土上層はカマド構築に使

われた白色粘土が多く含まれている。

住居跡に伴う施設に関して、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝はカマドのある東壁以外はコ字状に巡っている。幅0.3mで深さは0.3mである。

遺物は、須恵器の坏が多く、また残存率も高い。10は口縁部に墨書が施されている。土師器甕は口縁破片と台坏甕の台部の破片である。11は円盤状で破面が研磨されており、砥石などの用途に用いられたと思われる。14は鉄製の刀子である。

#### 第2・3号住居跡（第7～12図）

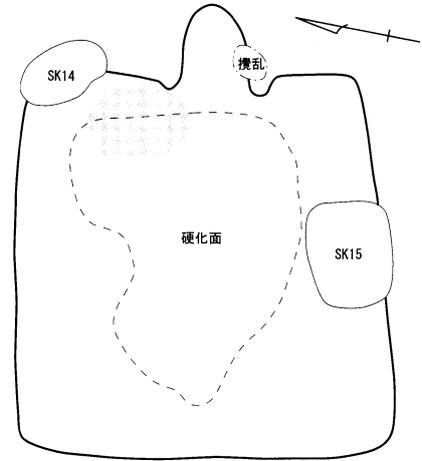
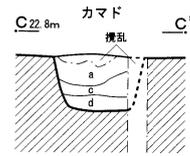
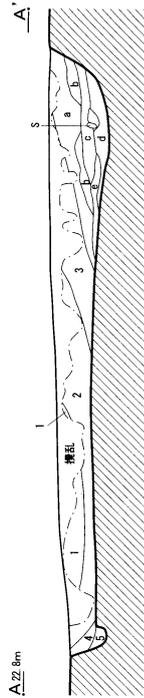
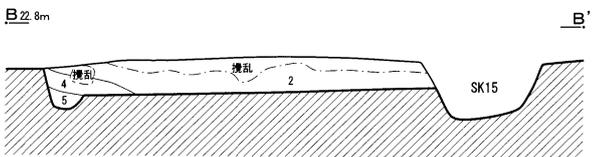
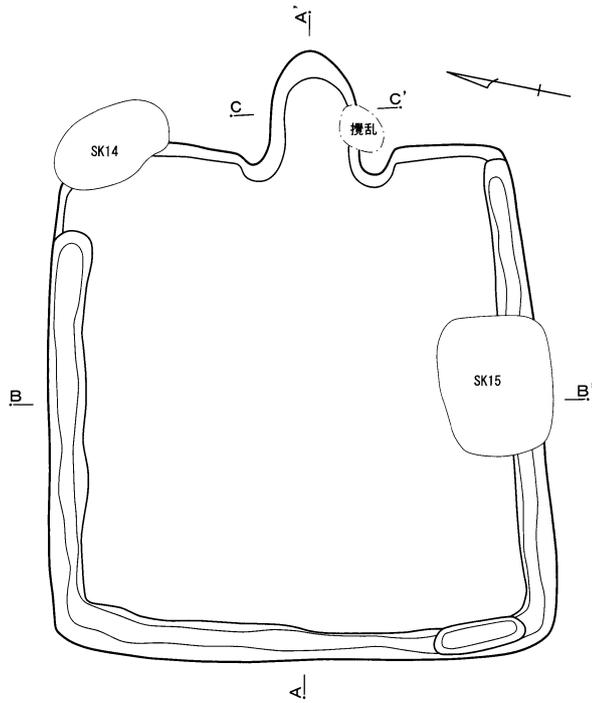
D・E-3グリッドに位置する。第5・6号住居跡が東側に近接しており、第2号住居跡のカマドの先端は接しそうである。南側に第4号住居跡が近接し群をなしている。

遺構確認の段階で第2号住居跡と第3号住居跡の新旧関係が明らかであった為、第2号住居跡の調査を終了した後、第3号住居跡の調査を実施した。

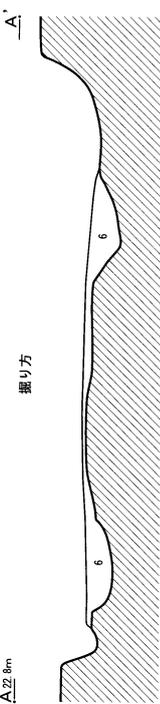
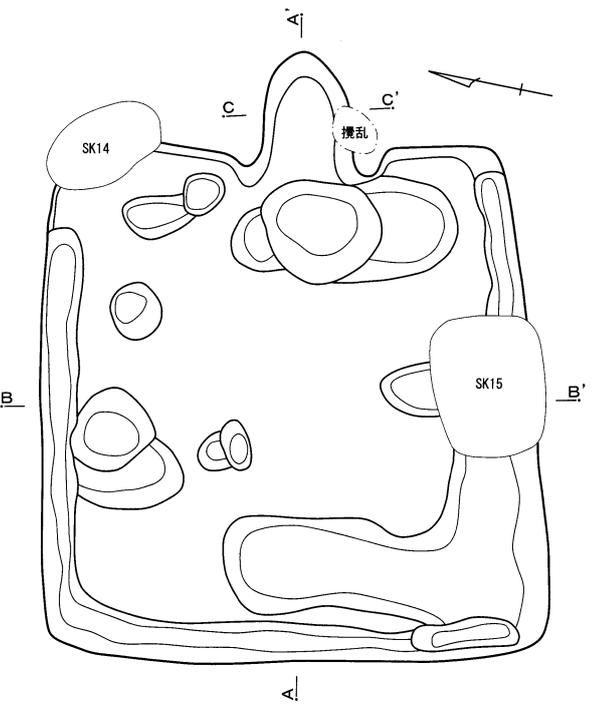
第2住居跡の規模は、東西4.8m、南北3.8mの長方形である。掘り込みは遺構確認面から約0.3mと比較的深い。主軸方向はN-83°-Eである。

カマドは東壁の中ほどに位置する。a・b層は天井の崩落土、c～e層は焼土粒子と炭化物が多く含まれ煙道部と思われる。柱穴は4箇所検出されたが、床面からの掘り込みは約0.15mと浅かった。壁溝はカマドの部分を除いて全体に巡っており、幅0.3mで深さは0.4mである。P2東側の床面には焼土ブロックがある。

遺物の出土状況は、金属器はカマドの北側から46の鉄鏃が、南西部のP4の近くから47の鉄鏃が検出された。48の刀子は南壁に近接して出土している。須恵器の坏は南壁付近からほぼ完形の4～6・9が棚などから崩れ落ちたかのような状況で出土した。9の須恵器坏には“東”の字が墨書されていた。須



カマド粘土  
流出範囲



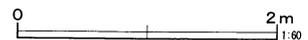
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む しまり弱
- 2 暗褐色土 焼土ブロック、ローム粒子を含む しまりあり
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む しまりあり
- 4 暗褐色土 φ2~3cmのロームブロックを多量含む しまり・粘性あり
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多量含む しまり・粘性あり

カマド

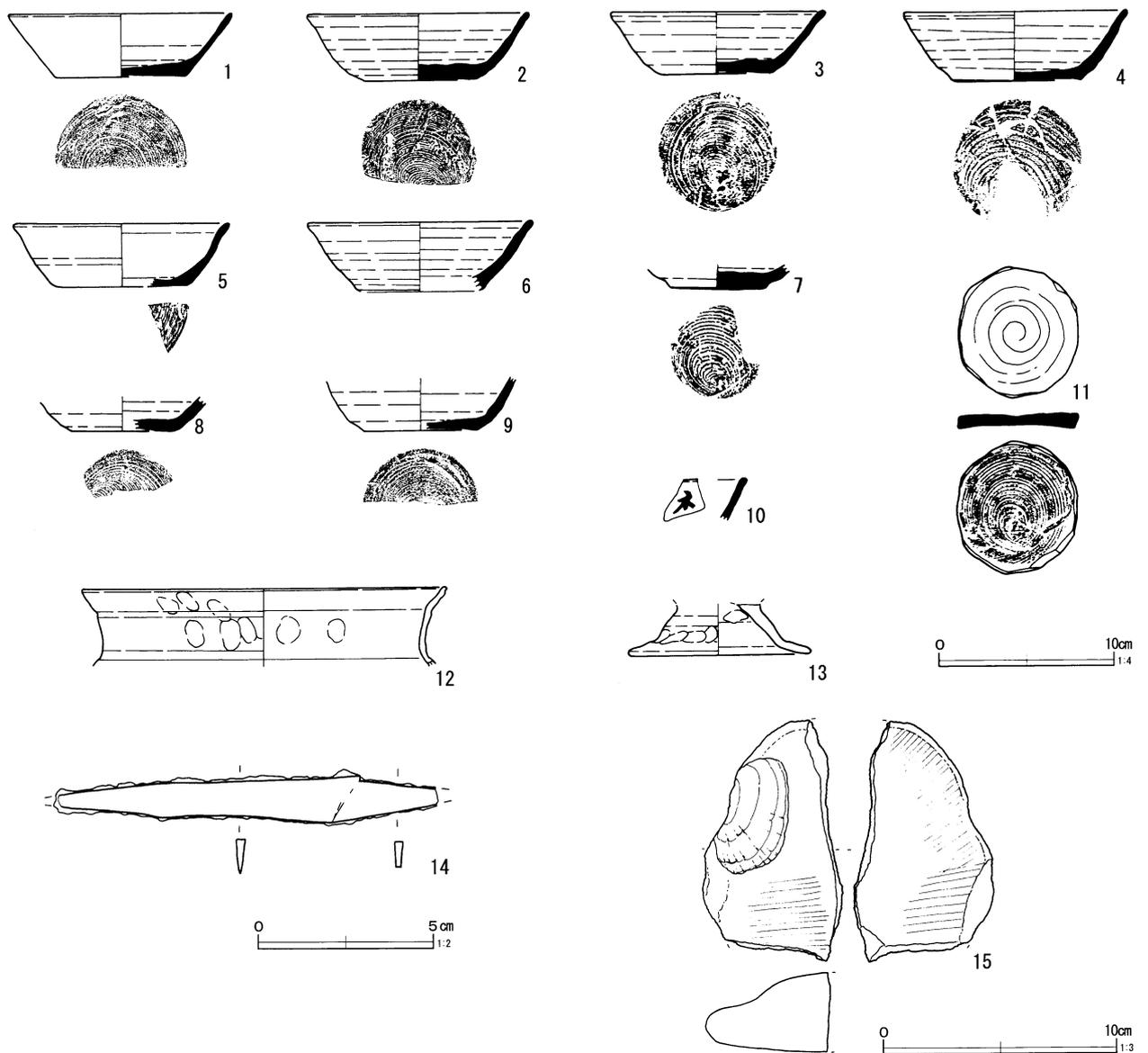
- a 暗褐色土 白色粘土を多量含む ローム粒子を少量含む しまり・粘性あり
- b 暗褐色土 ローム粒子を含む 焼土粒子を少量含む しまりあり
- c 黒褐色土 焼土粒子を多量に含む ローム粒子・炭化粒子を少量含む
- d 黒褐色土 焼土ブロックを多量含む 炭化粒子を含む
- e 黄褐色土 黒色土をまばらに含む しまり強

【掘り方】

- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量含む



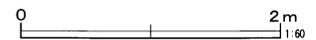
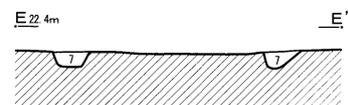
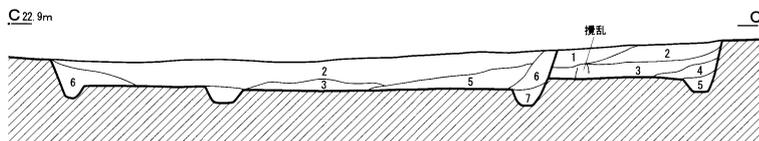
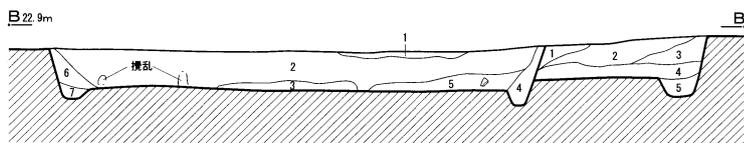
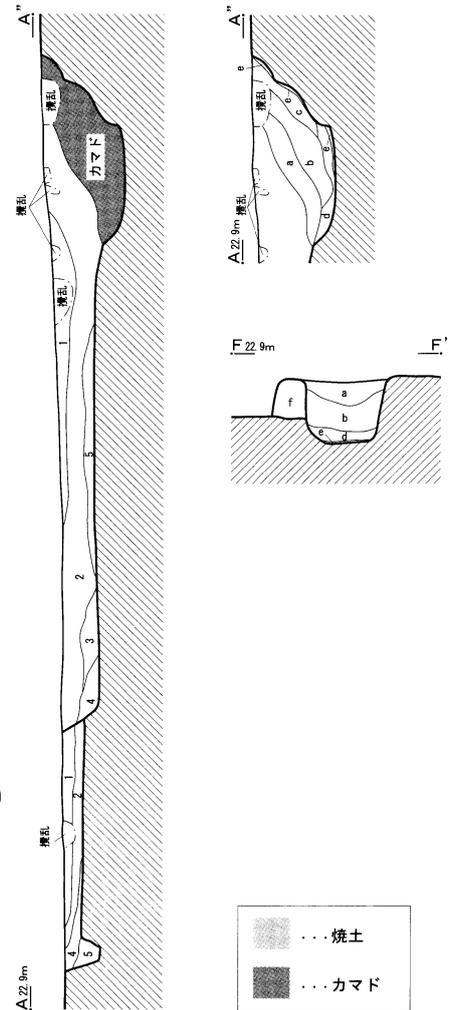
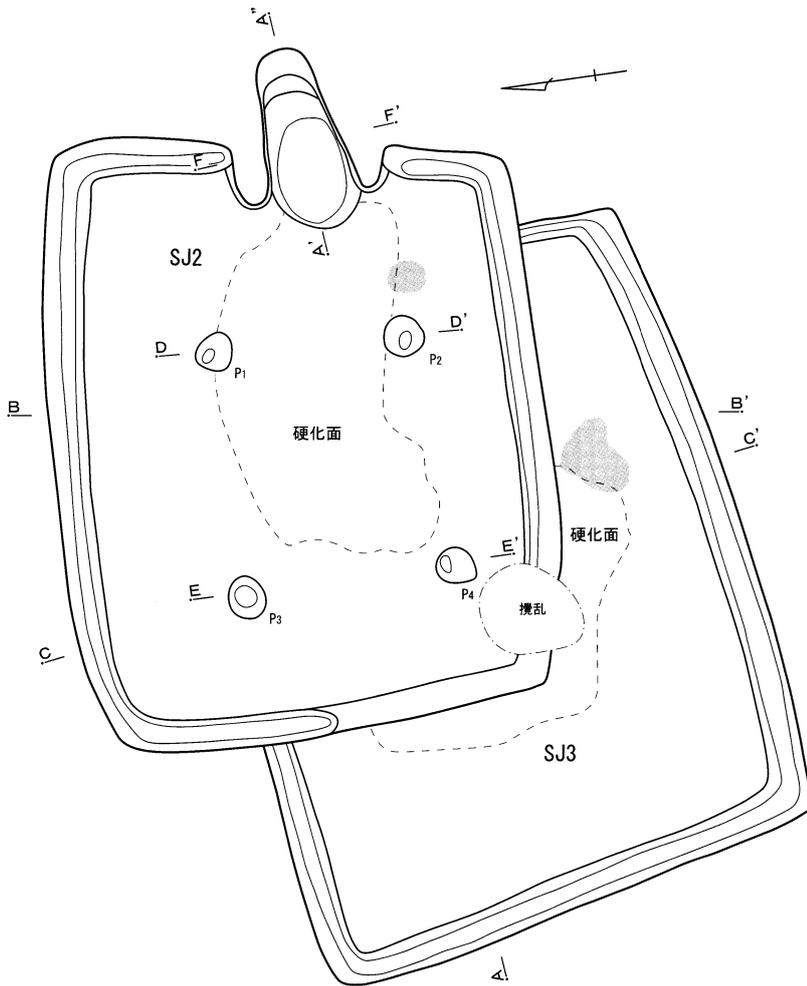
第5図 第1号住居跡



第6図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	(12.7)	3.5	7.4	1/2	白粒 黒粒	良好	灰褐
2	須恵器	坏	(12.6)	3.8	6.5	1/3	赤粒 白粒	良好	灰
3	須恵器	坏	12.0	3.6	6.7	4/5	白粒	普通	灰
4	須恵器	坏	(12.2)	4.0	7.3	1/2	雲 赤粒 白粒	普通	にぶい黄橙
5	須恵器	坏	(12.2)	3.6	(6.8)	1/5	黒粒	良好	灰白
6	須恵器	坏	(12.8)	4.0	(7.3)	1/5	砂粒 赤粒 白粒	普通	橙
7	須恵器	坏	—	[1.5]	5.6	破片	砂粒 白粒	普通	灰黄
8	須恵器	坏	—	[2.0]	(6.0)	破片	砂粒 白粒	普通	灰
9	須恵器	坏	—	[3.0]	(6.7)	1/4	白粒	普通	灰
10	須恵器	坏	—	[2.3]	—	破片	赤粒 白粒	普通	にぶい黄橙
11	須恵器	坏	長径 7.5	厚さ 0.8	短径 6.8		砂粒 赤粒 白粒	普通	橙
12	土師器	甕	(20.7)	[4.5]	—	破片	角閃石 白粒	普通	にぶい橙
13	土師器	台付甕	—	[2.9]	(10.4)	台部 1/4	雲 白粒	良好	にぶい黄橙
14	鉄製品	刀子	長さ(10.8)	刃幅 1.3	背幅 0.2	両端欠			
15	石製品	磨石	長さ(10.3)、幅(5.9)、厚さ(3.4)cm			重さ260.6g	角閃石		



### SJ2

- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量含む しまりなし
- 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒を含む しまりなし
- 3 黒褐色土 φ2cmの粘土ブロック含む しまり・粘性あり
- 4 黒褐色土 ローム粒子・φ1~5cmのロームブロックを含む しまりややあり
- 5 黒褐色土 ローム粒を微量、焼土粒を含む しまりややあり
- 6 黒褐色土 ローム粒子を含む しまりあり
- 7 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む しまりやや少ない  
柱穴の覆土

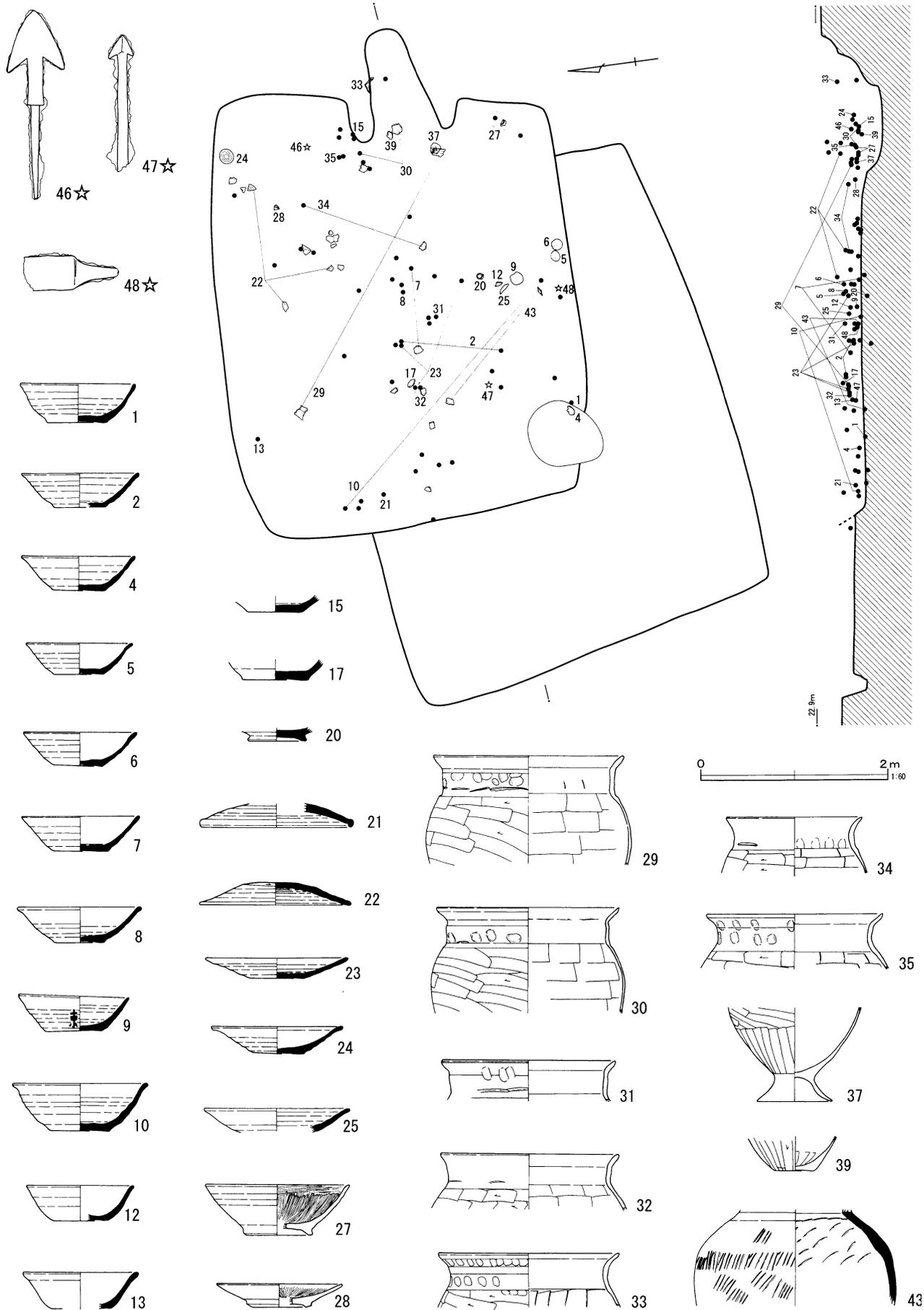
### SJ3

- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む しまりあり
- 2 黒褐色土 φ1~2cmのロームブロックを多量含む ローム粒子を少量含む しまり弱
- 3 暗褐色土 φ2~5cmのロームブロックを多量含む しまり普通
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量含む 白色粘土(φ0.5cm)を少量含む しまり普通
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多量含む しまり普通

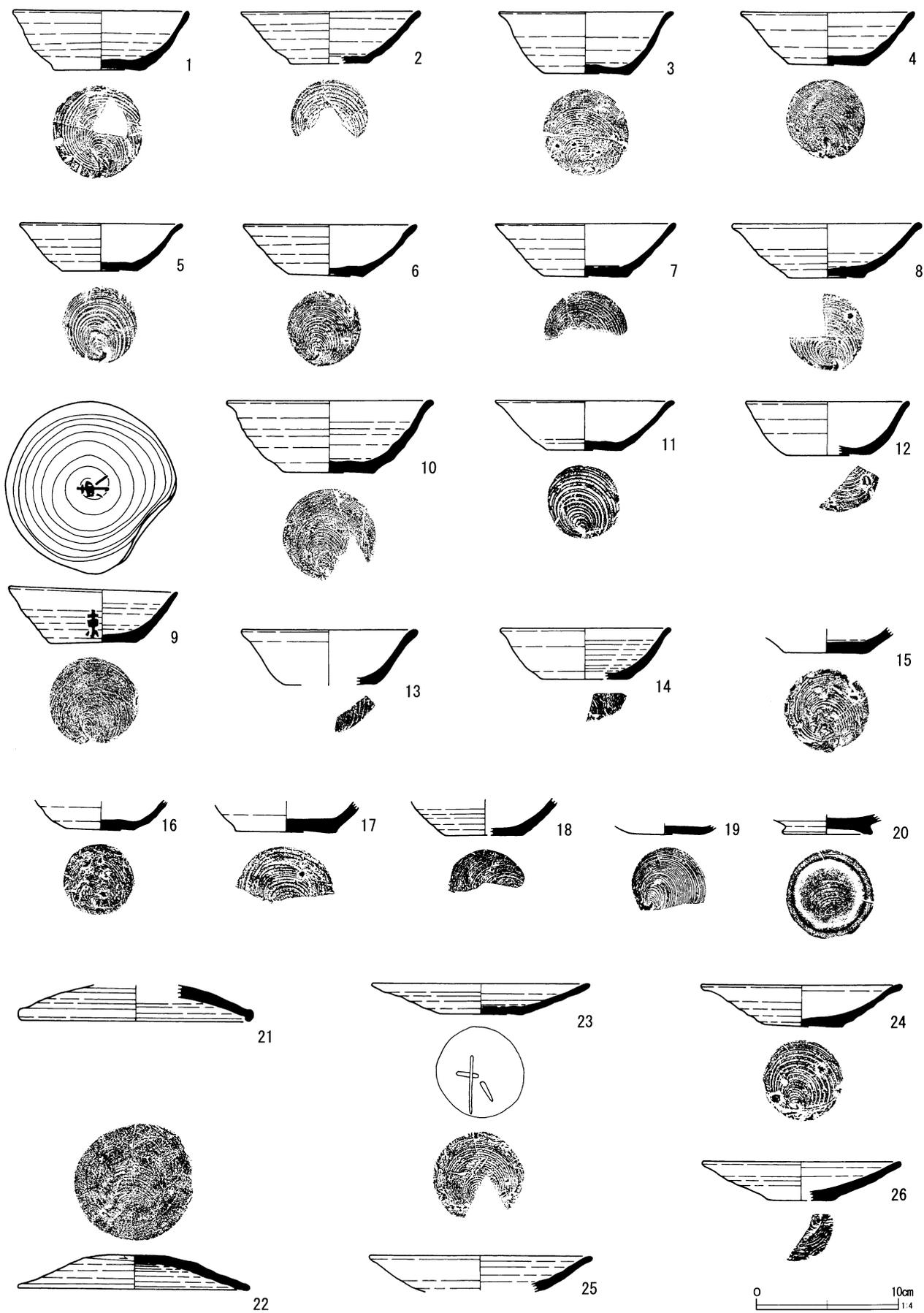
### SJ2 カマド

- a 黒褐色土 φ1~2mmのローム粒子を微量、φ1~5mmの焼土粒子を少量、粘土を微量含む しまりあり (天井からの崩落)
- b 黒褐色土 φ1~2mmのローム粒子を微量、φ1~5mmの焼土粒子を少量、φ1~2cmの焼土ブロックを微量、炭化物粒子を微量、粘土を少量含む しまりなし (天井から崩落の流れ込み)
- c 暗褐色土 φ1~2mmのローム粒子を微量、φ1~5mmの焼土粒子・粘土粒子を少量含む しまりなし
- d 黒褐色土 粘土、φ1~5mmの焼土粒子を少量含む しまり・粘性あり
- e 黄褐色土 φ1~5mmのローム粒子・φ1~5cmのロームブロックを含む φ1~10mmの焼土粒子を少量含む しまりなし (上部に焼土を多く含む)
- f 灰褐色土 粘土層、φ1~3mmの焼土粒子・炭化物粒子を含む (袖部分)

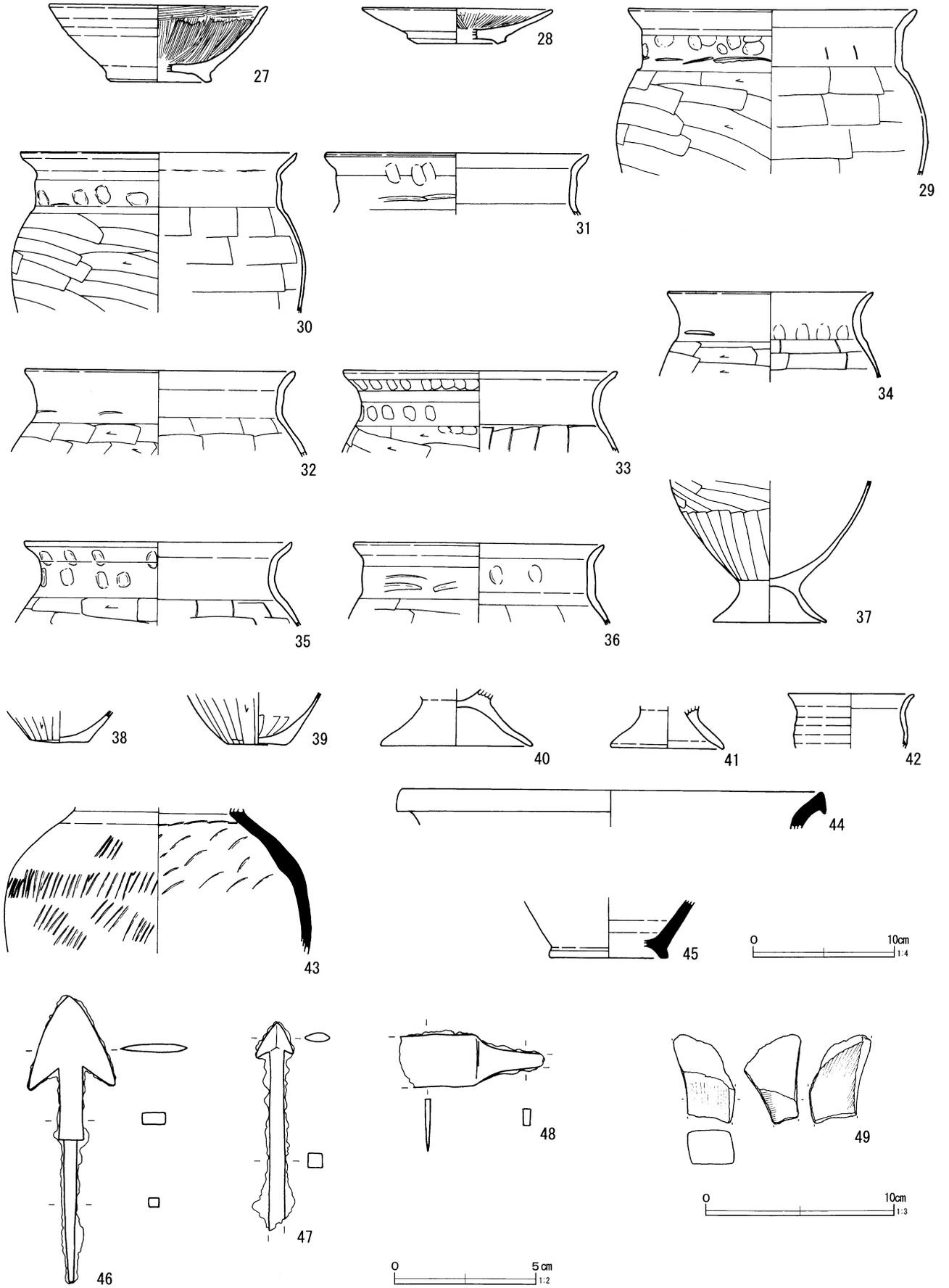
第7図 第2・3号住居跡



第8图 第2号住居跡遺物出土状況



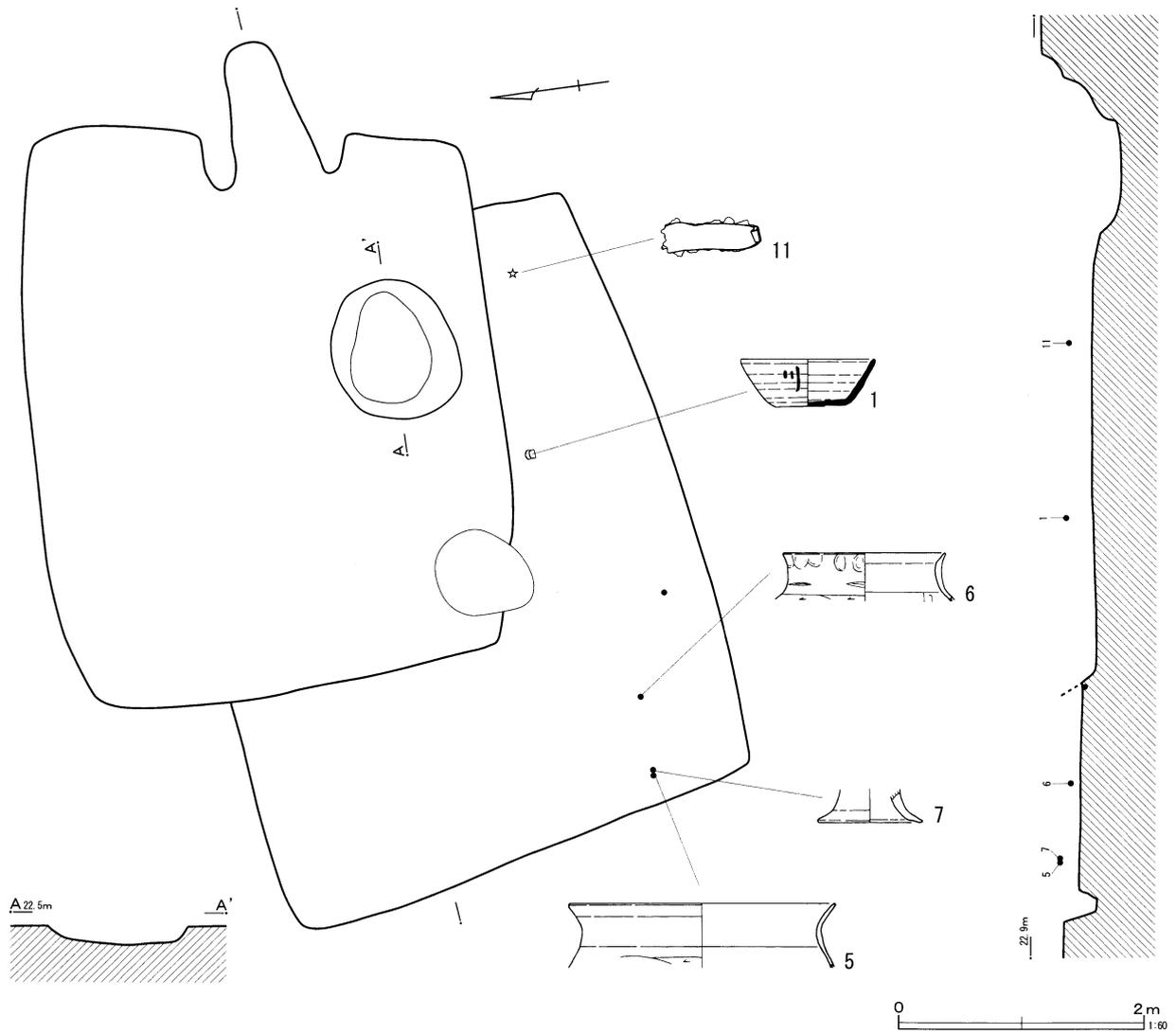
第9图 第2号住居跡出土遺物(1)



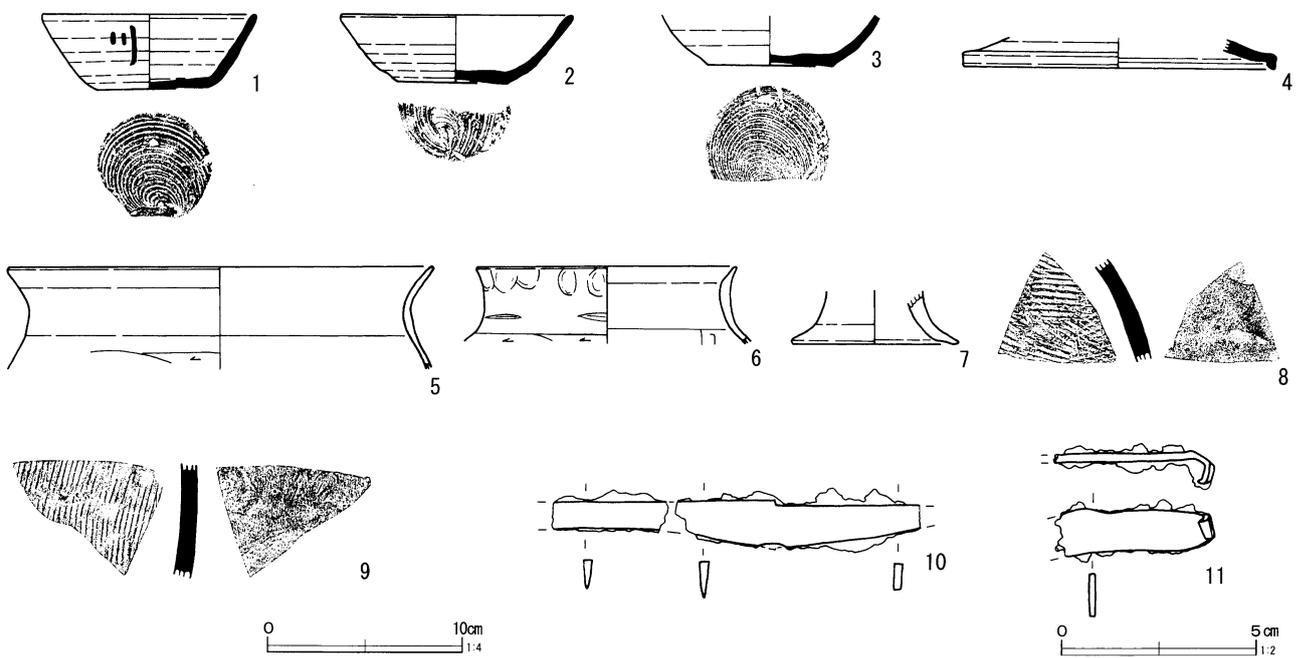
第10图 第2号住居跡出土遺物(2)

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	12.2	4.2	6.5	ほぼ完形	石	良好	褐
2	須恵器	坏	(12.4)	3.6	(5.5)	1/2	白粒 黒粒	良好	灰
3	須恵器	坏	12.0	4.2	6.0	ほぼ完形	白粒 黒粒	良好	紫灰
4	須恵器	坏	12.0	3.8	5.6	2/3	白粒	普通	灰
5	須恵器	坏	11.5	3.4	5.4	完形	石英 砂粒	普通	暗灰
6	須恵器	坏	12.0	3.6	5.2	完形	砂粒 白粒	普通	灰褐
7	須恵器	坏	12.5	3.7	6.0	1/2	白粒 黒粒	良好	灰
8	須恵器	坏	(13.0)	3.8	5.5	1/2	白粒 黒粒	普通	灰褐
9	須恵器	坏	11.8	3.8	6.2	完形	白粒 黒粒	良好	灰褐
10	須恵器	塊	(14.5)	5.0	6.5	1/2	白粒 黒粒	普通	灰褐
11	須恵器	坏	12.5	3.5	5.4	1/3	砂粒 白粒	普通	灰褐
12	須恵器	坏	(11.5)	3.7	(5.8)	1/3	白粒 黒粒	良好	灰褐
13	須恵器	坏	(12.4)	3.9	(6.2)	破片	白粒	普通	灰
14	須恵器	坏	(11.9)	3.6	(6.0)	破片	白粒 黒粒	良好	青灰
15	須恵器	坏	—	[1.7]	6.0	底部のみ	白粒 黒粒	普通	灰
16	須恵器	坏	—	[2.0]	4.6	底部のみ	砂粒 白粒	良好	灰褐
17	須恵器	坏	—	[2.1]	(7.0)	底部破片	白粒	良好	暗灰
18	須恵器	坏	—	[2.5]	(5.5)	底部破片	白粒 黒粒	普通	灰
19	須恵器	坏	—	—	(5.0)	底部破片	白粒 針状物質	良好	橙褐
20	須恵器	高台付坏	—	—	6.0	底部のみ	砂粒	良好	灰
21	須恵器	蓋	(16.0)	[2.5]	—	1/5	白粒	良好	灰白
22	須恵器	蓋	16.0	2.4	—	完形	白粒 針状物質	良好	灰
23	須恵器	皿	15.2	2.2	6.0	4/5	針状物質	良好	灰
24	須恵器	皿	14.0	2.8	5.6	完形	砂粒 石	良好	赤褐
25	須恵器	皿	(15.6)	[2.4]	—	1/4	石英 白粒	普通	褐
26	須恵器	皿	(14.0)	2.7	(4.8)	1/5	白粒	良好	橙褐
27	ロクロ土師器	高台付塊	(15.3)	5.5	(7.3)	1/3	白粒	良好	橙
28	ロクロ土師器	高台付皿	(13.5)	2.5	(7.0)	1/4	白粒	普通	褐
29	土師器	甕	20.4	[11.6]	—	口縁～胴部	雲 角閃石 白粒	良好	橙
30	土師器	甕	19.5	[11.4]	—	1/2	雲 白粒	普通	橙
31	土師器	甕	(18.5)	[4.2]	—	破片	雲 白粒	良好	茶褐
32	土師器	甕	(19.0)	[6.0]	—	口縁のみ	雲 角閃石 白粒	良好	茶褐
33	土師器	甕	(19.2)	[5.8]	—	口縁のみ	雲 角閃石 白粒	普通	褐
34	土師器	甕	(14.5)	[6.0]	—	破片	雲 白粒	良好	にぶい橙
35	土師器	甕	18.8	[5.9]	—	口縁部のみ	雲 角閃石 白粒	良好	橙
36	土師器	甕	(17.8)	[5.6]	—	破片	雲 白粒	良好	茶褐
37	土師器	台付甕	—	[10.0]	(8.0)	1/2	雲 白粒 黒粒	普通	橙
38	土師器	甕	—	[2.3]	4.2	底部破片	白粒	普通	褐
39	土師器	甕	—	[3.8]	4.2	底部のみ	雲 砂粒	普通	褐
40	土師器	台付甕	—	[4.0]	10.6	脚部のみ	雲 白粒	普通	褐
41	土師器	台付甕	—	[2.9]	8.0	脚部のみ	雲 白粒	普通	褐
42	土師器	小型甕	(8.9)	[3.8]	—	破片	雲 角閃石	普通	褐
43	須恵器	甕	—	—	—	胴部破片	砂粒	良好	灰
44	須恵器	甕	(29.8)	—	—	口縁破片	黒粒	良好	灰
45	須恵器	壺	—	[4.2]	(8.3)	底部破片	黒粒	良好	灰
46	鉄製品	鉄鏃	長さ 10.2	身長 3.3	身幅 3.1	完形			
47	鉄製品	鉄鏃	長さ(7.4)	身長 1.2	身幅 1.3	頸部～茎部欠			
48	鉄製品	刀子	長さ(5.1)	刃幅 1.8	背幅 0.2	両端欠			
49	石製品	砥石	長さ(4.7)、幅(3.2)、厚さ(1.8)cm			重さ38.4g			



第11图 第3号住居跡遺物出土状况



第12图 第3号住居跡出土遺物

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

図版 No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	11.0	3.4	5.5	4/5	針状物質	普通	
2	須恵器	坏	11.8	3.5	5.8	ほぼ完形	針状物質 黒粒	普通	灰
3	須恵器	坏	—	[2.6]	6.4	1/3	白粒 針状物質	良好	灰褐
4	須恵器	蓋	(15.8)	[1.5]	—	破片	白粒	良好	灰
5	土師器	甕	(21.6)	[5.2]	—	破片	雲 白粒	普通	赤褐
6	土師器	台付甕	(13.2)	[3.9]	—	破片	雲 赤粒 白粒	普通	にぶい橙
7	土師器	台付甕	—	[2.7]	(8.7)	破片	雲 白粒	良好	橙
8	須恵器	甕	—	—	—	胴部破片	白粒 黒粒	良好	灰
9	須恵器	甕	—	—	—	胴部破片	白粒	良好	灰白
10	鉄製品	刀子	長さ(9.2)	刃幅 1.2	背幅 0.2				
11	鉄製品	板状品	長さ(4.1)	幅 1.1	—				

恵器の皿24は、北東コーナー近くから伏せた状態で出土している。土師器の甕は、カマド内及び周辺から出土している。

遺物は須恵器坏が主体で、他に皿・蓋が出土している。墨書土器は須恵器坏9の側面及び内側の底面に“東”が書かれている。皿23の底面に線刻が施されている。ロクロ土師器は、高台付碗27と高台付皿28の2点で内面には磨きが施されている。

金属製品は、46・47が鉄鏃、48は刃部先端を欠損しているが刀子と思われる。鉄鏃は2点とも長頸三角形鏃である。46はいわゆる平根鏃で、平造りの三角形鏃である。深めの逆刺を有し、関部は角関である。47はいわゆる尖根鏃で、両丸造りの長頸鏃である。鏃身部はほぼ正三角形で小さく、浅い逆刺をもつ。砥石は下半分を欠損している。

第3号住居跡は第2号住居跡と重複している。規模は、東西5.0m、南北4.0mの長方形である。掘り込みは遺構確認面から約0.18mと第2号住居跡より浅い。主軸（東西）方向はN-80°-Eである。柱穴は検出されなかったが、壁溝は、第2号住居跡と同様カマドを除く全体に巡っていると思われる。幅0.3mで深さは0.4mである。第3号住居と同じように南東の床面の一部焼土が見られる。

遺物量は少なく、分布は南側に偏っている。金属器は両端が欠損した刀子10と用途不明の11が出土している。須恵器は坏の側面に“川”が墨書されている1・2がほぼ完形に近い以外は破片資料である。

#### 第4号住居跡（第13～15図）

E-3グリッドに位置する。第2・3号住居跡と第5・6号住居跡の南側に近接している。

規模は、東西3.4m、南北2.8mと小形の長方形である。掘り込みは遺構確認面から約0.1mと浅く、遺構確認の段階で床面近くまで削平されていた。主軸方向はN-81°-Eである。

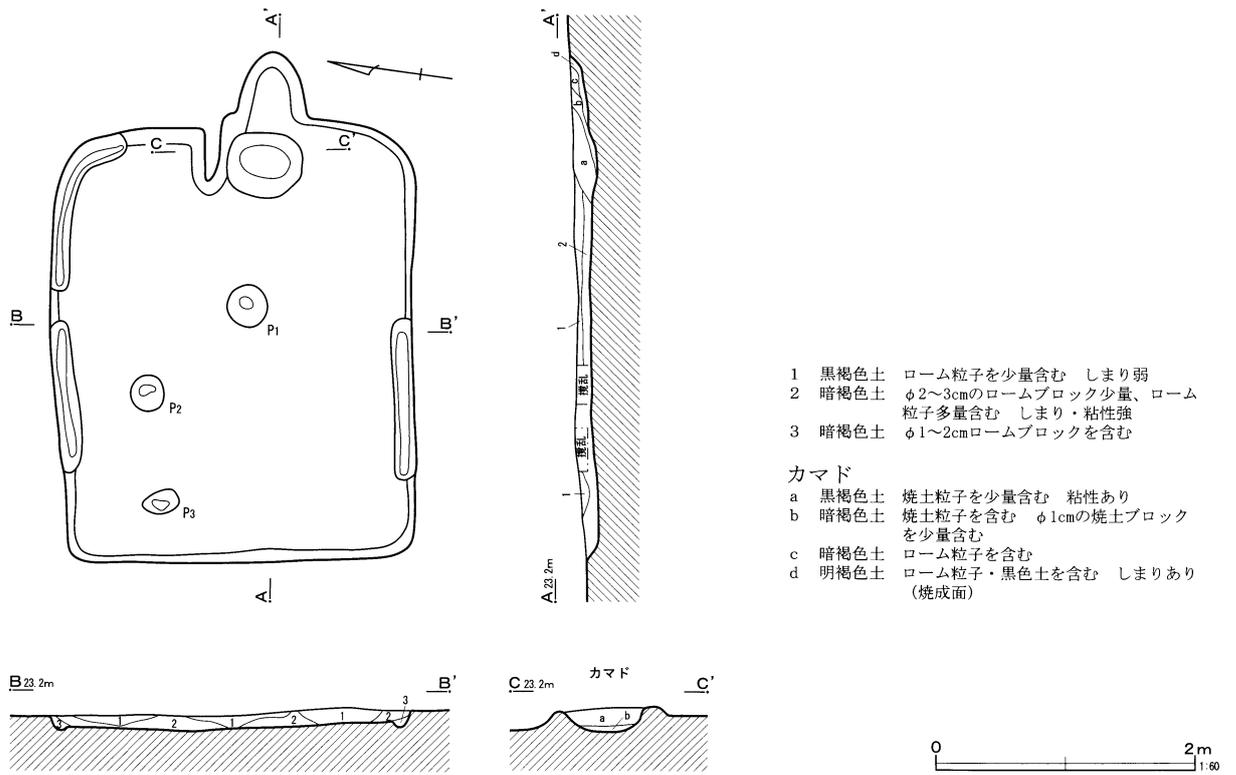
カマドは東壁のほぼ中央に位置する。床面にピットが3箇所見つかっているが住居跡に伴うものかは不明である。壁溝は部分的に検出できたが0.1mと浅く、全体には巡っていない。

遺物はカマドの南側を中心に土師器の甕が潰れた状態で検出され、その東側に作業用の台石と思われる大形の扁平礫の破片が出土している。また、板状鉄製品が出土しているが用途は不明である。実測可能な須恵器坏は3点であるが、内2点はカマドの周辺から出土している。

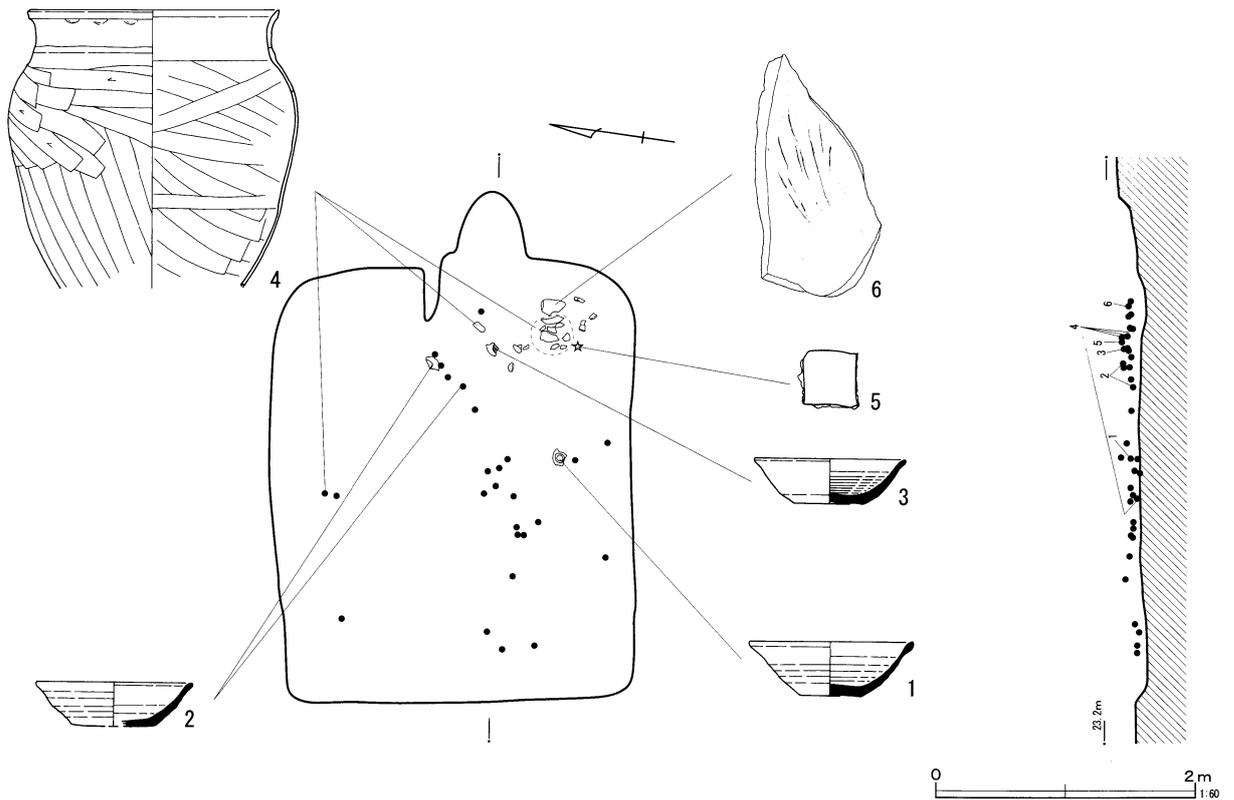
#### 第5・6号住居跡（第16～24図）

D・E-3・4グリッドに位置する。第5号住居跡と第6号住居跡の重複である。遺構確認の段階で新旧関係が明らかであった為、第5号住居跡の調査を行った後、第6号住居跡の調査を行った。

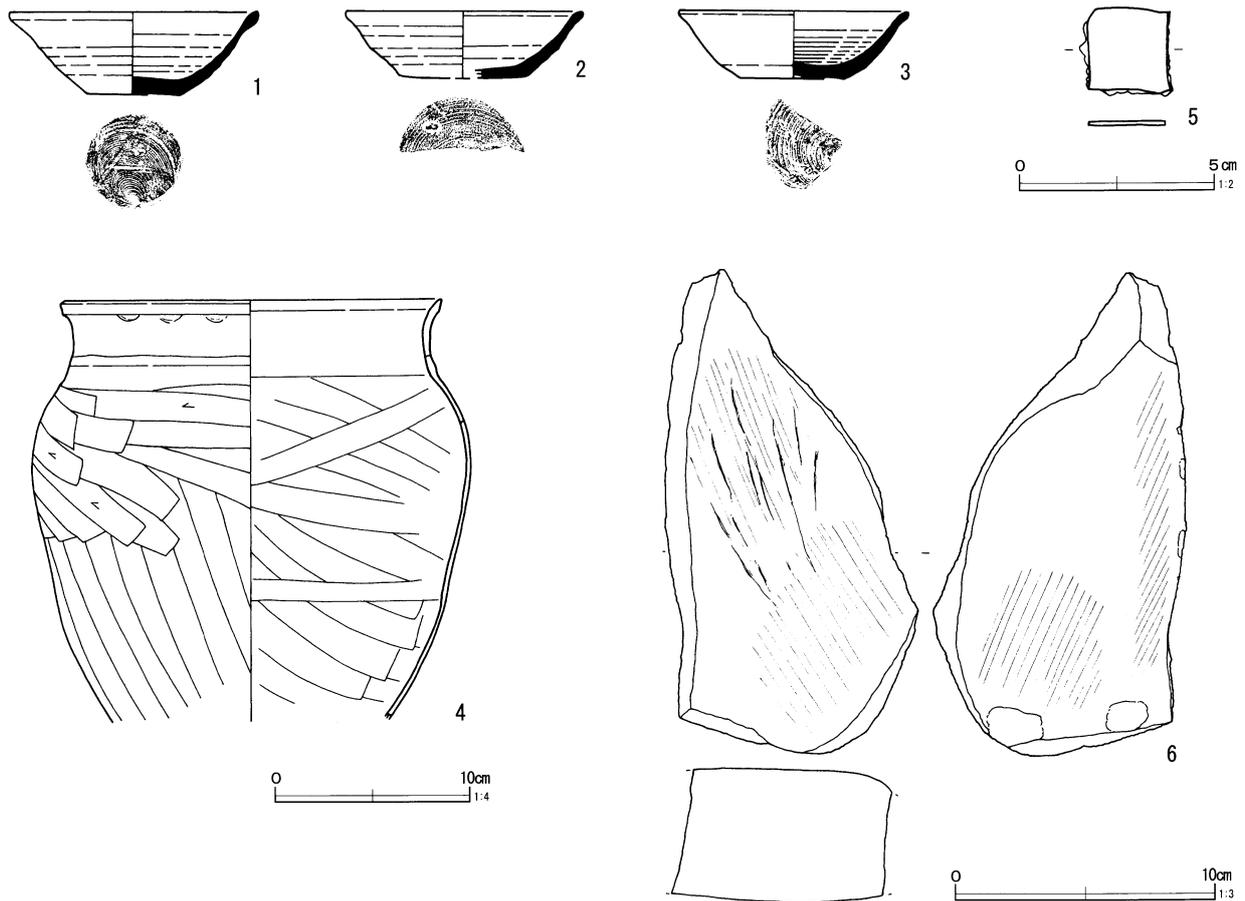
第5号住居跡は、床面の精査によって東側の壁溝が2重に巡っていることが分かり、Aラインの覆土を観察した結果、西側に向かって拡張していることが明らかになった。拡張前の第5a住居跡の大きさ



第13図 第4号住居跡



第14図 第4号住居跡遺物出土状況



第15図 第4号住居跡出土遺物

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

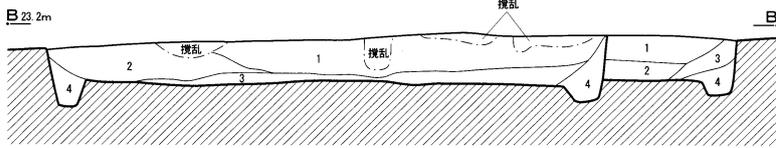
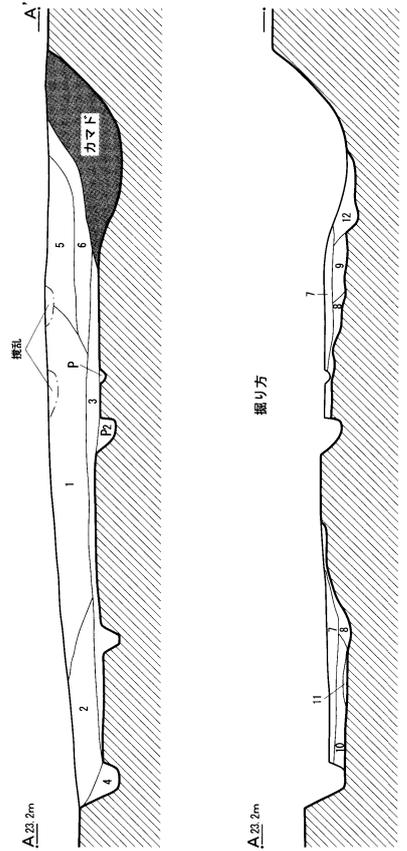
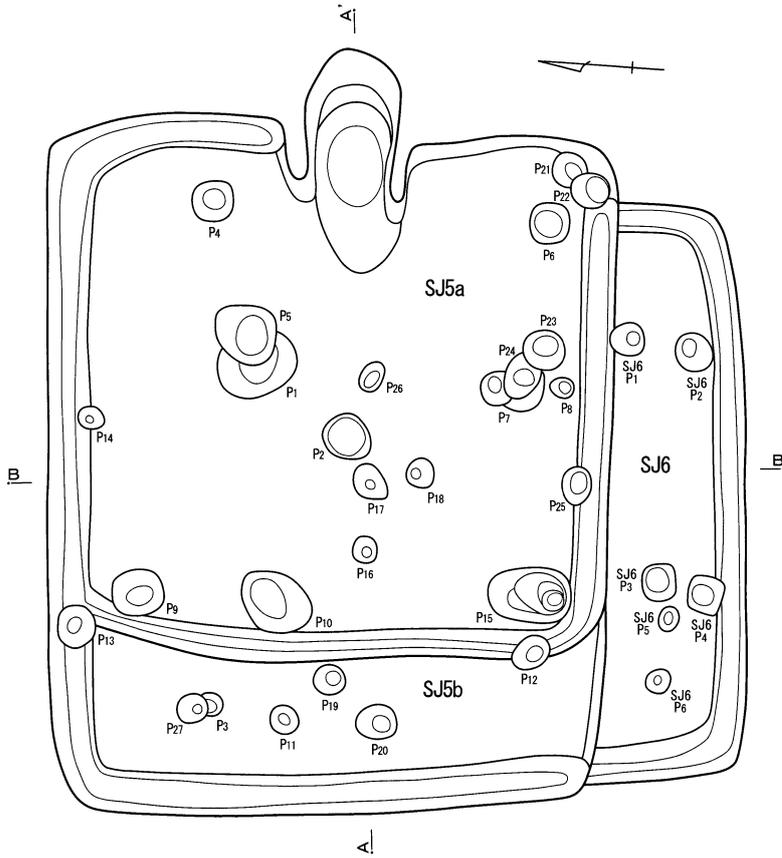
図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	11.9	3.5	5.8	2/3	白粒	良好	灰
2	須恵器	坏	(12.0)	3.6	5.1	1/2	砂粒 白粒	良好	暗灰
3	須恵器	坏	11.5	3.4	5.4	1/2	白粒	良好	暗灰
4	土師器	甕	19.5	[21.7]	—	1/2	雲 赤粒 白粒	良好	橙
5	鉄製品	板状品	長さ 2.1	幅 2	厚さ 0.1				
6	石製品	台石	長さ(18.5)、幅(9.7)、厚さ(5.2)cm			重さ1348.5g			

は、東西4.2m、南北4.3mとほぼ正方形に近く。拡張後の第5b住居跡の大きさは、東西5.5m、南北4.3mと1.3m拡張され長方形である。掘り込みは遺構確認面から約0.32mで、主軸方向はN-81°-Eである。

カマドは東壁の中ほどに位置する。袖部はローム層を芯に白色粘土によって造られており、上層は天井の崩落土である。ピットは27箇所であるが、住居跡に伴うのは、柱穴の4箇所(P4・6・9・15)と補助又は仕切りのための柱と思われる2箇所(P8・14)である。前者は深さ0.35mと深く、後者は

0.2mと浅い。床面は中央に硬化面があり、カマドの右下(住居跡の南東部)に焼土が見られる。また、南壁に沿ってP8とP15の周辺から白色粘土の固まりが検出された。

遺物の分布は、金属製品は住居跡のほぼ中央から刀子38・39と用途不明の延板状の鉄製品が検出されている。椀形鍛冶滓は北西コーナー付近から出土している。須恵器坏類は北西側に多く分布する。墨書土器が5点検出されているが、分布の上での偏りは見られない。土師器甕28・33はカマド内部から出土した。



■ ...カマド

0 2m 1/60

**SJ5**

- 1 暗褐色土 φ1cmのロームブロックを含む ローム粒子を多量含む 白色粘・焼土粒子を少量含む しまり弱
- 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を多量含む しまり弱
- 3 暗褐色土 φ1~2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む 白色粘土を少量、焼土粒子を微量含む しまり強
- 4 暗褐色土 φ1cmのロームブロックを含む、焼土粒子を多量含む 粘性強
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒・焼土ブロックを微量含む しまり強
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを微量、焼土粒・焼土ブロック・粘土を含む しまり強

**【掘り方】**

- 7 明るい暗褐色土 φ1cmのロームブロックを多量含む 粘性強
- 8 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 9 暗褐色土 φ1cmのロームブロック・焼土ブロックを多量含む しまり良好

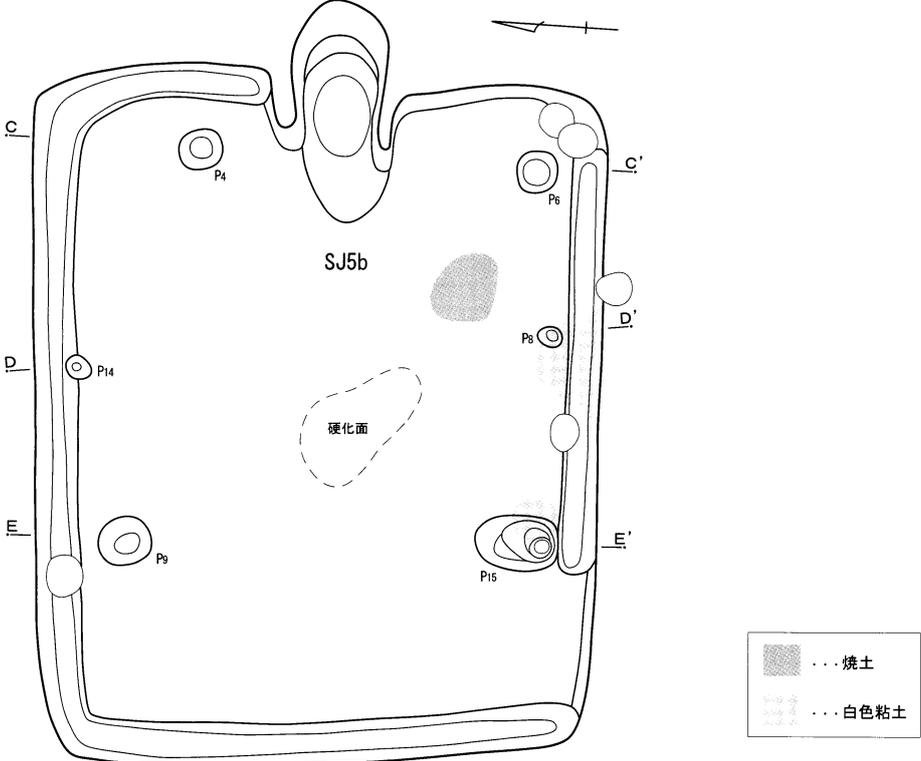
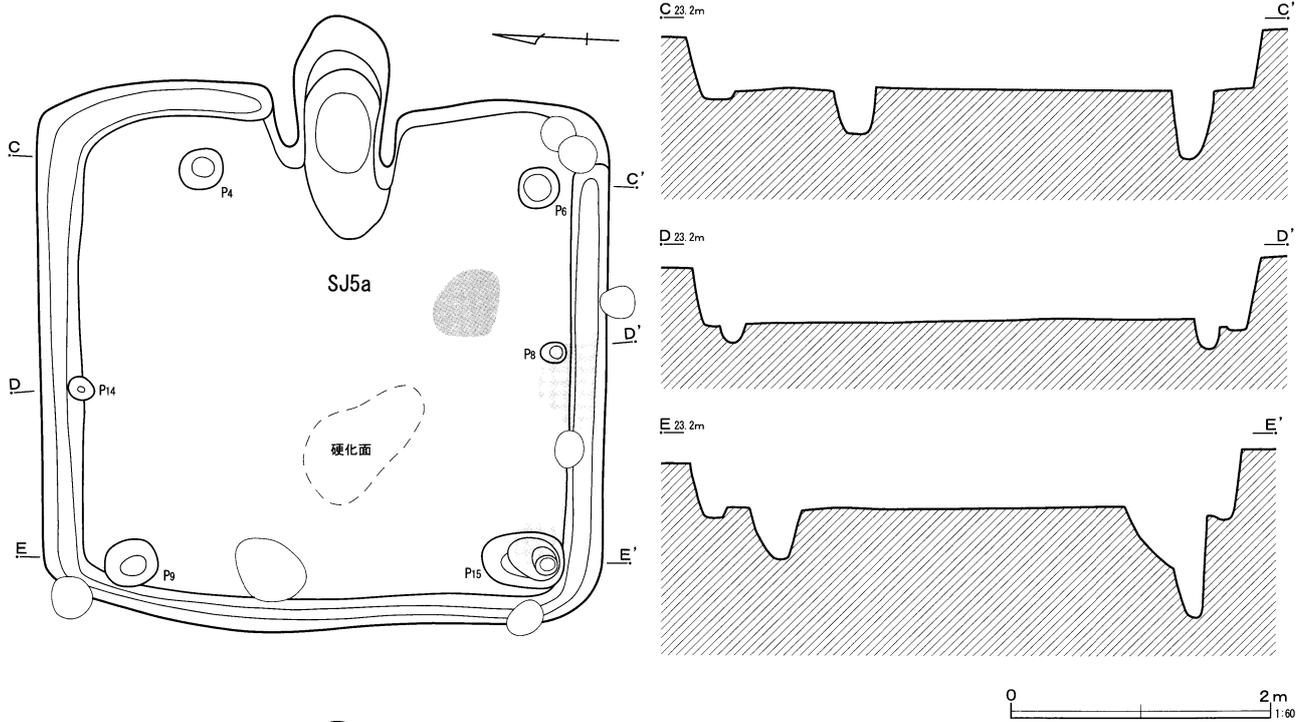
**SJ6**

- 10 暗褐色土 ローム粒子、焼土ブロックを少量含む しまり良好
  - 11 暗褐色土 φ1~2cmのロームブロックを多量含む しまり良好
  - 12 暗褐色土 φ1cmのロームブロックを少量、焼土ブロック、炭化物を部分的に含む しまり良好
- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量、白色粘土を多量含む しまり弱
  - 2 暗褐色土 φ1cmのロームブロックを少量、白色粘土を多量、焼土ブロックを微量含む しまり弱
  - 3 暗褐色土 φ1cmのロームブロック・焼土ブロック・白色粘土を多量含む しまり弱
  - 4 暗褐色土 ローム粒子・焼土ブロックを少量、φ1cmのロームブロックを多量含む しまり弱

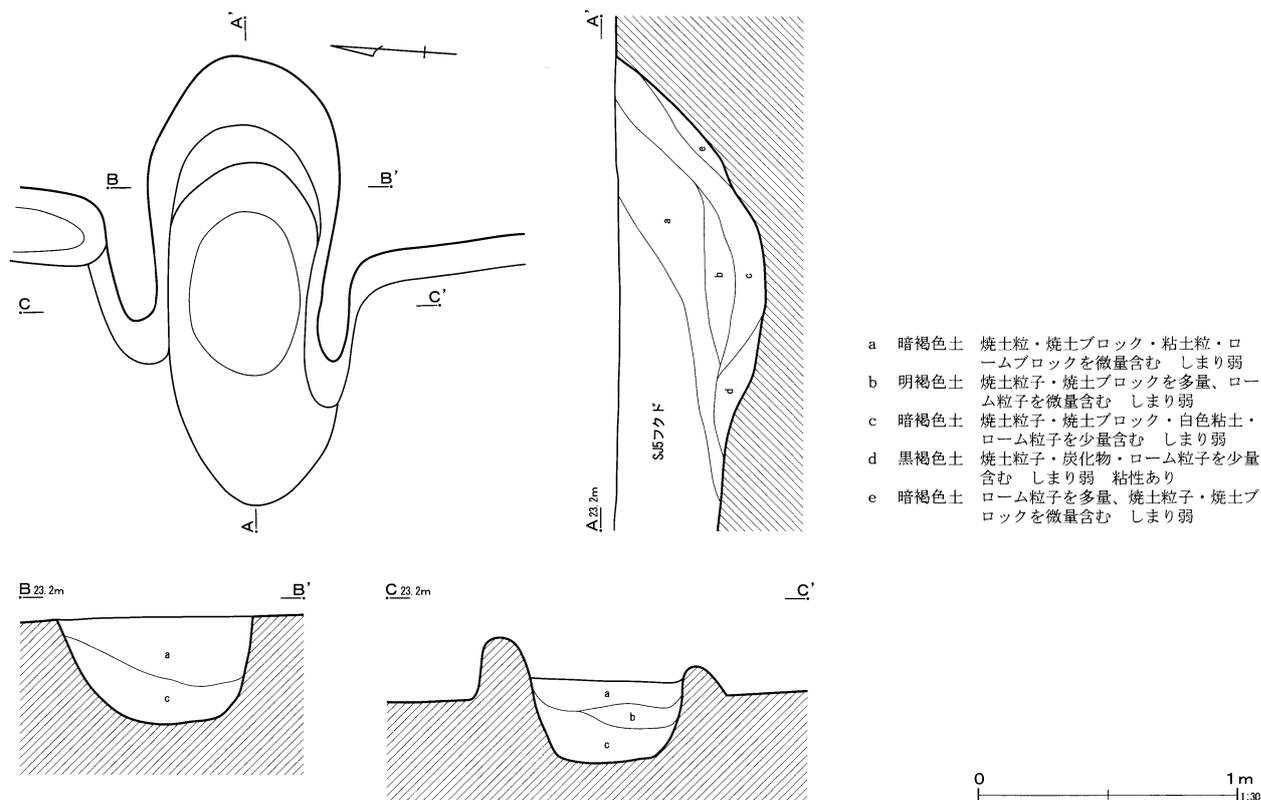
**【掘り方】**

- 5 暗褐色土 焼土ブロックを多量含む

第16図 第5・6号住居跡



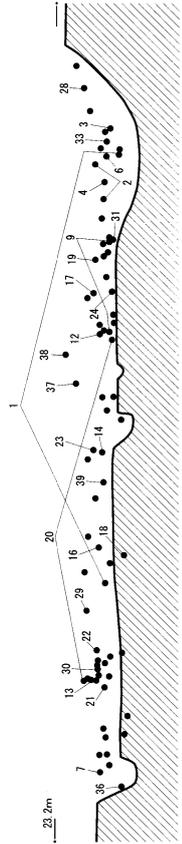
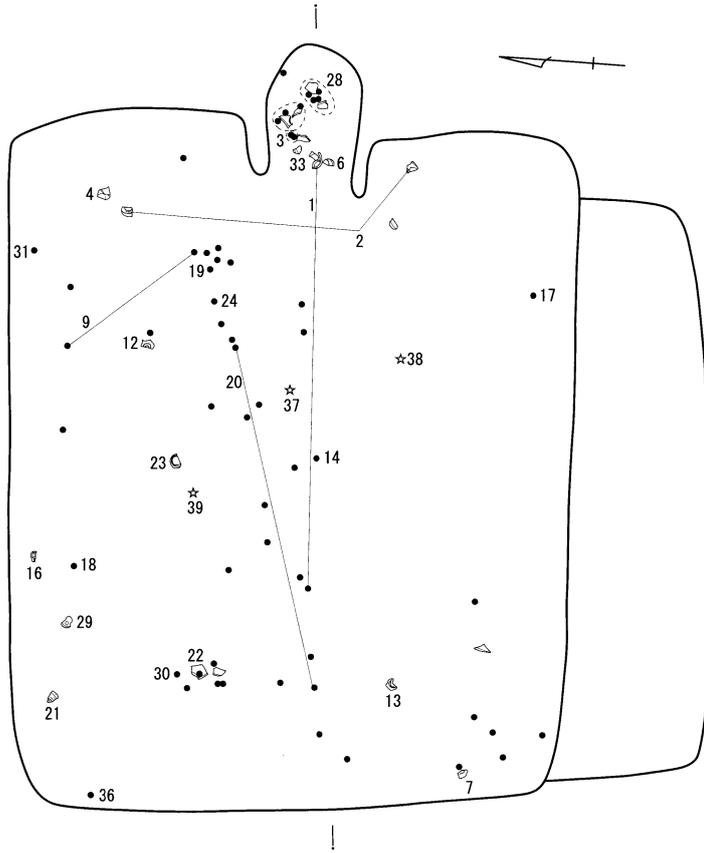
第17图 第5号住居跡



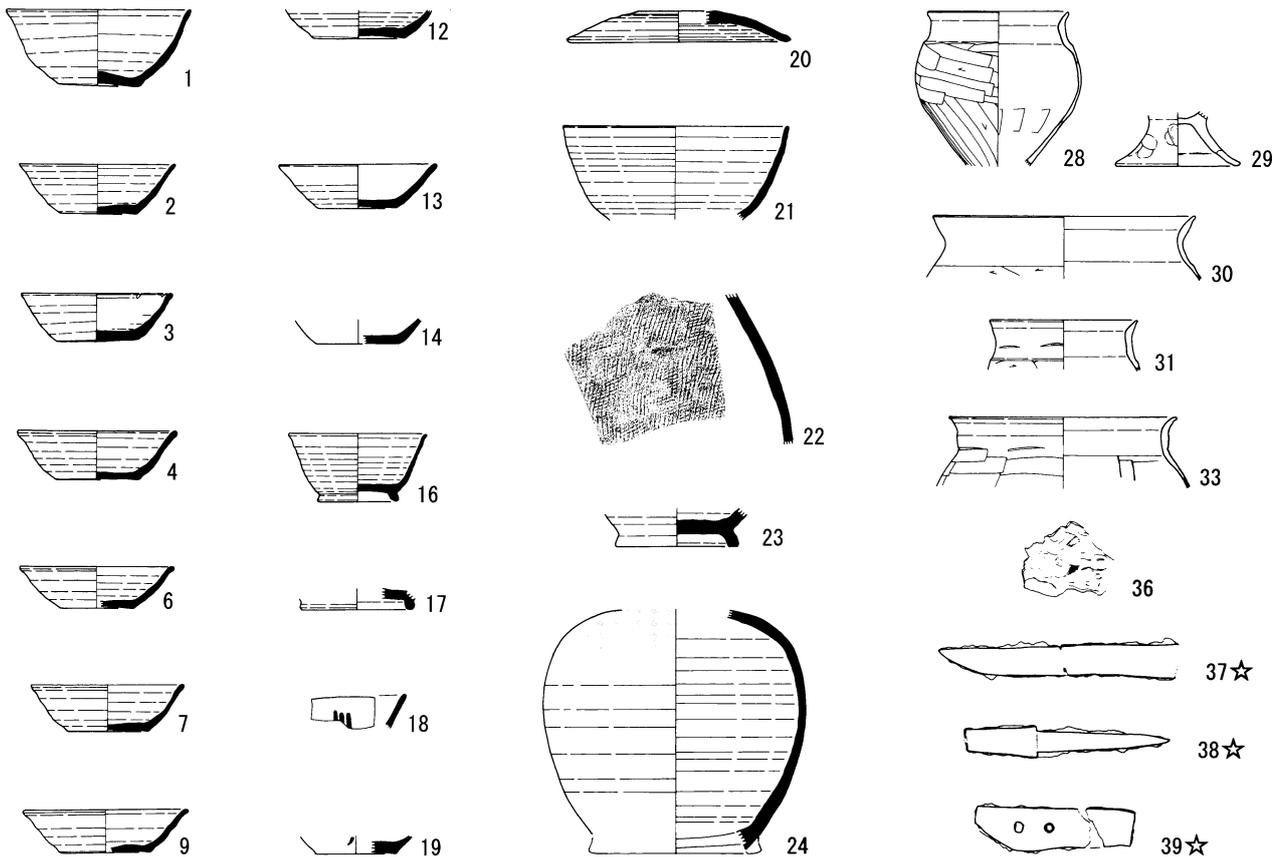
第18図 第5号住居跡カマド

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表(1)

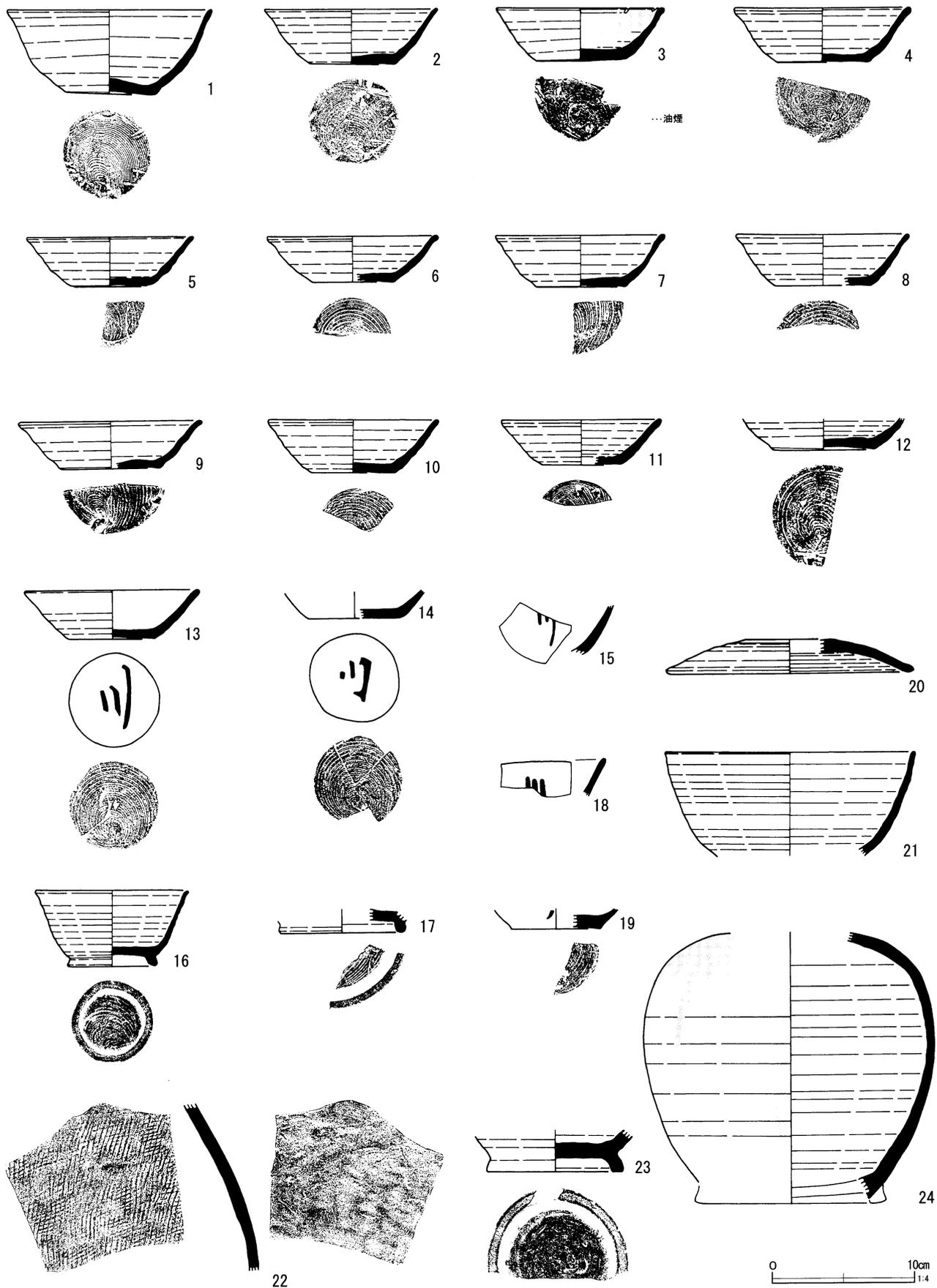
図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	(14.3)	5.9	6.5	3/4	白粒 小礫	普通	灰黄
2	須恵器	坏	(12.0)	3.8	6.0	1/2	白粒 黒粒 小礫	普通	灰黄
3	須恵器	坏	11.6	3.8	6.3	1/2	片岩 砂粒 白粒	普通	灰
4	須恵器	坏	(12.0)	3.3	(6.5)	1/3	雲 角閃石 石英 赤粒 白粒	普通	にぶい橙
5	須恵器	坏	(11.6)	3.5	(5.0)	1/2	砂粒 白粒	普通	灰
6	須恵器	坏	(11.8)	[3.2]	(5.8)	1/3	砂粒 白粒	普通	灰
7	須恵器	坏	(11.6)	3.6	(6.4)	1/4	砂粒 白粒 黒粒 小礫	普通	灰
8	須恵器	坏	(12.0)	3.5	(6.8)	1/5	砂粒 白粒 黒粒	普通	灰白
9	須恵器	坏	(12.6)	3.3	(7.4)	1/2	片岩 白粒	普通	灰
10	須恵器	坏	(11.4)	3.7	(6.0)	1/4	砂粒 白粒 小礫	普通	灰白
11	須恵器	坏	(11.1)	3.1	(5.6)	1/4	白粒	良好	灰
12	須恵器	坏	-	[2.2]	7.6	底部 1/2	雲 砂粒 白粒 黒粒	良好	灰黄
13	須恵器	坏	12.2	3.4	6.1	1/3	砂粒	普通	灰白
14	須恵器	坏	-	[1.9]	6.4	1/3	砂粒	普通	灰
15	須恵器	坏	-	-	-	破片	砂粒	普通	灰褐
16	須恵器	高台付埴	(10.6)	5.3	6.3	1/2	白粒 黒粒	良好	灰
17	須恵器	高台付埴	-	[1.6]	(8.8)	底部 1/5	白粒 黒粒	普通	灰黄
18	須恵器	坏	-	-	-	破片	砂粒	普通	灰
19	須恵器	坏	-	-	(6.2)	底部破片	砂粒	普通	灰
20	須恵器	蓋	(17.8)	2.4	-	1/5	白粒 黒粒	普通	灰黄
21	須恵器	埴	(17.3)	[7.3]	-	破片	砂粒 白粒	普通	灰黄
22	須恵器	甕	-	-	-	破片	砂粒 針状物質	普通	灰
23	須恵器	長頸瓶	-	[3.0]	9.6	底部 3/4	砂粒 白粒 針状物質 黒粒	良好	灰
24	須恵器	壺	-	[19.0]	-	1/2	黒粒	良好	灰



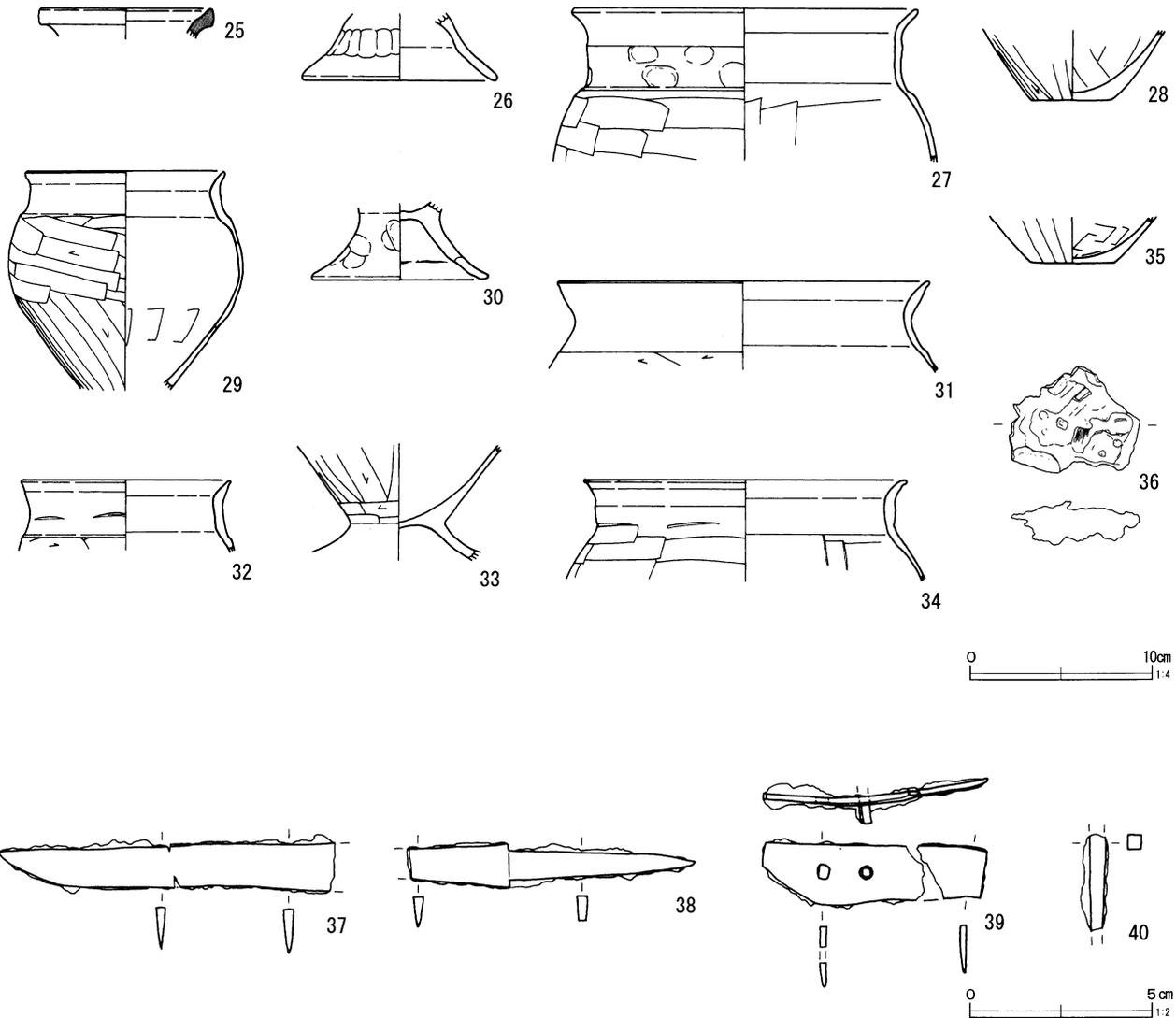
0 2m  
1:60



第19图 第5号住居跡遺物出土状況



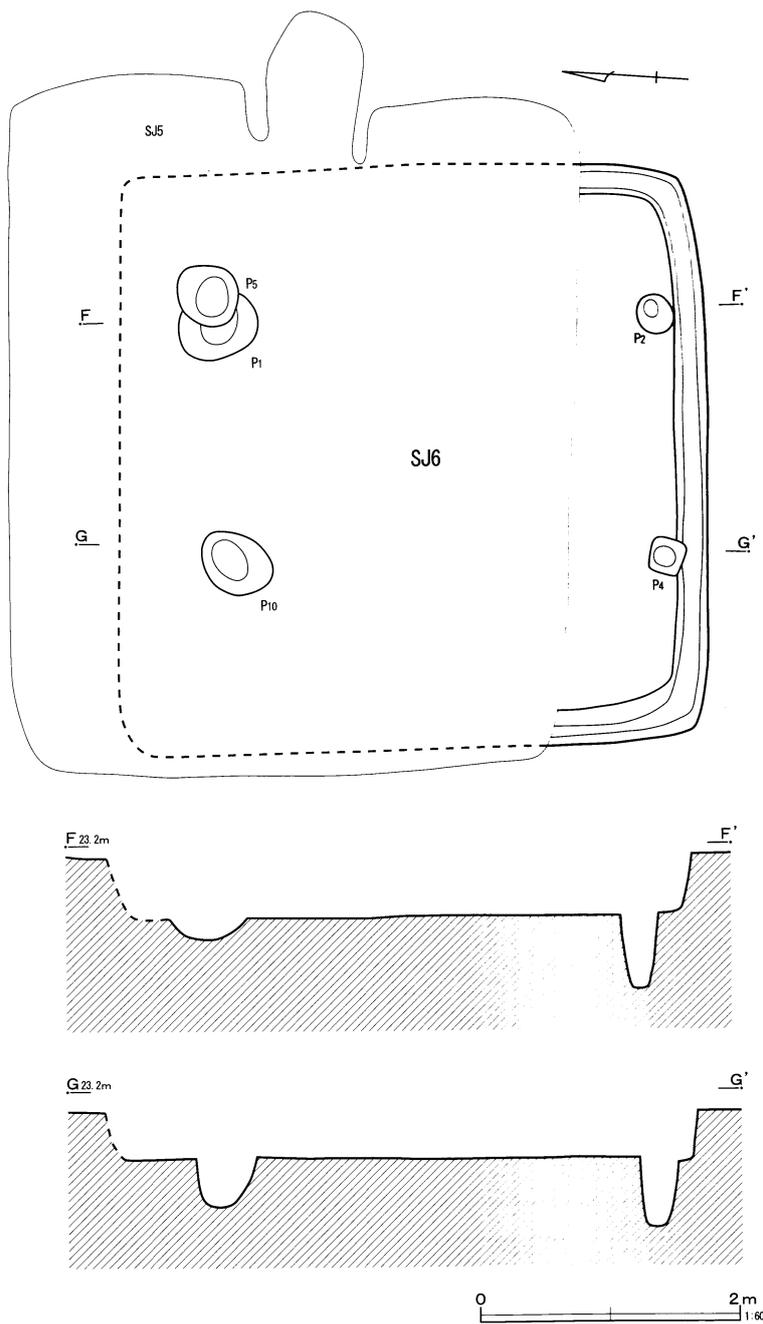
第20图 第5号住居跡出土遺物(1)



第21図 第5号住居跡出土遺物(2)

第7表 第5号住居跡出土遺物観察表(2)

図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
25	灰釉陶器	長頸壺	(9.4)	[1.6]	—	破片	砂粒 白粒	良好	オリープ灰
26	土師器	台付甕	—	[3.6]	(10.6)	脚部破片	雲 砂粒 白粒	普通	褐
27	土師器	甕	(17.8)	[8.4]	—	破片	雲 角閃石 赤粒 白粒	良好	
28	土師器	甕	—	[3.8]	(4.5)	底部破片	雲 白粒	普通	褐
29	土師器	台付甕	10.9	[12.9]	—	2/3	雲 角閃石	良好	褐
30	土師器	台付甕	—	[4.2]	(4.6)	脚部破片	雲 角閃石 白粒	普通	茶褐
31	土師器	甕	(20.4)	[4.8]	—	破片	雲 角閃石 白粒	普通	明褐
32	土師器	台付甕	(11.4)	[3.8]	—	破片	雲 角閃石 白粒	普通	褐
33	土師器	台付甕	—	[6.3]	—	破片	雲 砂粒 黒粒	普通	橙
34	土師器	甕	(17.6)	[5.6]	—	破片	雲 角閃石 白粒	良好	橙
35	土師器	甕	—	[2.5]	4.8	底部破片	雲 白粒	普通	
36	鉄滓	椀形鍛冶滓	長さ7.0	幅5.3	厚さ2.1	重さ87.9g			
37	鉄製品	刀子	長さ(9.3)	刃幅 1.4	背幅 0.2	茎部欠			
38	鉄製品	刀子	長さ(7.9)	刃幅 1.2	背幅 0.2	切先欠			
39	鉄製品	延板状品	長さ(4.5)	幅 1.6	厚さ 0.2	両端欠			
40	鉄製品	棒状品	長さ(2.6)	幅 0.4		両端欠			



第22図 第6号住居跡

遺物は須恵器坏が主である。他に須恵器蓋、埴21、高台付埴16・17、長頸壺の底部破片23、壺24と灰釉長頸壺の口縁破片25が出土している。

墨書土器は5点出土している。いずれも須恵器坏

に墨書されており、文字の書かれている部位は底部及び側面である。判読できる4点は、全て“川”の字である。

金属製品は刀子2点37・38と用途不明の延板状品39、棒状鉄製品40である。36は椀形鍛冶滓である。

第6号住居跡は、第5号住居跡の南側で張り出し部の様に確認された。規模は東西4.5mで南北は柱穴の位置から想定すると5.4m前後になると思われる。掘り込みは遺構確認面から約0.31mで第5号住居跡より僅かに浅い。主軸方向（南北）はN-83°-Eである。

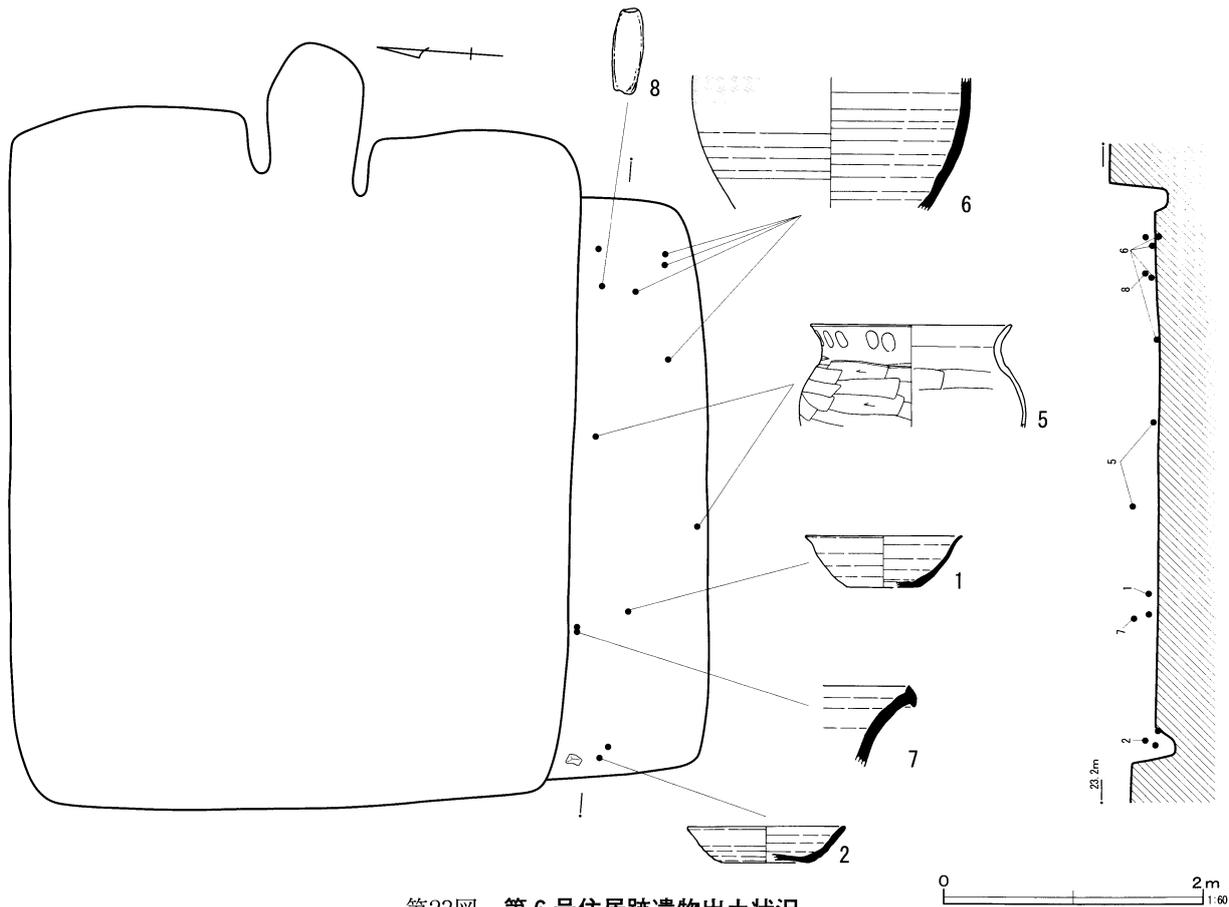
カマドは検出されていないが、東又は北側に位置するものと思われる。

遺物は、須恵器坏と蓋、壺、甕の口縁破片と土師器甕、土錘が出土している。

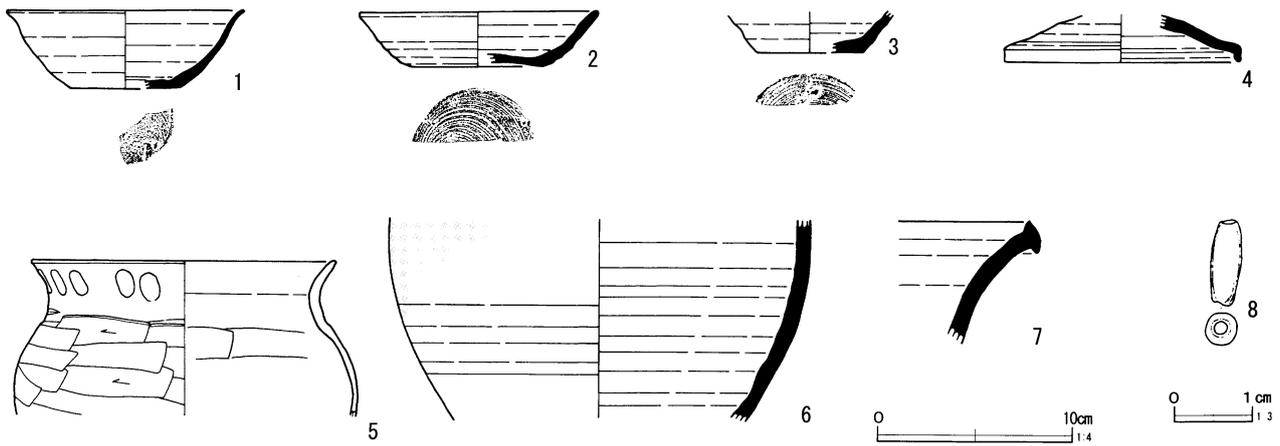
#### 第7号住居跡（第25～27図）

F・G-4グリッドに位置する。遺構確認の段階で殆どが削平されており、最初はカマド周辺の焼土が確認された。精査を行った結果壁溝が僅かに確認され、住居跡の全体が把握できた。規模は、東西4.4m、南北3.4mの長方形である。掘り込みは殆ど残っておらず、東側は床面下まで削平されていた。主軸方向はN-88°-Eである。

遺物は、遺構の残存状況のわりには出土している。須恵器坏は土師質なものが多い。8は灰釉高台付皿、9は土師器甕である。



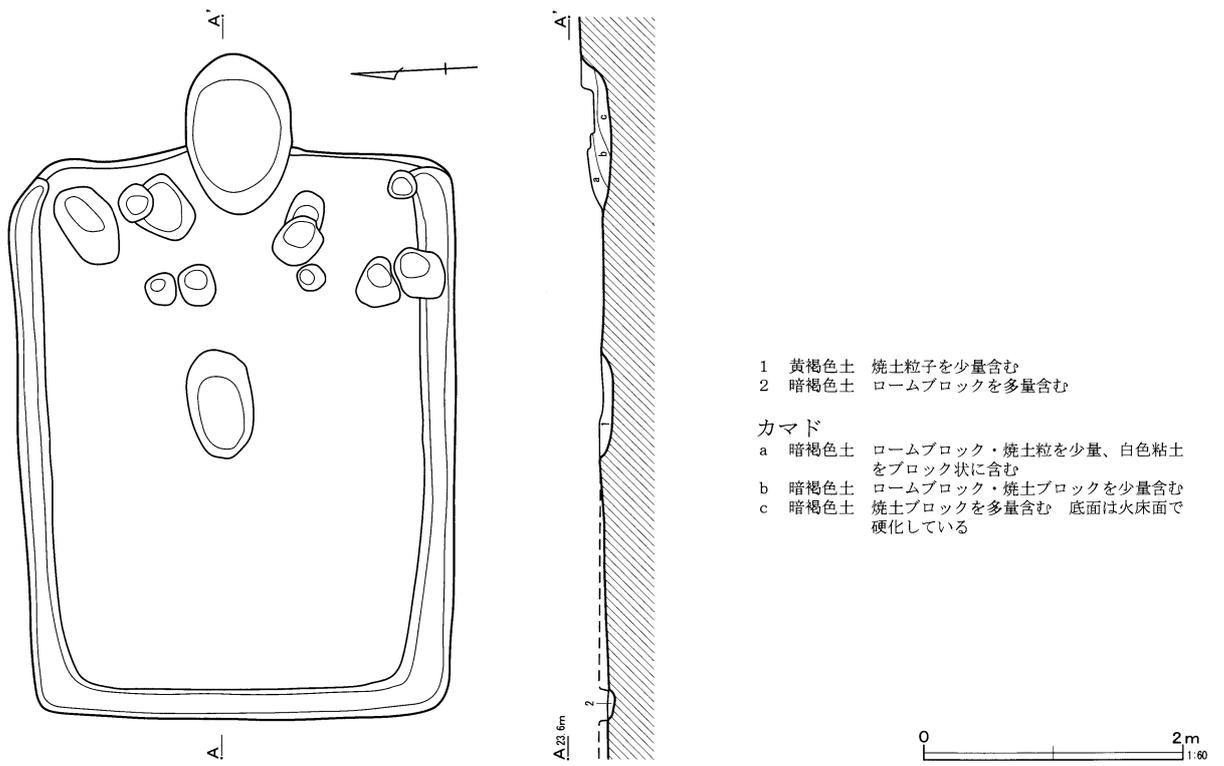
第23図 第6号住居跡遺物出土状況



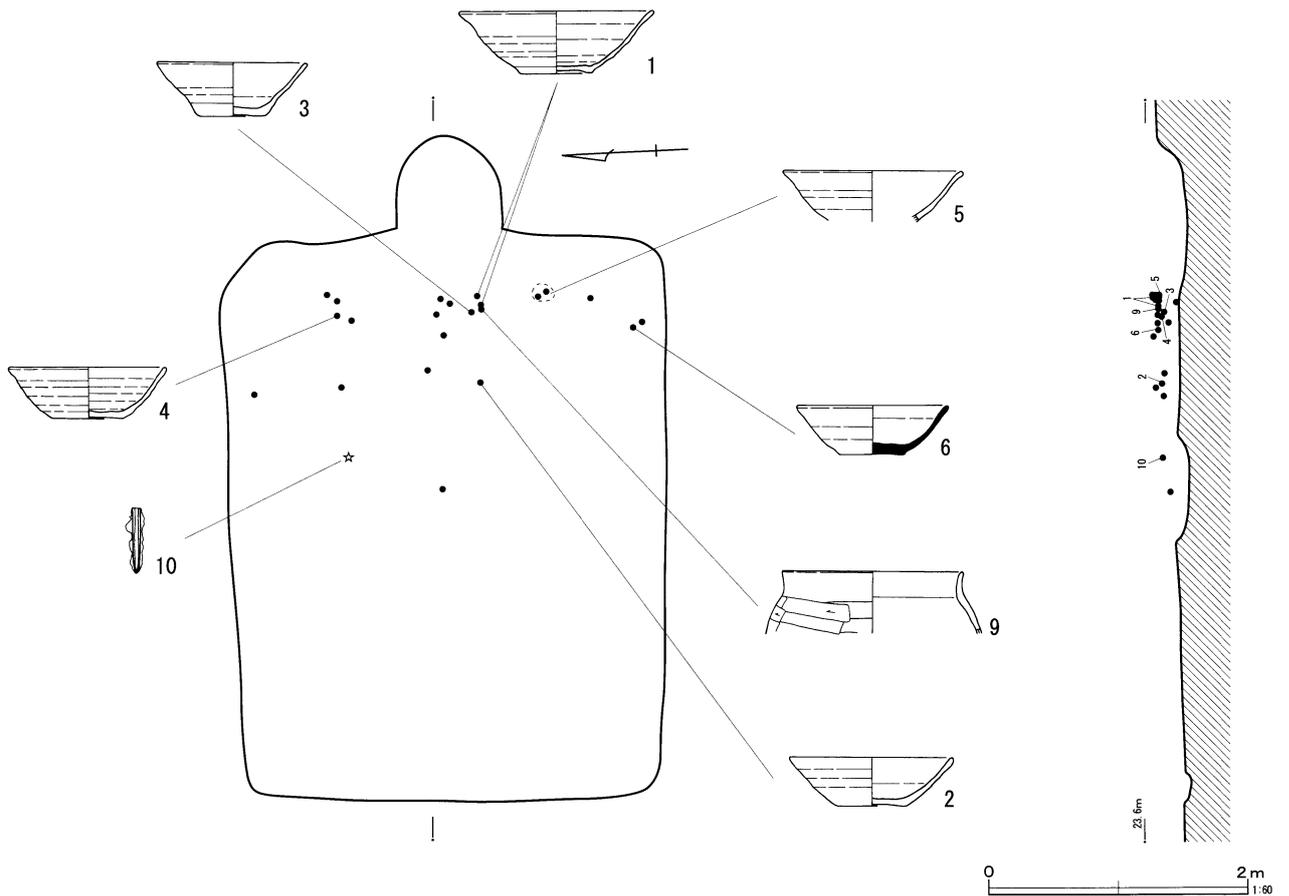
第24図 第6号住居跡出土遺物

第8表 第6号住居跡出土遺物観察表

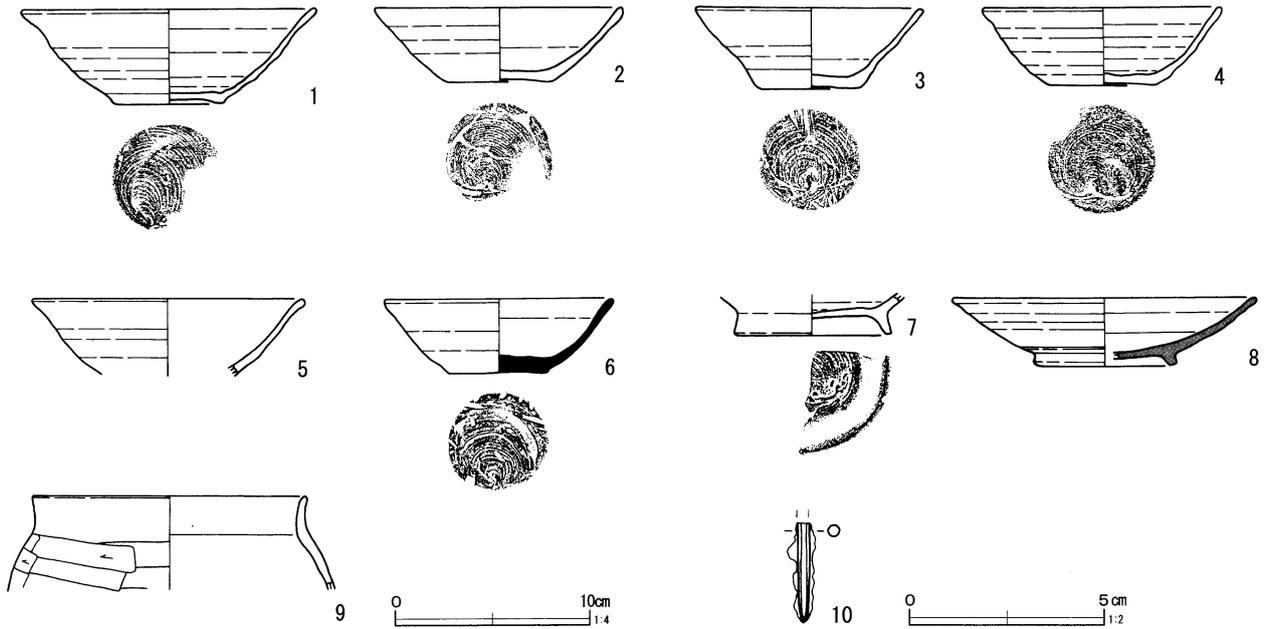
図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	(12.0)	4.0	(5.6)	1/5	砂粒	普通	灰
2	須恵器	坏	12.2	2.8	(7.0)	1/2	砂粒 白粒	良好	黒灰
3	須恵器	坏	—	[2.1]	(5.4)	破片	白粒	良好	暗灰
4	須恵器	蓋	(12.0)	[2.3]	—	1/3	白粒 黒粒	普通	灰褐
5	土師器	甕	15.6	[8.0]	—	1/2	雲 白粒	良好	茶褐
6	須恵器	壺	—	—	—	胴部破片	砂粒 白粒	良好	灰
7	須恵器	甕	—	—	—	口縁破片	石英 白粒	良好	灰
8	土製品	土錘	長さ3.3	幅1.2	厚さ1.3	重さ4.0g			



第25図 第7号住居跡



第26図 第7号住居跡遺物出土状況



第27図 第7住居跡出土遺物

第9表 第7号住居跡出土遺物観察表

図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	(15.0)	4.8	5.8	1/2	雲	不良	橙褐
2	須恵器	坏	(12.8)	3.8	5.3	1/2	砂粒 赤粒 白粒	不良	橙
3	須恵器	坏	(11.6)	4.1	5.3	1/2	砂粒	不良	橙
4	須恵器	坏	(12.0)	3.9	5.6	1/3	赤粒 白粒	不良	橙
5	須恵器	坏	(14.0)	[3.9]	—	1/3	雲 赤粒	不良	橙
6	須恵器	坏	(11.4)	3.8	5.1	1/4	黒粒	普通	灰橙
7	須恵器	高台付坏	—	[2.2]	(8.0)	底部破片	白粒	不良	橙
8	灰釉陶器	高台付皿	15.6	3.5	(7.3)	破片	黒粒	良好	茶褐
9	土師器	台付甕	(14.0)	[4.8]	—	口縁破片	雲 白粒	普通	茶褐
10	鉄製品	棒状品	長さ(2.6)	幅 0.3		上半部欠			

## 2. 溝跡

### 第1号溝跡 (第28～32・47図)

A～H-5～7グリッドに位置する。調査区東側を南北方向に等高線に沿って縦断している。朝霞市教育委員会が調査した別地点の調査区から、同規模の溝跡が見つかった。

幅は2.5～3.0mで深さは約1.0mである。横断面は下半部が“コ”字状、上半部が開き、底面は平坦である。埋土を見ると、4層の上面は踏み固められたと思われる硬化面が観察され、Dラインではその上層を薄い黒色土が覆っていた。硬化面は下半部のコ字の部分が埋まったところで、通路として使われていたと思われる。

時期は、覆土の状態及び出土遺物から中世と考え

られる。

遺物は、挟入柱状片刃石斧 (第47図16)、椀形鍛冶滓 (第32図16・17)、陶磁器類、砥石などが出土している。

### 第2号溝跡 (第28・29図)

B・D-5・6グリッド、調査区の北東部に位置する。北側の立ち上がり調査区外になるため、遺構の規模等は不明である。深さは0.29mと浅く、横断面は皿状である。

### 第3号溝跡 (第33図)

D-5グリッドに位置する。ほぼ東西方向で長さ

約4.0m、幅0.4m、深さ0.21mである。

#### 第4号溝跡 (第28～30・34図)

C～G-6・7グリッドに位置する。途中一部途絶えるが、北側を第2号溝跡、南側は第1号溝跡と重複している。新旧関係は定かでないが、第2号溝跡より古く、第1号溝跡とは近い時期と思われる。遺物は中世の陶磁器類が出土した。

#### 第5号溝跡 (第33図)

D・E-2・3グリッドに位置する。ほぼ南北方向で長さ約5.2m、幅0.7m、深さ0.18mである。有鉤銅釧が出土した第16号土壇の東側に近接していることから、方形周溝の一部になる可能性を考慮して精査したが、遺物等は検出されず、時期及び性格は不明である。

#### 第6号溝跡 (第33図)

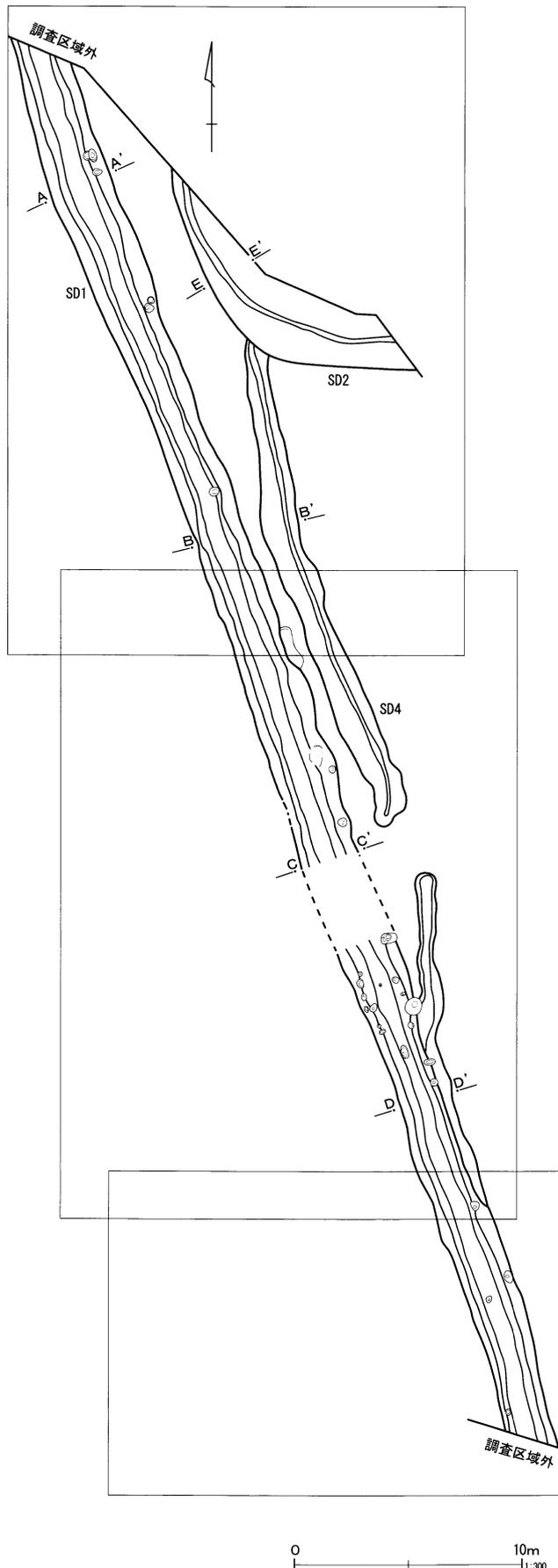
D-2グリッドに位置する。北東方向で長さ約4.7m、幅0.5m、深さ0.34mである。

#### 第7号溝跡 (第33図)

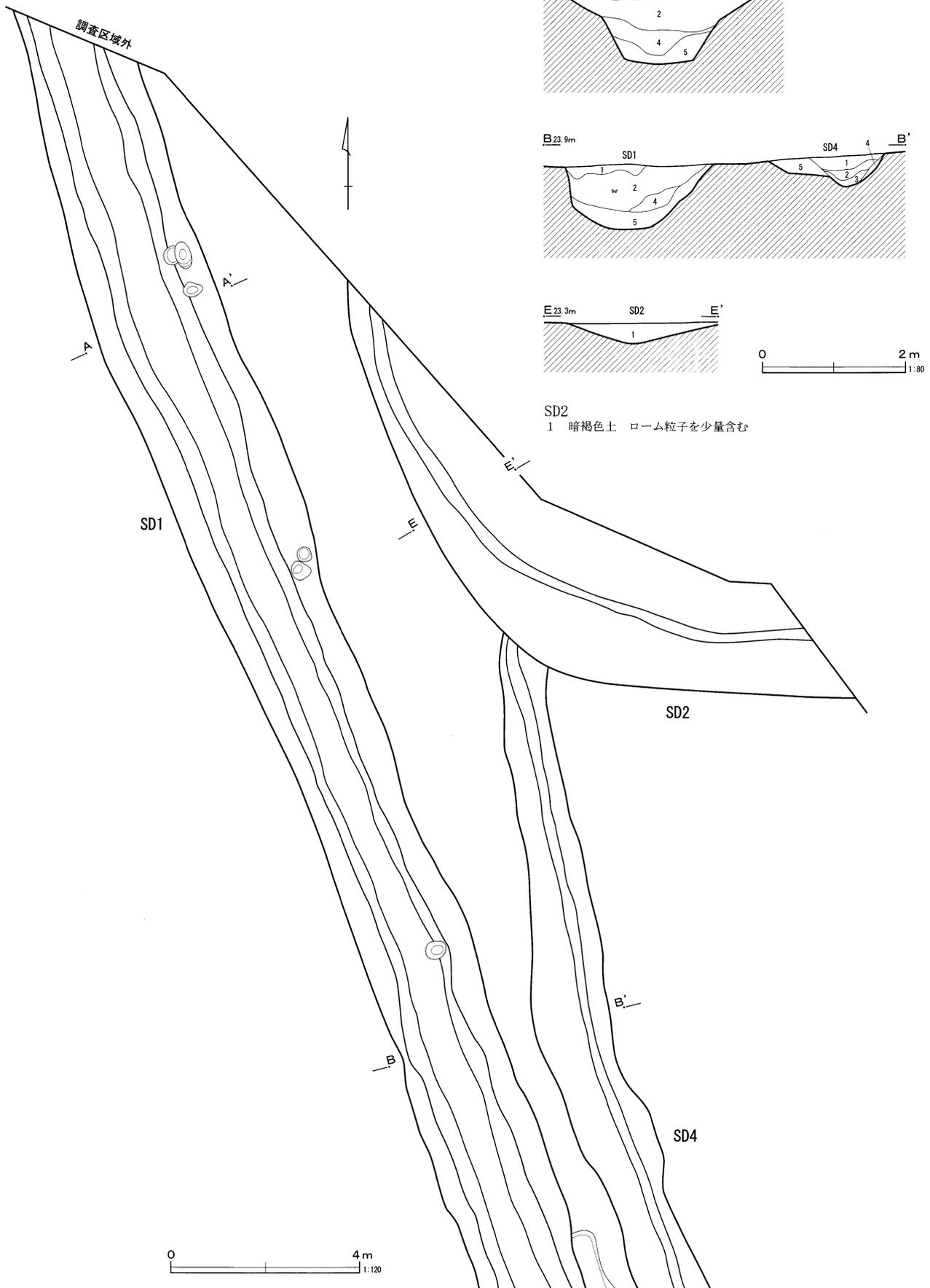
E-4グリッドに位置する。東西方向でやや湾曲している、長さは約3mと短く、幅0.4m、深さ0.21mである。

#### 第8号溝跡 (第33図)

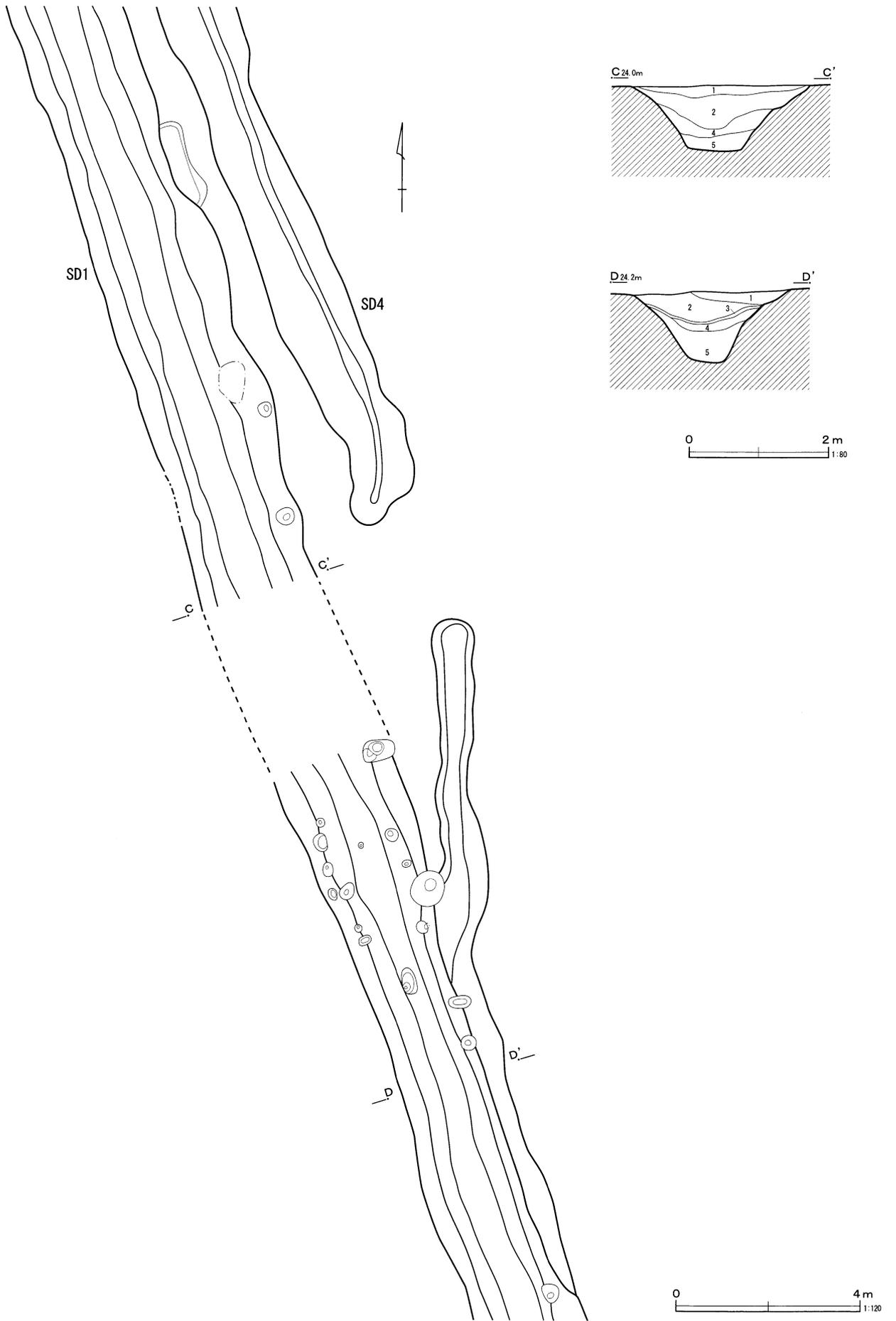
D・E-4グリッドに位置する。東西方向で西側は第5号住居跡と重複している。長さは約5.7m、幅0.4m、深さ0.1mと浅い。遺物は須恵器坏の底部破片が出土している。



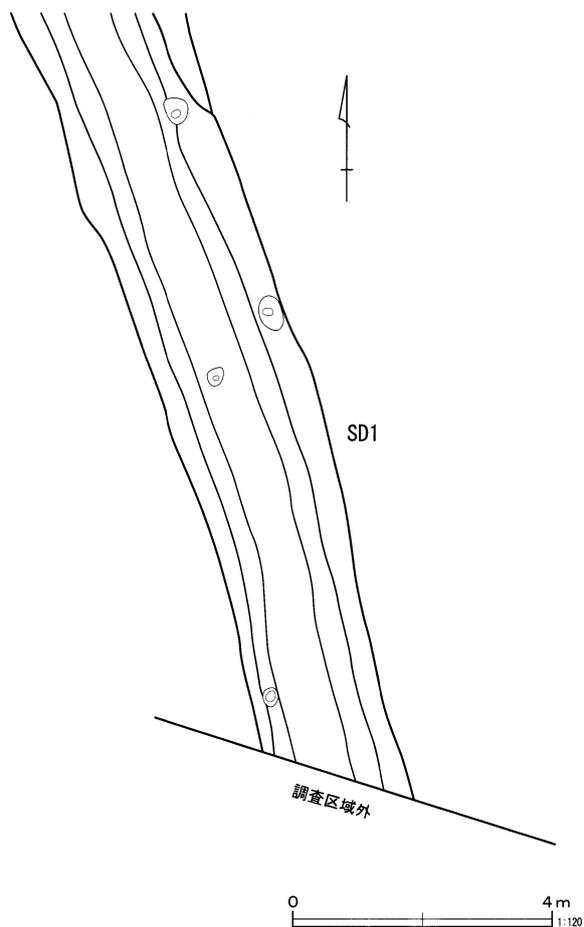
第28図 第1・2・4号溝跡



第29図 第1・2・4号溝跡(1)



第30图 第1・2・4号沟迹(2)

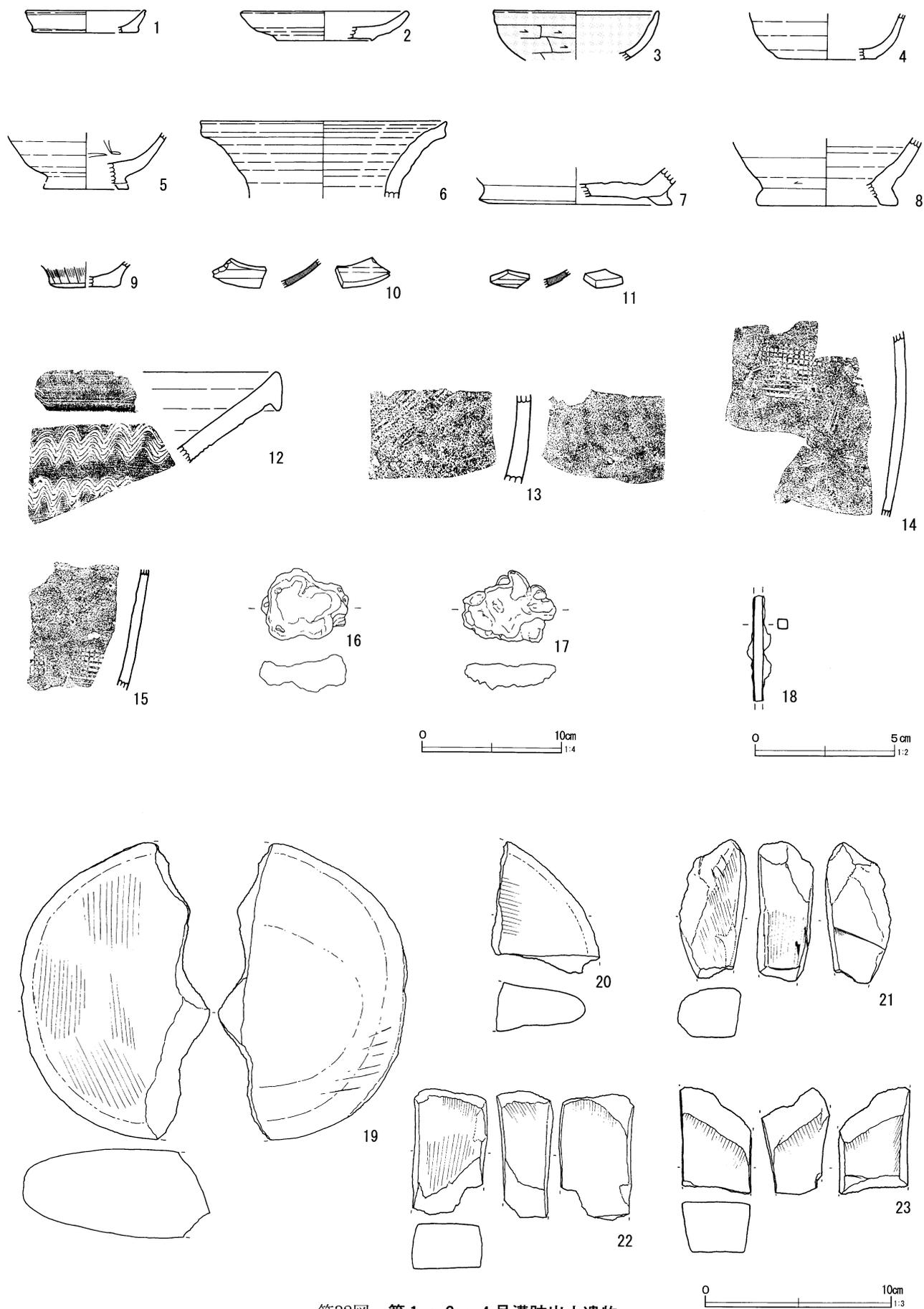


- SD1
- 1 褐色土 ローム粒子を多量含む しまりなし
  - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む しまりなし
  - 3 黒色土
  - 4 暗褐色土 ローム粒子を多量含む 非常に硬くしまっている(硬化面)
  - 5 黒褐色土 ローム粒子を含む しまりなし
- SD4
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む しまりなし
  - 2 褐色土 ロームブロックを多量含む しまりなし
  - 3 暗褐色土 ローム粒子を含む しまりなし
  - 4 褐色土 ロームブロックを多量含む しまりなし
  - 5 暗褐色土 ローム粒子を少量含む しまりあり

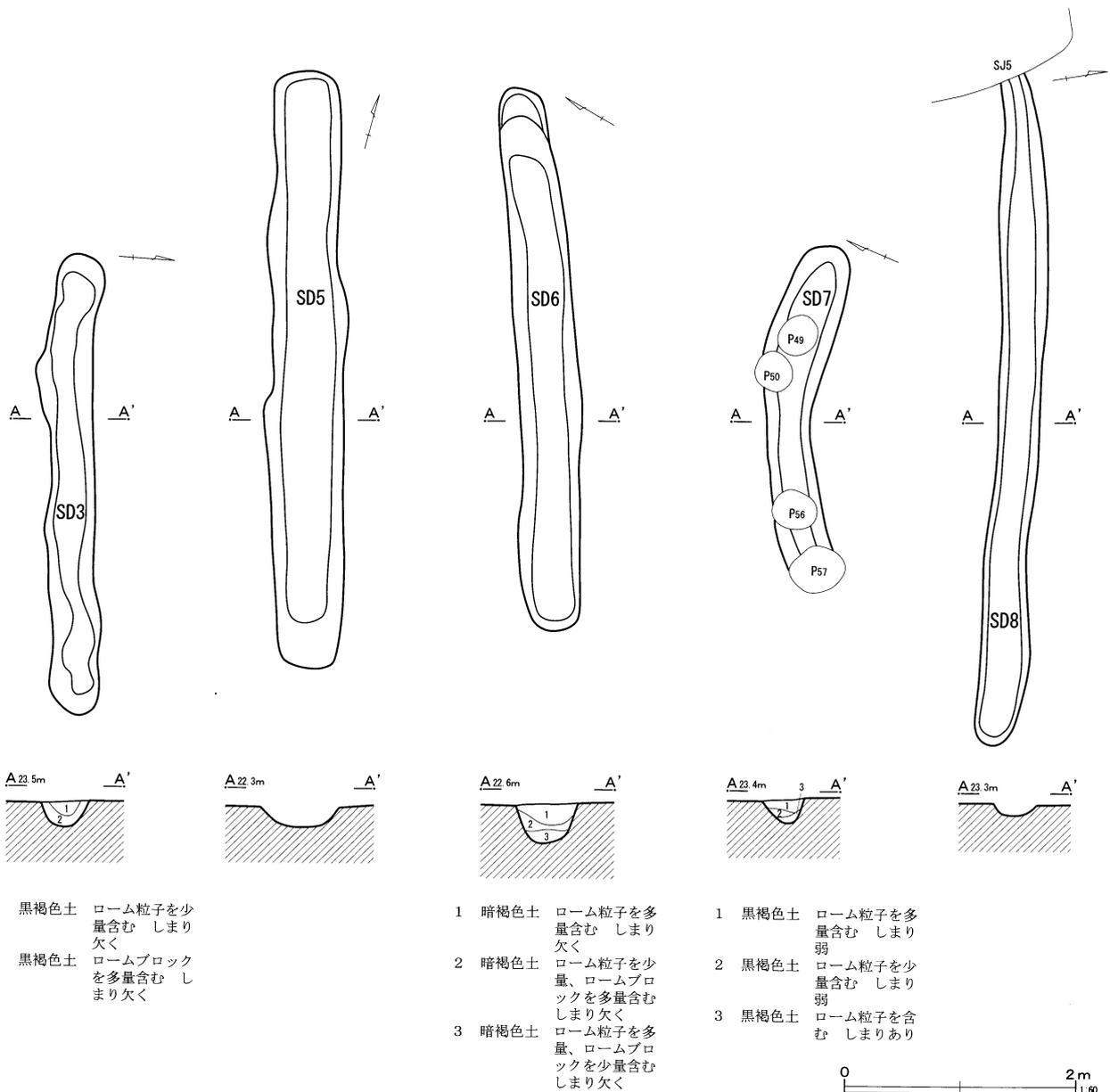
第31図 第1・2・4号溝跡(3)

第10表 第1号溝跡出土遺物観察表

図版 No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	かわらけ		(8.4)	1.6	(7.4)	破片	雲	普通	にぶい橙
2	瀬戸	小皿	(12.0)	2.1	(6.8)	破片		普通	褐灰
3	土師器	坏	(12.0)	[3.5]	—	破片	白粒 黒粒	普通	赤
4	かわらけ		—	[3.2]	(7.4)	破片	雲 赤粒	普通	にぶい橙
5	青磁	碗	—	[4.0]	(6.0)	破片		良好	緑
6	在地	甕	(17.5)	[5.5]	—	破片	石英 白粒	普通	灰
7	在地	甕	—	—	(13.8)	破片	雲 白粒	普通	灰褐
8	瀬戸	長頸壺	—	[4.5]	(10.0)	破片	黒粒	良好	灰
9	土師器	甕	—	[1.8]	(4.8)	破片	赤粒	普通	赤褐
10	緑釉	碗	—	—	—	破片	黒粒	普通	灰黄 釉:オリーブ灰
11	緑釉	碗	—	—	—	破片	黒粒	普通	灰黄 釉:オリーブ灰
12	在地	甕	—	—	—	破片		良好	褐灰
13	在地	甕	—	—	—	破片	石英 白粒	普通	灰
14	常滑	甕	—	—	—	破片	砂粒	良好	紫灰
15	常滑	甕	—	—	—	破片	砂粒	良好	紫灰
16	鉄滓	椀形鍛冶滓	長さ6.6、	幅5.0、	厚さ1.9、	重さ67.9g			
17	鉄滓	椀形鍛冶滓	長さ6.2、	幅4.9、	厚さ2.3、	重さ106.3g			
18	鉄製品	棒状品	長さ(3.8)	幅 0.3		両端欠			
19	石製品	台石	長さ15.9、	幅(10.1)、	厚さ4.7cm	重さ1033.8g			
20	石製品	磨石	長さ(7.0)、	幅(5.8)、	厚さ(2.7)cm	重さ122.2g	閃緑岩		
21	石製品	砥石	長さ(7.5)、	幅3.6、	厚さ2.7cm	重さ93.3g			
22	石製品	砥石	長さ(6.8)、	幅4.0、	厚さ2.5cm	重さ112.4g			
23	石製品	砥石	長さ(5.7)、	幅(3.9)、	厚さ(2.7)cm	重さ83.8g			

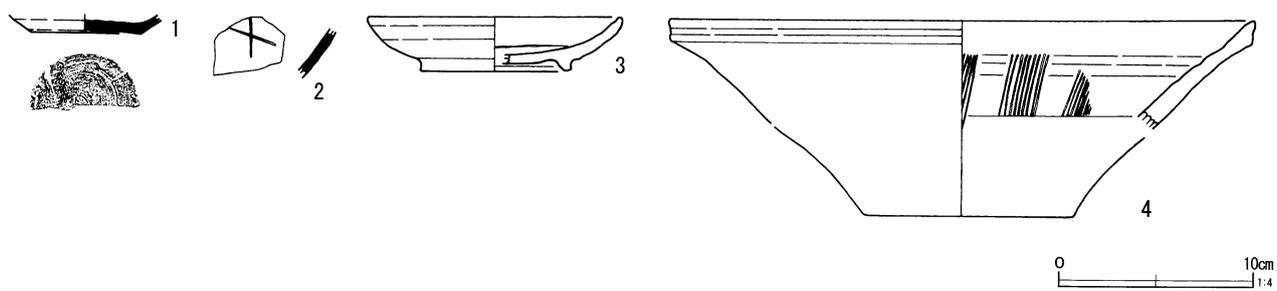


第32图 第1·2·4号沟迹出土遗物



- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量含む しまり欠く
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量含む しまり欠く
- 1 暗褐色土 ローム粒子を多量含む しまり欠く
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロックを多量含む しまり欠く
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む しまり欠く
- 1 黒褐色土 ローム粒子を多量含む しまり弱
- 2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む しまり弱
- 3 黒褐色土 ローム粒子を含む しまりあり

第33図 第3・5～8号溝跡



第34図 第4・8号溝跡出土遺物

第11表 第4・8号溝跡出土遺物観察表

図版 No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	—	[1.0]	5.4	底部 1/2	針状物質	普通	灰
2	須恵器	坏	—	—	—	破片	白粒	普通	灰
3	瀬戸	皿	(13.0)	2.8	(7.7)	1/4	白粒	普通	黄灰
4	常滑	すり鉢	(30.0)	[5.4]	—	破片	白粒	良好	暗茶

### 3. 土壌

土壌は31基検出された。発掘調査の時点で、第32号まで番号を付けたが、第23号は欠番である。また、第16号土壌は有鉤銅釧が出土したので、弥生時代後期から古墳時代前期の項で説明する。

土壌は調査区の西側、住居跡を囲む様に分布している。幾つかのグループに見えるが、覆土中から遺物が殆ど検出されておらず、時期の確定は難しく、何らかの有機的なまとまりとして捉えることは出来ない。

#### 第1号土壌（第35・37図）

C-3グリッドに位置する。調査区の北西部にまとまる土壌群の1基である。平面形は隅丸方形で長軸1.5m、短軸1.0mを測り、深さは0.1mと浅い。

遺物は6の鉄釘が出土した。

#### 第2号土壌（第35図）

D-3グリッド、第1号住居跡と第2・3号住居跡の中間に位置する。平面形は菱形に近く長軸1.0m、短軸0.9mである。深さ0.14m浅い。南東コーナーは浅いピットによって切られている。

#### 第3号土壌（第35図）

D-3グリッドに位置し、第2号土壌の東側に並んでいる。平面形は方形で長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.19mと第2号土壌と近似している。

#### 第4号土壌（第35図）

D-3グリッドに位置する。平面形は円形に近く長径1.0m、短径0.9mで、深さは0.29mである。

#### 第5号土壌（第35図）

B・C-3グリッドに位置する。平面形は径1.1mの円形である。深さは0.44mと深く、覆土中にロームブロックを多く含む。

#### 第6号土壌（第35図）

B-4グリッドに位置する。西側が攪乱されているため、全体の平面形は不明であるが、楕円形と思われる。長軸は残存状況で1.0m、短軸0.6mである。深さ0.7mと深く、覆土上層にロームブロックを多量に含んでいる。

#### 第7号土壌（第35図）

B・C-3グリッドに位置する。第5号土壌の東側に近接する。平面形は径0.9mの円形で、深さは0.24mである。

#### 第8号土壌（第35図）

C-3グリッドに位置し、第9号土壌の東側に並んでいる。平面形は径0.9mの円形で、深さ0.2mと浅い。

#### 第9号土壌（第35図）

C-3グリッドに位置し、第1号土壌と第8号土壌に挟まれている。平面形は径0.8mの円形で、深さ0.22mである。

#### 第10号土壌（第35図）

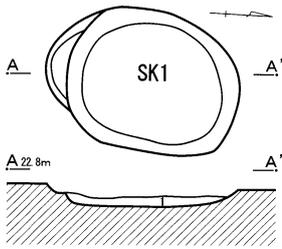
D-5グリッドに位置する。調査区東側中央で、土壌4基がまとまっている中の1基である。平面形は径1.1mの円形で、深さは0.29mである。

#### 第11号土壌（第35図）

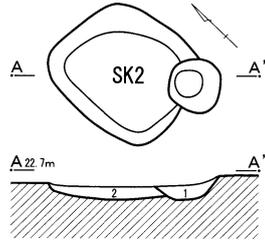
E-5グリッドに位置する。第10号土壌と第12号土壌に挟まれる。平面形は径1.0mの円形で、深さは0.19mと浅い。

#### 第12号土壌（第35図）

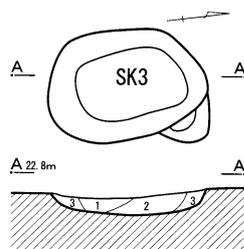
E-5グリッド、第11号土壌と第31号土壌の間に位置する。平面形は長軸1.3m、短軸1.0mの不整形で、深さ0.14mと浅い。



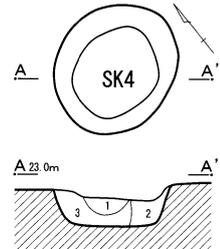
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む  
しまりなし



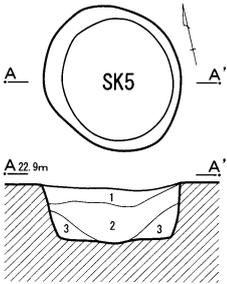
- 1 黄褐色土 ロームブロックを多量  
含む しまりなし  
2 黒褐色土 ローム粒子を含む  
しまりなし



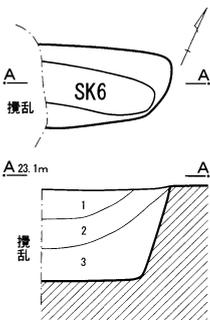
- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む  
しまりなし  
2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む  
しまりなし  
3 黄褐色土 ロームブロックを多量  
含む しまりなし



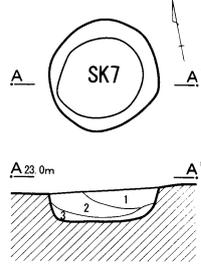
- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量  
含む しまりあり  
2 黒褐色土 ローム粒子を多量  
含む しまりなし  
3 黒褐色土 炭化物を微量、ロ  
ーム粒子を含む  
しまりあり



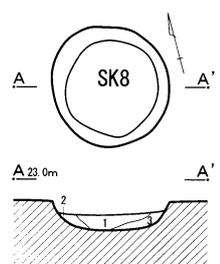
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む  
しまりあり  
2 暗褐色土 φ1cmのロームブロ  
ックを極多量含む  
3 黒褐色土 φ1~0.5cmのローム  
ブロックを含む



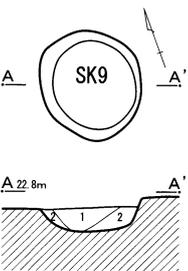
- 1 暗褐色土 φ1cmのロームブロックを  
多量含む しまりなし  
2 暗褐色土 φ1~0.8cmのロームブロ  
ックを多量含む しまり  
ややあり  
3 黄褐色土 黒褐色土をブロック状に  
含む しまりあり



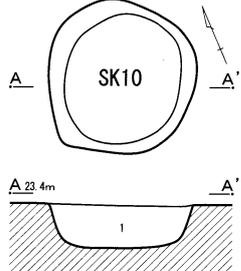
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む  
しまりあり  
2 暗褐色土 φ1cmのロームブロ  
ックを極多量含む  
3 黒褐色土 φ1~0.5cmのローム  
ブロックを含む



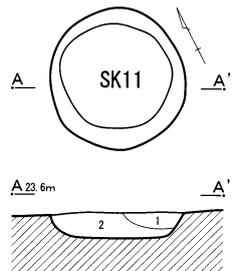
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む  
しまりあり  
2 暗褐色土 φ1cmのロームブロ  
ックを極多量含む  
3 黒褐色土 φ1~0.5cmのローム  
ブロックを含む



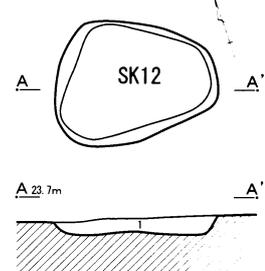
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む  
しまりあり  
2 暗褐色土 φ1cmのロームブロ  
ックを極多量含む



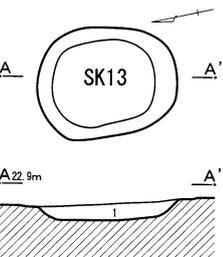
- 1 黒褐色土 ローム粒子を多量  
含む しまりなし



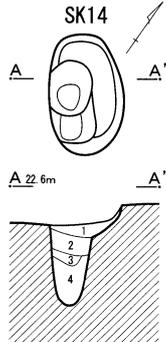
- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量  
含む しまりなし  
2 暗褐色土 ロームブロックを  
まばらに含む しまりなし



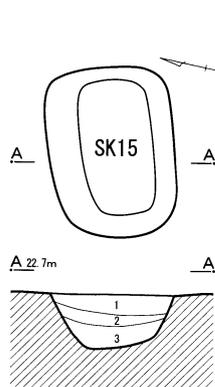
- 1 黒褐色土 ローム粒子をまばら  
に含む しまりなし



- 1 黒褐色土 ローム粒子を多量  
含む しまりなし



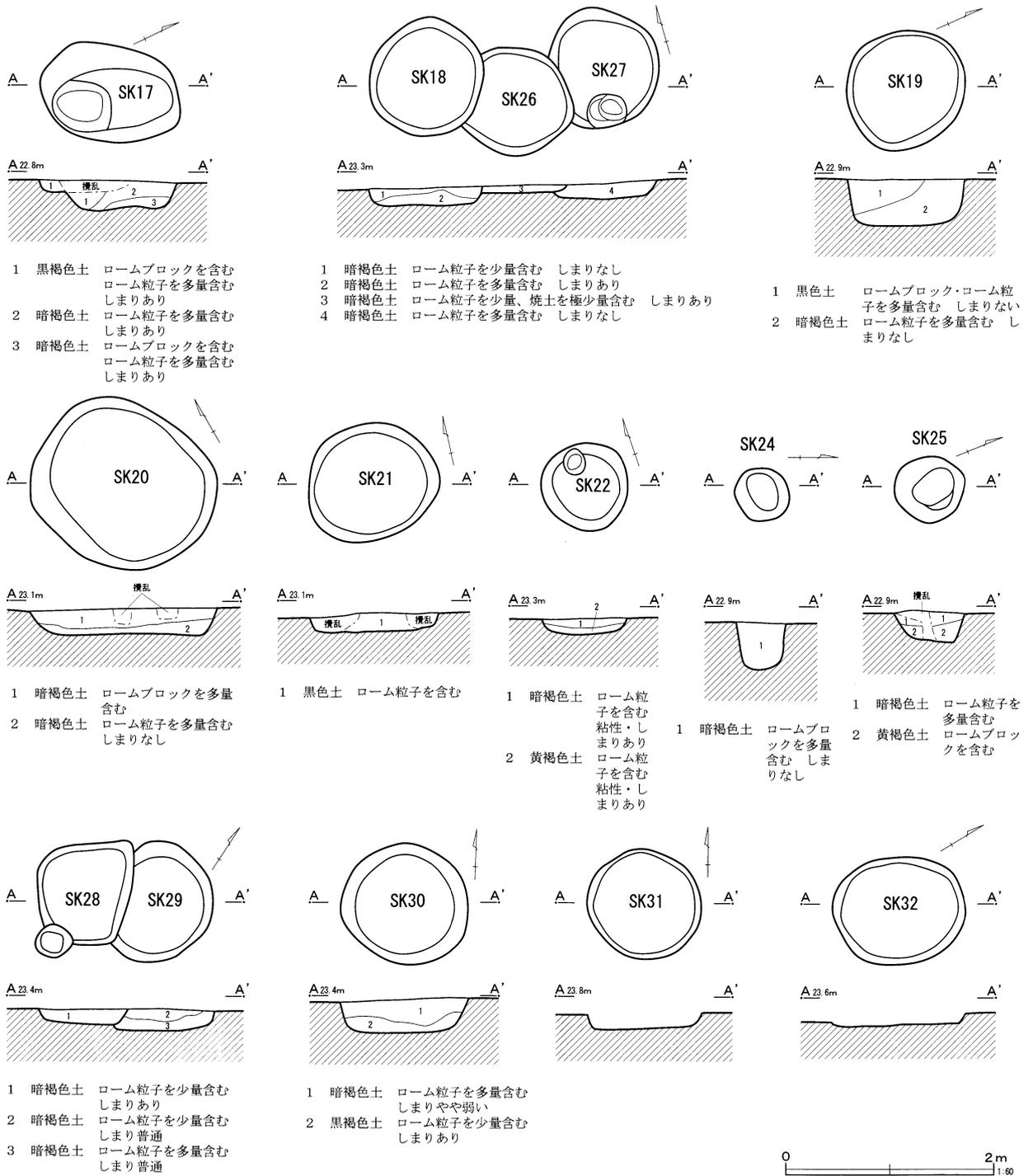
- 1 暗褐色土 φ1cmのロームブロックを多量含む  
しまりなし  
2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む しまりなし  
3 暗褐色土 φ1~2cmのロームブロックを主体に、  
φ10cmのロームブロックを含む しまりあり  
4 暗褐色土 しまりなし



- 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含む  
2 暗褐色土 焼土粒子を多量含む  
ローム粒子を極少量含  
む しまりあり  
3 暗褐色土 焼土粒子を少量、ロ  
ーム粒子を多量含む



第35図 土壌 (1)



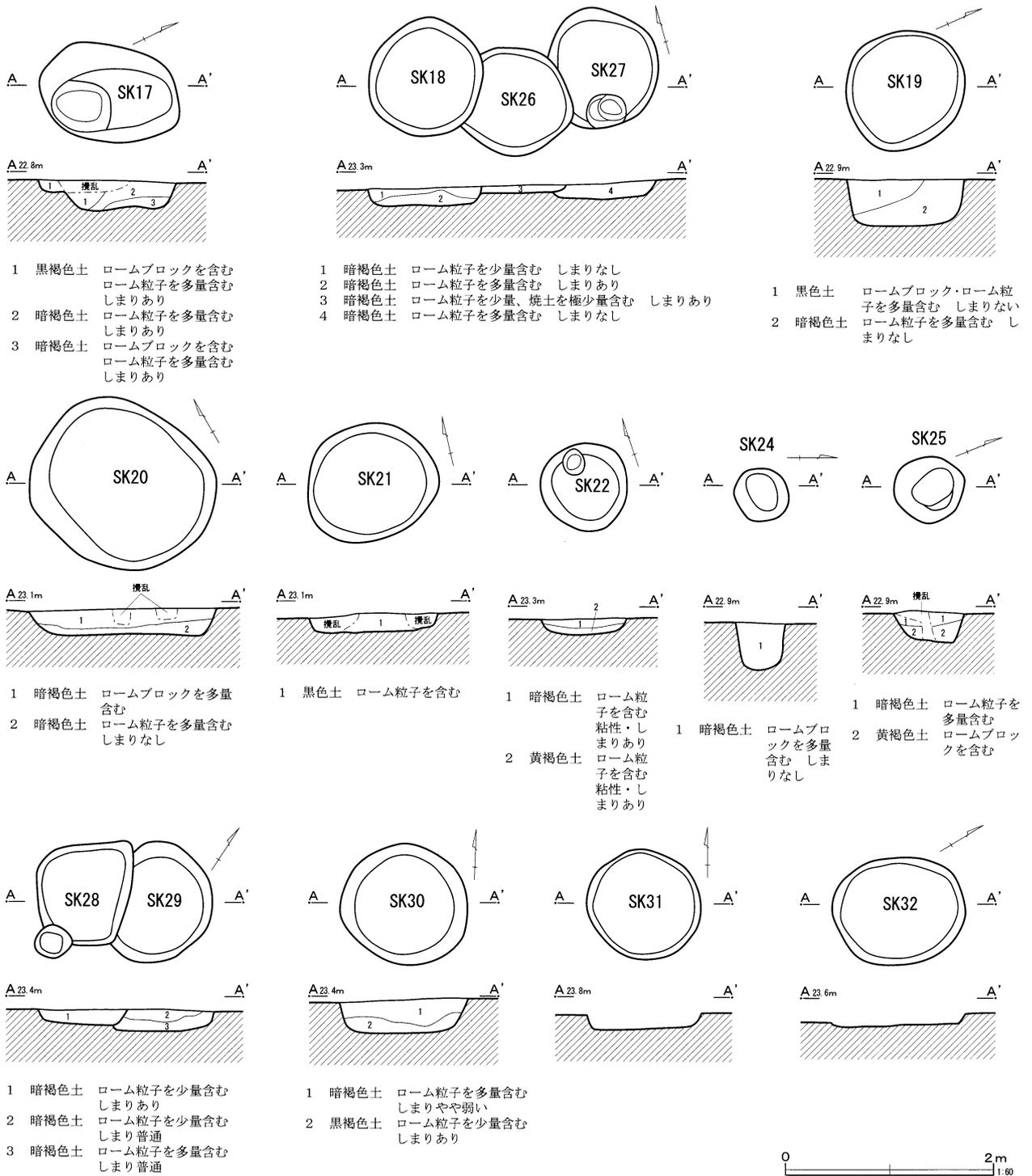
第36図 土壌 (2)

第13号土壌 (第35図)

D-3グリッド、第2・3号住居跡の北側に位置する。平面形は隅丸方形で長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.12mである。

第14号土壌 (第35図)

C-3グリッドに位置し、第1号住居跡の北東コーナー部で重複する。覆土の観察から住居跡より新しい。平面形は楕円形で長軸0.9m、短軸0.6mで深さ0.76mである。



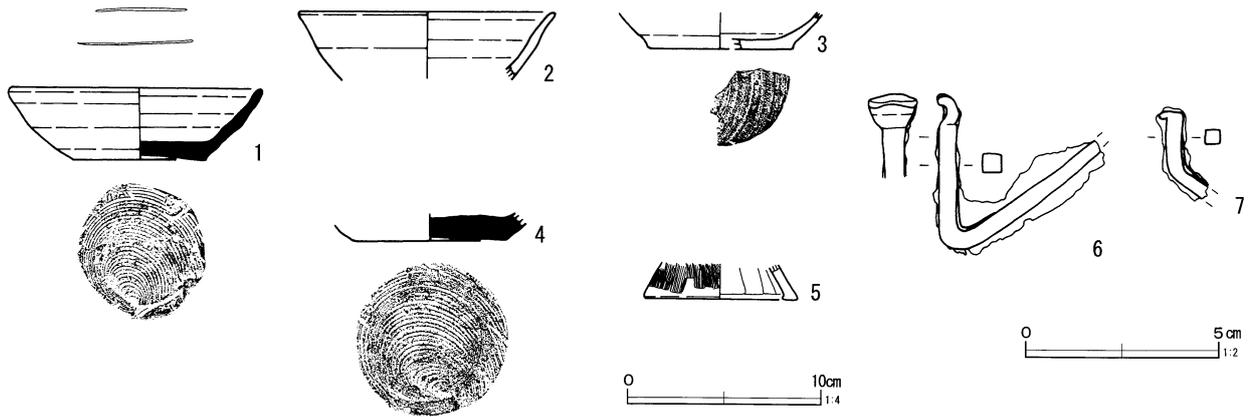
第36図 土壌 (2)

第13号土壌 (第35図)

D-3グリッド、第2・3号住居跡の北側に位置する。平面形は隅丸方形で長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.12mである。

第14号土壌 (第35図)

C-3グリッドに位置し、第1号住居跡の北東コーナー部で重複する。覆土の観察から住居跡より新しい。平面形は楕円形で長軸0.9m、短軸0.6mで深さ0.76mである。



第37図 土壌出土遺物

第12表 土壌出土遺物観察表

図版 No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	坏	13.2	3.7	6.8	1/2	砂粒 赤粒 白粒	普通	灰褐
2	須恵器	坏	(13.0)	[3.5]	—	破片	雲 白粒	不良	赤褐
3	須恵器	坏	—	[1.9]	(7.6)	底部破片	雲 白粒	不良	褐
4	須恵器	埴	—	—	7.8	底部のみ	石英 白粒	普通	灰
5	土師器	台付甕	—	[1.7]	(8.0)	破片	赤粒 白粒	普通	にぶい橙
6	鉄製品	釘	長さ (4.0)	頭幅 1.2					
7	鉄製品	釘	長さ (2.3)	頭幅 0.6					

#### 第15号土壌 (第35・37図)

C-2グリッドに位置し、第1号住居跡の南壁に重複する。覆土の観察から住居跡より新しい。平面形は隅丸方形で長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.42mである。

遺物は須恵器坏1が出土した。内面底部に2本の平行する沈線が刻まれている。

#### 第17号土壌 (第36・37図)

E-2グリッド、第5号溝跡の西側に接しており、有鉤銅釧が出土した第16号土壌の東側に位置する。平面形は楕円形で長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.24mである。

遺物は台付甕の破片5と釘ともわれる鉄製品7が出土した。

#### 第18号土壌 (第36図)

F-3グリッドに位置する。3基の土壌が連結しており、第26号土壌と重複している。覆土から第18

号土壌の方が新しい。平面形は径1.1mの円形で、深さ0.17mである。

#### 第19号土壌 (第36図)

F-2グリッドに位置する。平面形は径1.1mの円形で、深さは0.44mである。

#### 第20号土壌 (第36・48図)

F-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.26mである。

遺物は寛永通宝(第48図25)が出土した。

#### 第21号土壌 (第36図)

F-3グリッド、第19号土壌と第20号土壌の間に位置する。平面形はほぼ円形で径は約1.2mである。深さは0.16mと浅い。

#### 第22号土壌 (第36図)

F-3グリッド、調査区の南端に位置する。平面形

は径0.8mの小形円形である。深さは0.14mと浅い。

#### 第24号土壙 (第36図)

E-2グリッドに位置する。平面形は径0.5mの小形円形で深さは0.45mである。

#### 第25号土壙 (第36図)

E・F-2グリッドに位置する。平面形は径0.7mの小形円形で深さは0.29mである。

#### 第26号土壙 (第36図)

F-3グリッドに位置する。第18号土壙、第27号土壙と重複する。覆土の観察から第18号土壙より古く、第27号土壙より新しい。平面形は径1.0mの円形で、深さは0.08mと浅い。

#### 第27号土壙 (第36図)

F-3・4グリッドに位置する。第26号土壙と重複する。平面形は径1.0mの円形で、深さは0.14mである。

#### 第28号土壙 (第36図)

F-4グリッドに位置する。第29号土壙と重複す

る。平面形は不整形で長軸1.0m、短軸0.9m、深さは0.16mである。

#### 第29号土壙 (第36図)

F-4グリッドに位置する。第28号土壙と重複する。平面形は径約1.2mの円形で、深さは0.21mである。

#### 第30号土壙 (第36図)

F-4グリッド、第28・29号土壙の東側に位置する。平面形は径1.2mの円形で、深さは0.32mである。

#### 第31号土壙 (第36図)

E-5グリッドに位置する。第10～12号土壙と調査区東側中央に群をなす1基である。平面形は径1.1mの円形で、深さは0.15mである。

#### 第32号土壙 (第36図)

F-4グリッドに位置する。第7号住居跡と近接する。平面形は長軸1.3m、短軸1.0mの楕円形で、深さ0.11mである。

いものが見られる。

分布は調査区北側のB-3・4グリッド、調査区南側F-3、E-4グリッドの3ヶ所のまとまりが見られる、調査区の西側と東側は分布が希薄である。

#### 遺物 (第41図)

P-3から須恵器蓋1と板状の鉄製品7、P-15から青磁碗の破片5、P-20から土師器甕の破片6、P-34から須恵器坏の破片2、P-40から須恵器甕の口縁小破片3、P-63から須恵器甕の底部破片4と石錐(第47図14)が出土している。

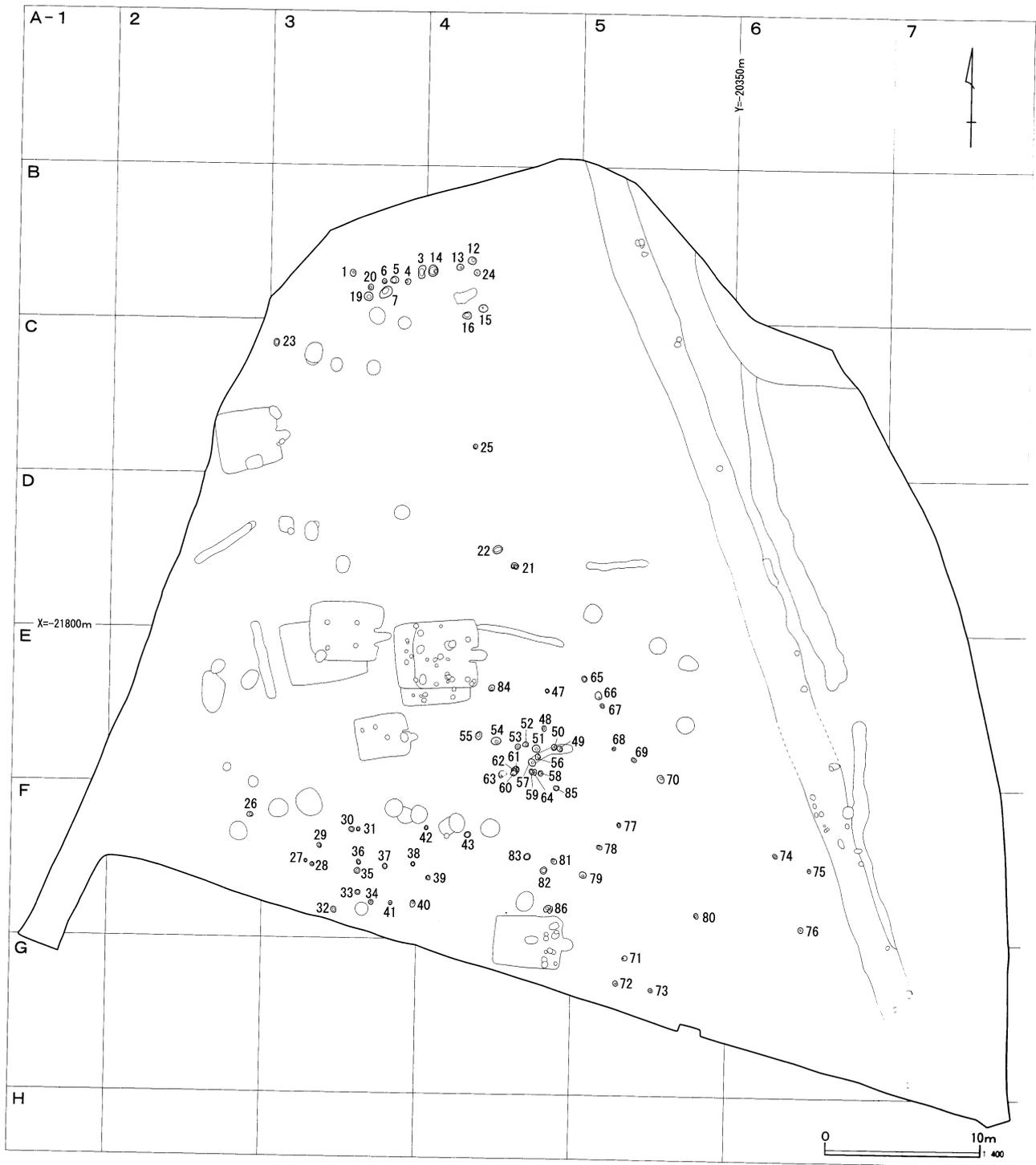
## 4. ピット

### ピット (第38～40図)

76基検出された。現場で86まで番号を振ったが、P-2、P-8～11、P-17、P-18、P-44～46は欠番である。

ピットの配置から、建物および柵列等として組み合わせるものは確認できず、時期等の確定が出来ないものが殆どである。

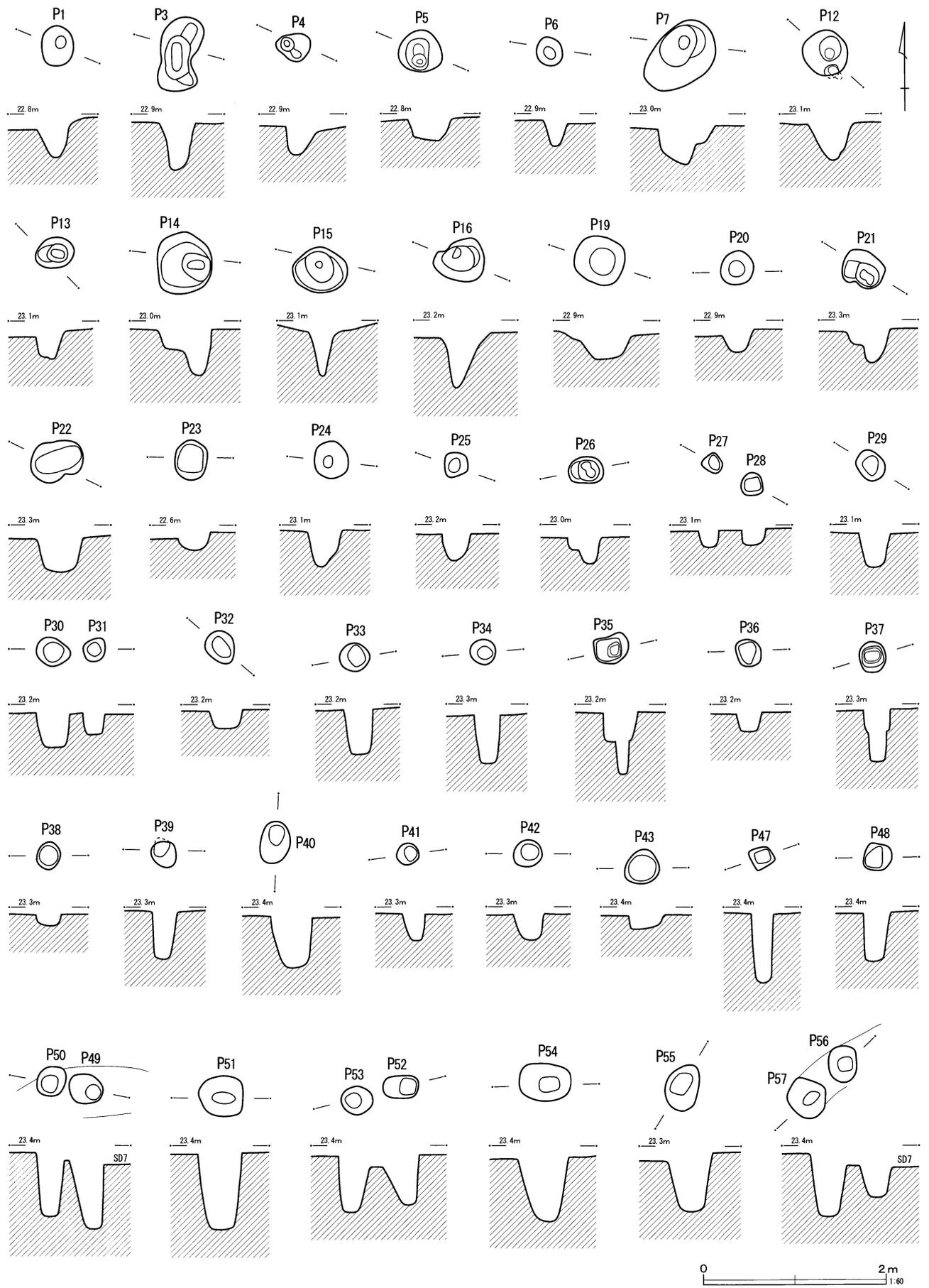
ピットの大きさは、径0.5～0.3m程度のものが多く、深さは約0.5mと深いものと、約0.3m以下の浅



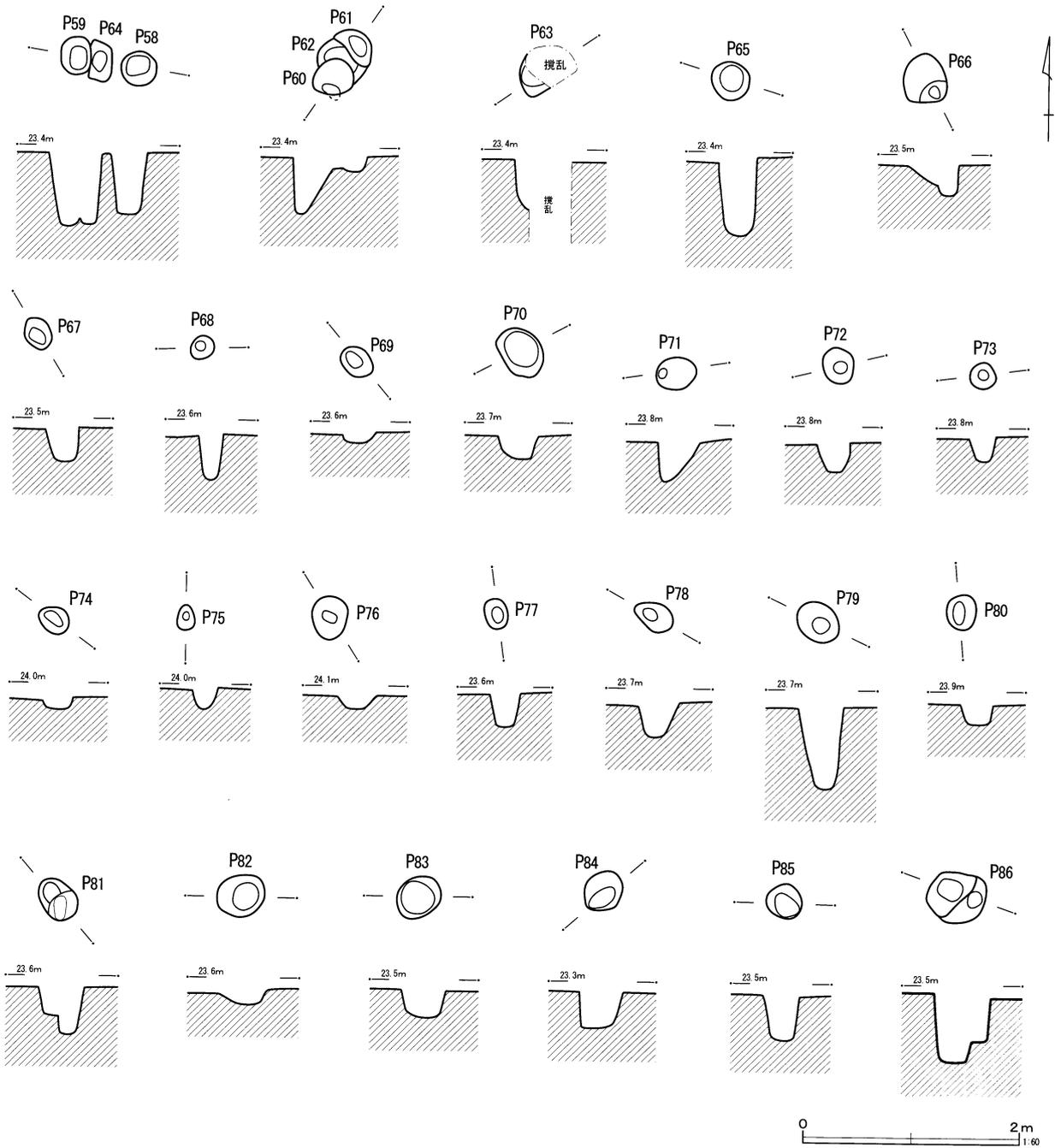
第38図 ピット分布図

第13表 ピット出土遺物観察表

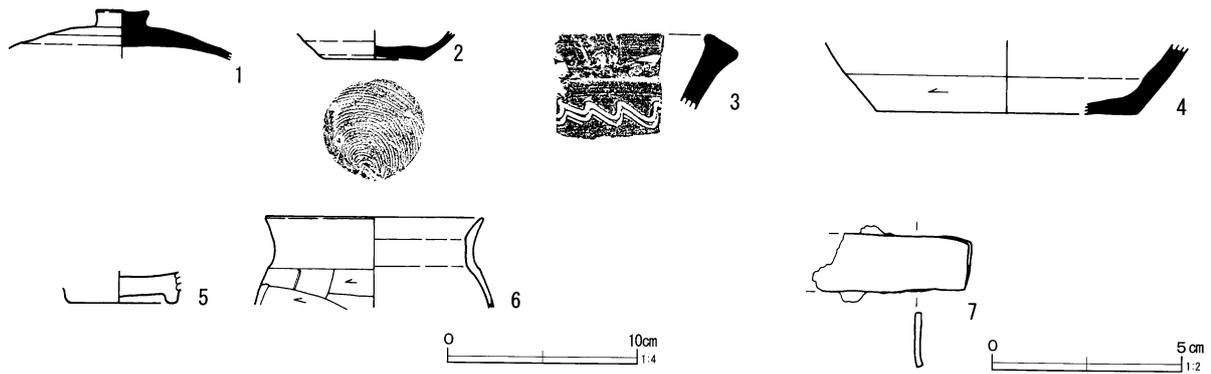
図版No	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
1	須恵器	蓋	—	[2.5]	—	天井のみ	白粒	普通	灰褐
2	須恵器	坏	—	[1.6]	5.0	底部のみ	白粒	普通	茶褐
3	須恵器	甕	—	—	—	口縁破片	砂粒 白粒	良好	灰
4	須恵器	甕	—	[3.8]	(14.0)	底部破片	白粒	普通	灰
5	青磁	碗	—	—	(5.9)	破片	—	良好	緑
6	土師器	台付甕	(11.4)	[4.7]	—	破片	雲 白粒	良好	茶褐
7	鉄製品	延板状品	長さ(4.2)	幅 1.4	—	—	—	—	—



第39図 ピット (1)



第40図 ピット (2)



第41図 ピット出土遺物

第14表 ピット一覧

番号	グリッド	直径/長軸	短軸	深さ
1	B-3	43.5		35.5
3	B-3	84.0	36.0	52.9
4	B-3	37.5		29.9
5	B-3	48.0		33.4
6	B-3	33.0		28.4
7	B-3	88.5	60.0	45.8
12	B-4	51.0		42.1
13	B-4	42.0		52.5
14	B-4	69.0		52.5
15	B-4	60.0		66.5
16	B-4	55.5		60.5
19	B-3	57.0		24.9
20	B-3	39.0		24.7
21	D-4	46.5		38.5
22	D-4	58.5		38.9
23	C-3	43.5		22.0
24	B-4	40.5		41.0
25	C-4	30.0		28.8
26	F-2	37.5		30.7
27	F-3	24.0		18.8
28	F-3	25.5		18.0
29	F-3	34.5		36.0
30	F-3	37.5		37.5
31	F-3	27.0		22.5
32	F-3	36.0		21.0
33	F-3	33.0		48.0

番号	グリッド	直径/長軸	短軸	深さ
34	F-3	27.0		52.5
35	F-3	37.5		67.5
36	F-3	30.0		21.0
37	F-3	33.0		57.0
38	F-3	31.5		12.0
39	F-4	30.0		51.0
40	F-3	46.5		57.0
41	F-3	24.0		30.0
42	F-4	31.5		30.0
43	F-4	39.0		15.0
47	E-4	24.0		75.0
48	E-4	36.0		54.0
49	E-4	30.0		75.0
50	E-4	37.5		69.0
51	E-4	46.5		84.0
52	E-4	34.5		55.5
53	E-4	39.0		63.0
54	E-4	57.0		69.0
55	E-4	51.0		66.0
56	E-4	39.0		34.5
57	E-4	45.0		69.0
58	E-4	33.0		57.0
59	E-4	36.0		66.0
60	E-4	36.0		39.0
61	E-4	39.0		13.5
62	E-4	48.0		10.5

番号	グリッド	直径/長軸	短軸	深さ
63	E-4	54.0		48.0
64	E-4	36.0		66.0
65	E-5	36.0		72.0
66	E-5	45.0		27.0
67	E-5	30.0		33.0
68	E-5	24.0		42.0
69	E-5	33.0		9.0
70	E-5	51.0		21.0
71	G-5	36.0		36.0
72	G-5	33.0		27.0
73	G-5	24.0		22.5
74	F-6	30.0		12.0
75	F-6	24.0		19.5
76	F-6	39.0		12.0
77	F-5	27.0		31.5
78	F-5	39.0		31.5
79	F-5	42.0		75.0
80	F-5	33.0		18.0
81	F-4	42.0		43.5
82	F-4	45.0		13.5
83	F-4	45.0		24.0
84	E-4	42.0		33.0
85	F-4	33.0		42.0
86	F-4	57.0		63.0

## 5. 弥生時代後期から古墳時代初頭

### 第16号土壌 (第42図)

E-2グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸は3.4m、短軸は1.5m、深さは遺構確認面から0.33mである。

有鉤銅釧が発見され、東側に第5号溝跡が位置するため、当初方形周溝墓の主体部になるのではないかと考え、精査したが、覆土の堆積状況はロームブロックを含むふかふかの土で、遺構の底面も凸凹があり、確りした掘り込みが確認できなかった。また、有鉤銅釧に伴う遺物は出土しておらず、遺構の時期を確定する要素に乏しい。

### 有鉤銅釧 (第43図)

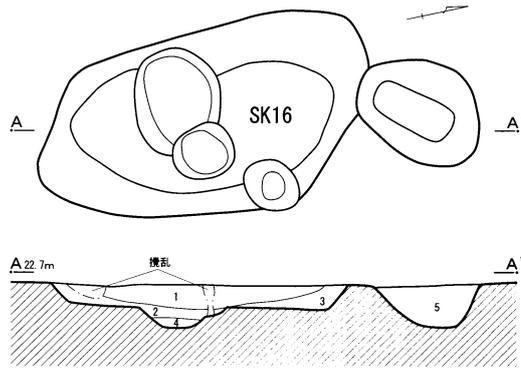
1は銅製鑄造の有鉤銅釧である。特徴となる「鉤」の部分の失われているが、復元された形状や環の造りから、有鉤銅釧と判断した。6片に分かれて出土したため、枝番号を1～6まで振って説明する。このうち、1～3と4・5は接合関係にある。6の接

点はないが、おそらく3の一方の端部に続くものと考えられる。

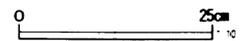
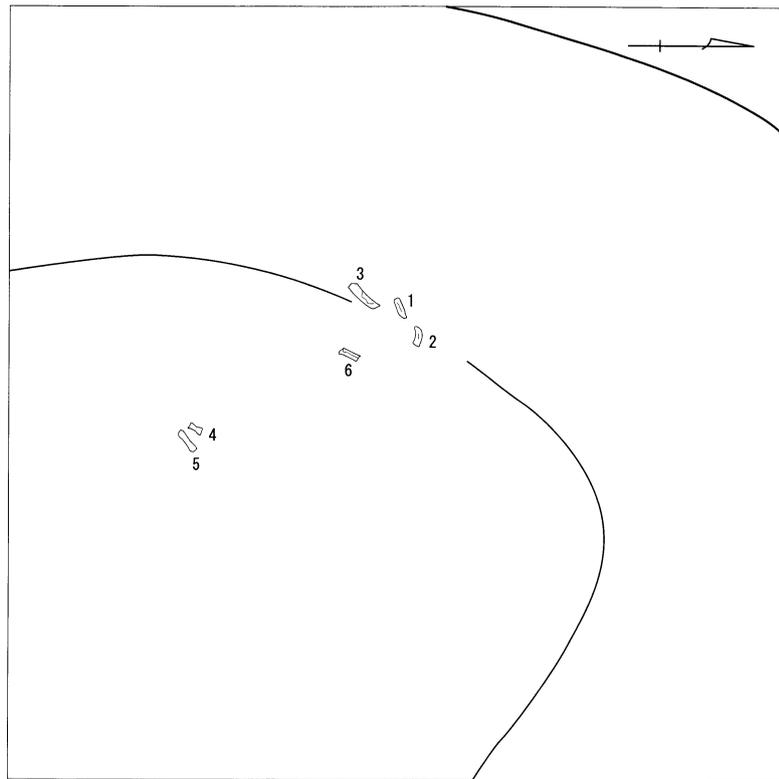
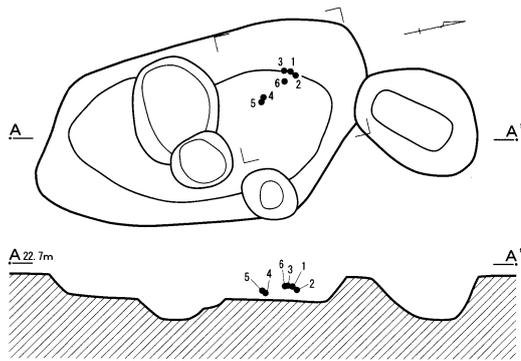
環は帯状で幅はほぼ0.9cm、長さは1が2.5cm、2が2.4cm、3が3.3cm、4が1.6cm、5が3.3cm、6が1.7cmである。中央には稜を有し、外表面と側端面は丁寧に研磨されている。内面には鑄造の際にできたバリがそのまま残る。環の厚さは、中央部で2mm(バリを含む)、側部は1mmと薄い造りである。断面形は山形を呈する。重さは合計11.3gである。

補修孔を設けた端部は、丁寧に研磨されている。1と5には直径約2mmの補修孔が2箇所平行して設けられている。4の補修孔は中央寄りの1箇所のみである。

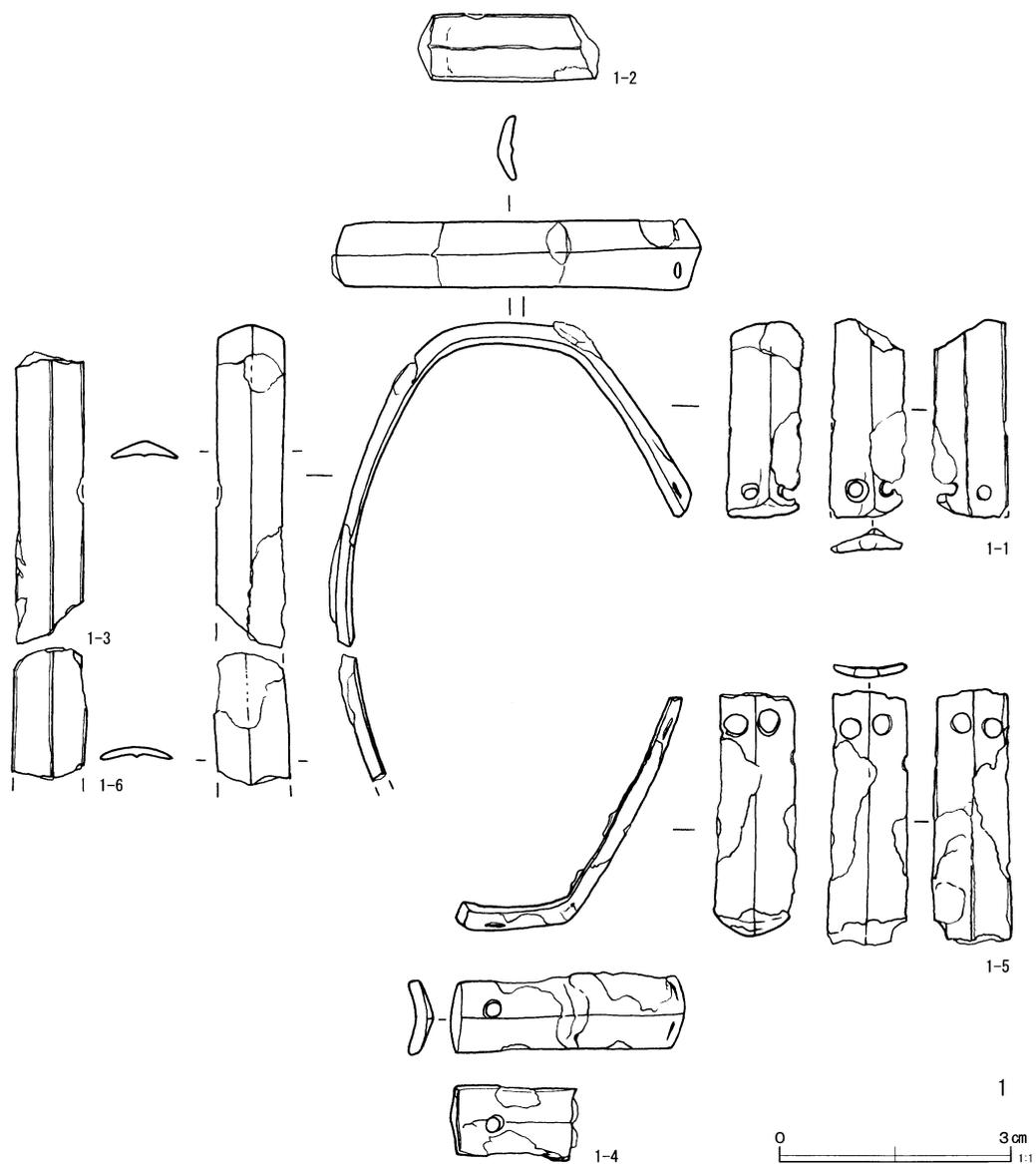
これらの破片から、この銅釧を復元すると、高さ約8cm、幅約4.5cmになると推測される。失われた「鉤」の部分を含め、3つに破損したため、端部を整形し、補修孔を設けて使用に供したものと考えられる。



- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量、ローム粒子を微量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロックを全体に含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量、ロームブロックを全体に多量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む
- 5 褐色土 ローム粒子を多量含む 炭化物を全体に含む



第42図 第16号土壌



第43図 有鉤銅釧

## 6. 旧石器時代

### 1. 概要

宮台・宮原遺跡は第2・4・5地点から旧石器が検出されている。今回の調査は、台地縁辺に位置することから旧石器の出土が想定されたので、平安時代及び中世の遺構の精査が終了後、10mグリッド毎に2×2mの区画を22箇所設定し立川ローム最下層まで調査を行ったが、石器集中及び礫群は検出されなかった。石器は、No.1トレンチから碎片1点、No.20トレンチからナイフ形石器の先端部の碎片1点が

出土した。また、遺構確認の段階でE-5グリッドからナイフ形石器が1点検出された。

### 2. 基本土層 (第44・45図)

断面図は基本的に各トレンチの東面と南面を実測し、地形を捉えるため2本のラインを設定し報告書に掲載した。

立川ロームの表記は、武蔵野台地の基本層序に従って呼称する。

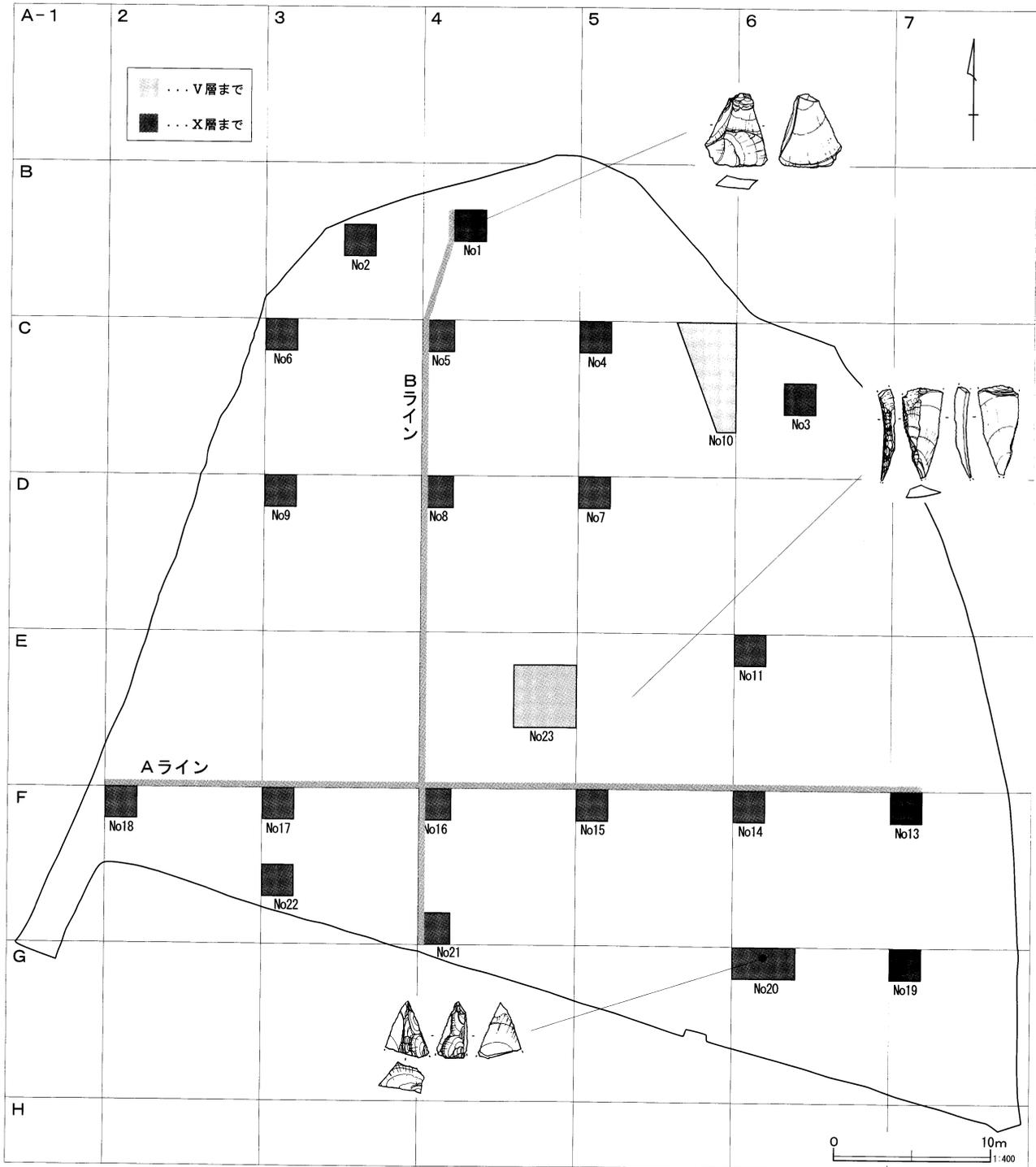
第Ⅲ層：ソフトローム

第Ⅳ層：ハードローム ソフトロームが入り込んでいるため、断面ではブロック状に見える。赤色・黒色スコリアを含む。

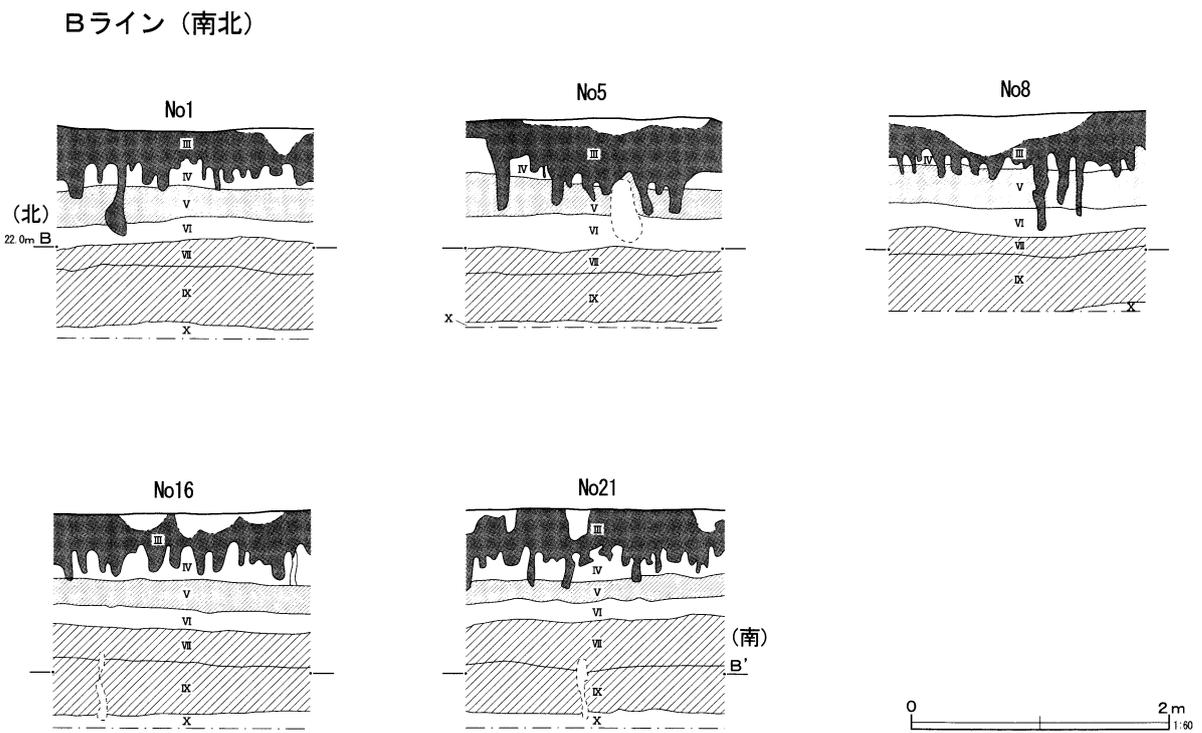
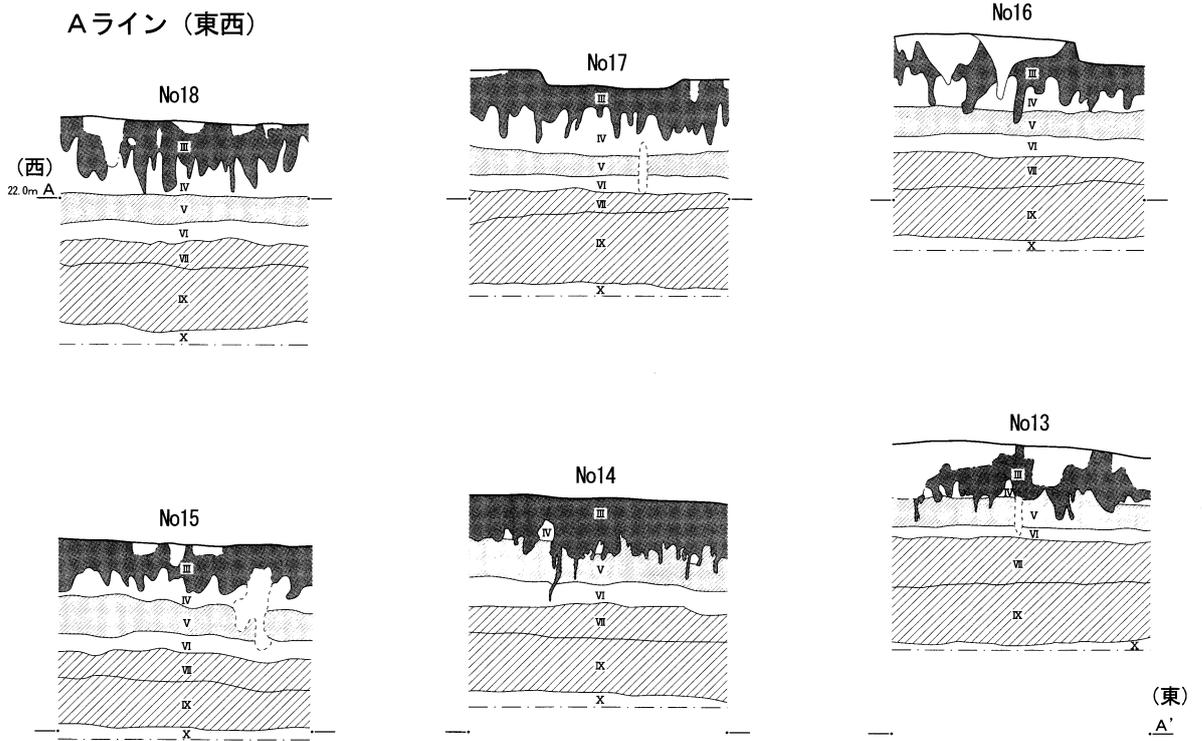
第Ⅴ層：第1黒色帯 色調は黒味が少なく第Ⅳ層との区分が分かりにくい。赤色・黒色スコリアを含む。

第Ⅵ層：ハードローム 上下の黒色帯に挟まれて、色調は明るく明確に分離できる。赤色・黒色スコリアは少量含む。

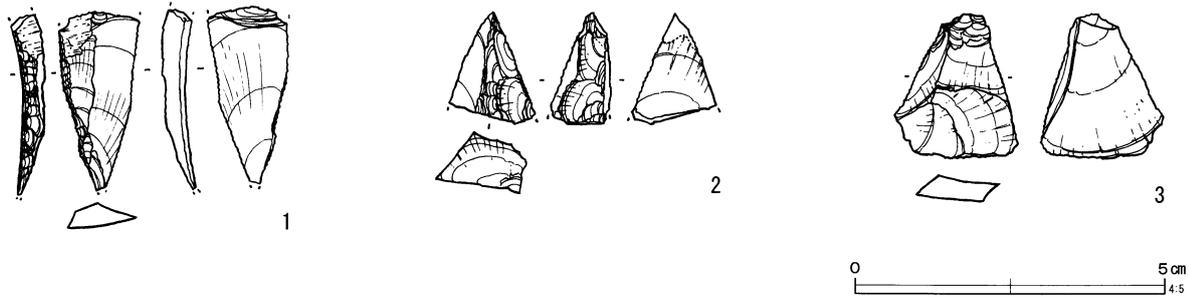
第Ⅶ層：第2黒色帯上部 暗色ロームと黄褐色ロームがブロック状に入る。赤色・黒色スコリアを多く含む。



第44図 旧石器調査区



第45図 土層断面図



第46図 旧石器時代石器

第15表 旧石器時代石器計測表

図版No	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	石材	備考
1	E-4		ナイフ形石器	(2.9)	0.6	0.4	1.2	黒耀石	
2	No.20	IV	ナイフ形石器	(1.7)	(1.4)	(0.9)	1.6	ガラス質黒色安山岩	
3	No.1		碎片	2.6	2.0	0.4	1.7	ガラス質黒色安山岩	

第IX層：第2黒色帯下部 色調は第VII層より黒味が強い。赤色・黒色スコリアを多く含み、特に赤色スコリアが目につく。No.8トレンチでは第X a層と第X b層に分層できた。第X a層は他のトレンチの第IX層と同じで第X b層は色調が明るくなる。

第X層：ハードローム 赤色・黒色スコリアを殆ど含まない。

#### Aライン

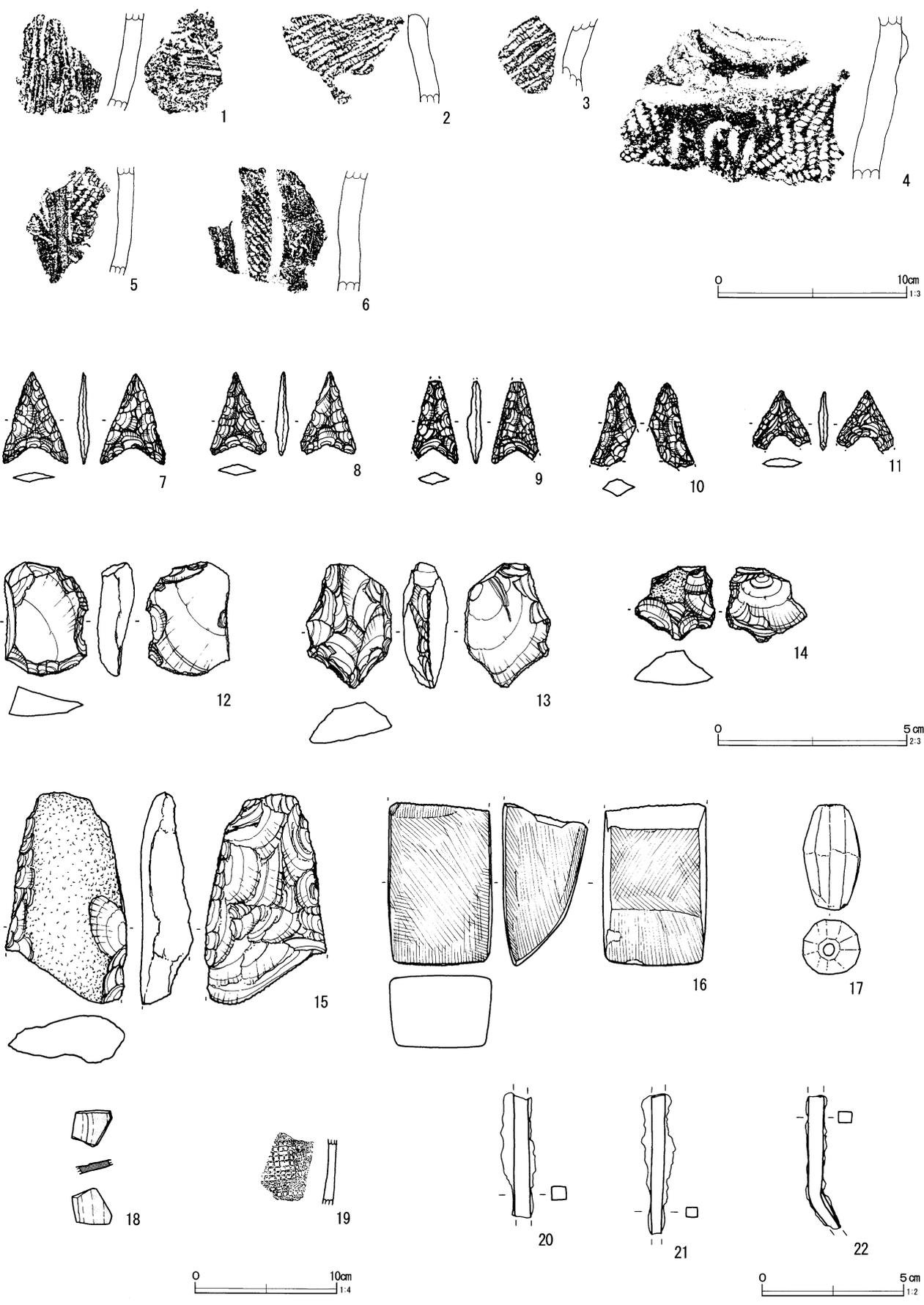
遺跡を東西方向に横断するように並べた。東から西に向かって約1m標高が下がっている。標高の高い東側 (No.13・14) では第III層：ソフトロームが厚く第IV層はブロック状でしか確認できないが、標高の低い西側 (No.17・18) では層位として明確に捉えられる。第1黒色帯トップの標高が現地形と同じ様に下がっており、立川ローム段階では現地形と殆ど同じであったと思われる。

#### Bライン

遺跡を南北方向に横断するように並べた。Aラインと比べて、標高の差は殆どなく、ローム層の堆積状況も殆ど均一である。

#### 3. 出土遺物 (第46図1～3)

1. ナイフ形石器 透明度の高い黒耀石を用いており、上半部を欠損する。素材剥片は下位方向で正面の剥離面の方向と一致する。調整加工は右側縁の下半部に施されている。遺構確認作業の段階で検出された。近接する第5・6号住居跡の覆土遺物を確認したが旧石器時代の遺物は含まれていなかった。また、No.23トレンチを設定したが、石器は出土していない。
2. ナイフ形石器 先端部破片、石材はガラス質黒色安山岩である。今回の調査で唯一プライマリーなもので、No.20トレンチの第IV層中から出土した。
3. 碎片 No.1トレンチ調査中出土したが、現位置は不明である。石器にローム層が付着していることから、旧石器時代のものと思われる。



第47図 グリッド出土遺物（1）



第48図 グリッド出土遺物（2）

第16表 グリッド出土遺物観察表

図版No	出土地点	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	石材	備考	
7	SJ-2	石製品	石鏃	2.4	1.7	0.3	0.7	チャート		
8	SK-31	石製品	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.7	チャート		
9	F-3	石製品	石鏃	(2.5)	1.3	0.4	0.8	チャート		
10	SJ-7	石製品	石鏃	(2.6)	(1.3)	0.5	0.9	黒耀石		
11	C-6	石製品	石鏃	1.6	1.5	0.2	0.4	黒耀石		
12	E-3	石製品	搔・削器	3.0	2.2	0.8	6.5	メノウ		
13	SJ-5	石製品	搔・削器	3.3	2.3	1.1	9.6	チャート		
14	P-63	石製品	石錐	2.0	2.1	0.9	4	メノウ		
15	C-4	石製品	打製石斧	(7.5)	4.3	1.7	37.6	砂岩		
16	SD-1	石製品	挟入柱状片 刃石斧	(5.8)	3.7	2.6	111.9	砂岩		
17	G-3	土製品	土玉	3.3	2.1	1.9	13.3			
		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調
18	F-4	灰釉	段皿	—	—	—	破片	白粒	良好	灰白
19	G-1	常滑	甕	—	—	—	破片		良好	紫灰
20	C-6	鉄製品	棒状品	長さ(4.4)	幅 0.5					
21	C-2	鉄製品	棒状品	長さ(5.0)	幅 0.4					
22	E-3	鉄製品	棒状品	長さ(4.8)	幅 0.5					
23	F-7	古銭	寛永通宝							
24	F-1	古銭	寛永通宝							
25	SK20	古銭	寛永通宝							

## 7. グリッド出土の遺物

### 縄文土器（第47図1～6）

1は早期の条痕文系土器である。器壁に繊維を少量含み、暗赤褐色を呈し、内外面に条痕整形を施す。

2、3は前期中葉の繊維土器で、黒浜式に比定される土器群である。2は胴部の括れから下の破片で、単節LRを施文する。3は胴括れ部の破片で、単節LRを施文する。

4、5は中期末葉の加曾利EⅢ式に比定される土器群である。4は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部に底流帯の渦巻文を施文し、胴部に蕨手状懸垂文を挟む幅広の磨消懸垂文を施文する。地文は単節RLである。5は底部付近の破片で、磨消懸

垂文が垂下し、単節RLを地文にする。

6は後期初頭の称名寺I式に比定される土器で、太くて深い角状沈線でモチーフを描く胴部破片である。細かな単節LRを充填施文する。

### 石鏃（第47図7～11）

7は第2号住居跡出土、石器石材はチャート製で、作りは丁寧である。

8は第31号土壙出土、石器石材はチャート製で、7より作りは粗い感じである。

9は先端と左脚端部を欠損する。石器石材はチャート製で、細身に作っている。

10は第7号住居跡掘り方から出土、石器石材は黒

耀石が用いられている。右脚部及び左脚端部を欠損している。先端は途中から窄まっており、再生加工の可能性はある。

11は基部の挟りの深い、右脚端部を欠損している。石器石材は黒耀石が用いられている。

#### 搔・削器（第47図12～13）

12は表面が風化によるためか、ザラツイテいる、石器石材はメノウ製である。

13は第5号住居跡掘り方から出土している。石器石材はチャート製で、刃部の縁辺は潰れて丸くなっている。

#### 石錐（第47図14）

P-63から出土している。石器石材はメノウ製である。

#### 打製石斧（第47図15）

下半部を基端部から刃部方向の力によって欠損している。正面に自然面を残し、裏面は両側縁からの加工でレンズ状に仕上げている。石器石材は砂岩である。

#### 扶入柱状片刃石斧（第47図15）

第1号溝跡出土である。基部側を大きく欠損している。隣接する向山遺跡からまとめて出土している。

有鉤銅釧と合わせてその関連性が注目される。

#### 土玉（第46図17）

切子玉風に面取りしている。

#### 灰釉陶器（第47図18）

段皿の小破片である。

#### 陶器（第47図19）

常滑甕の小破片である。外面に格子状の叩き目を有する。

#### 鉄製品（第47図20～22）

棒状鉄製品両端が欠損しており、用途は不明である。

#### 古銭（第48図23～25）

23～25は寛永通寶である。23は、全体に残存状態は良いが、「寛」字が潰れている。銭径は縦25mm、横25mm。銭厚は1mm、重さは3.4gである。F-7グリッド確認面出土した。24は、「永」字部分が欠失している。背文である。字体から寛文8年の江戸所鑄銭と思われる。縁はやや傷んでいるが、銭径は横24mmである。第9号溝跡から出土した。25は、残存状態は比較的良い。銭径は縦22mm、横22mm。銭厚は1mm、重さは1.8gである。第20号土壙から出土した。

# V まとめ

## 1. 宮台・宮原遺跡の平安時代集落について

宮台・宮原遺跡が所在する朝霞市は、武蔵野台地の北東部に位置する。東側は荒川を境にさいたま市と接し、市域の中央に目黒川が東西方向に流れている。

本地域の地形は、台地部は武蔵野面、目黒川流域は立川面、荒川低地は沖積面となっており、遺跡の多くは武蔵野面に立地している。

宮台・宮原遺跡は、目黒川が下流の右岸に位置し、標高は約23mで、沖積面との標高差は約17mである。

朝霞市内で調査された平安時代の遺跡は、平成12年の時点で16箇所である。照林氏は地形等の検討から、それら遺跡群を8つのグループに区分することができるとしている。宮台・宮原遺跡が含まれるグループは、多数の住居跡及び掘立柱建物跡が検出された向山遺跡、宮台遺跡が含まれる。向山遺跡・宮台遺跡とも現在整理作業中のため、詳細は不明であるが、向山遺跡では市内最大規模の掘立柱建物跡が検出され、円面硯・緑釉陶器・灰釉陶器・石製丸軋等の遺物が出土し、官衙など関係する集落の可能性が指摘されている。いずれにしても当該地域の中心的集落跡と考えられる。

今回の発掘調査は第7地点にあたり、平安時代の住居跡が7軒検出された。朝霞市教育委員会が実施した第1～6地点の調査内容は遺跡の概要で述べたが、報告書が刊行されている第1・2地点と合わせてもう少し詳しく見てゆくことにする。

宮台・宮原遺跡の範囲は、南北約530m、東西約500mと広く、地形的には南から北に向かい緩く傾斜しており、今回調査した第7地点では東から西側に緩く傾斜している。また、東側ほぼ中央に小さな

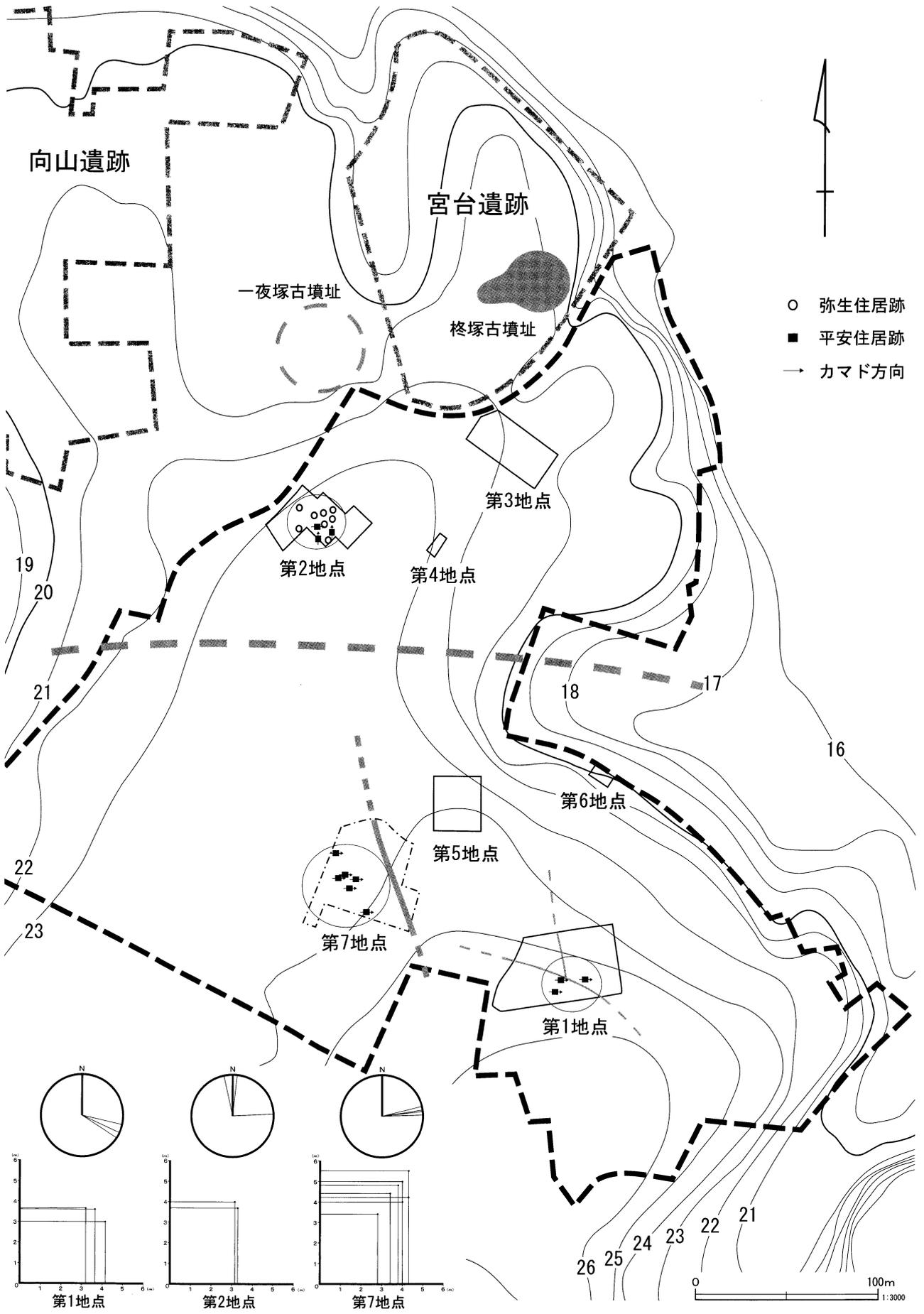
谷が入っており、地形的に北側の第2～4地点と南側の第1・5～7地点に分けられそうである。遺構の時期は、南側は平安時代の住居跡が集中しており、北側は弥生時代の住居跡と平安時代の住居跡が見られる。

平安時代の住居跡は第1・7地点とも数軒がまとまり、小グループを形成しているように見える。

第7地点は、調査区の西側で住居跡7軒が直線に並んで検出されており、調査区外にも広がる可能性もある。カマドは確認された5軒全てが東壁に設置されており、N-E76～88°と規格性が高い。住居跡の規模は、カマドを上位にすると縦が約3.4～6.0m、横が約2.8～4.3mの範囲でやや縦長である。遺物は鉄鏃等の金属製品が豊かで、墨書土器は「川」「東」が見られる。

第1地点は、住居跡3軒が調査区の南側にまとまっている。第7地点と同じくカマドは東壁に設置されているが、N-E103～123°と第7地点よりやや南側に傾いている。住居跡の規模は、カマドを上位にすると縦が約3.0～3.6m、幅が約3.2～4.2mと横長である。遺物は「✕」記号の様墨書された須恵器坏が出土している。

第2地点は、カマドの方向がN-E7～12°の北壁と、N-E78°の東壁に設置された住居跡が見られ、第1・7地点と異なる様相がみられる。規模はカマドを上位とすると縦が約4.0m、幅が約3.5mとやや小規模である。以上、調査報告された地点の状況を概観したが、遺跡全体からすると、調査面積が狭く、遺跡全体の把握には難しい状況である。今後の調査・整理作業が進むなかで、集落の全貌が明らかになることを期待したい。



第49図 宮台・宮原遺跡の住居跡の分布

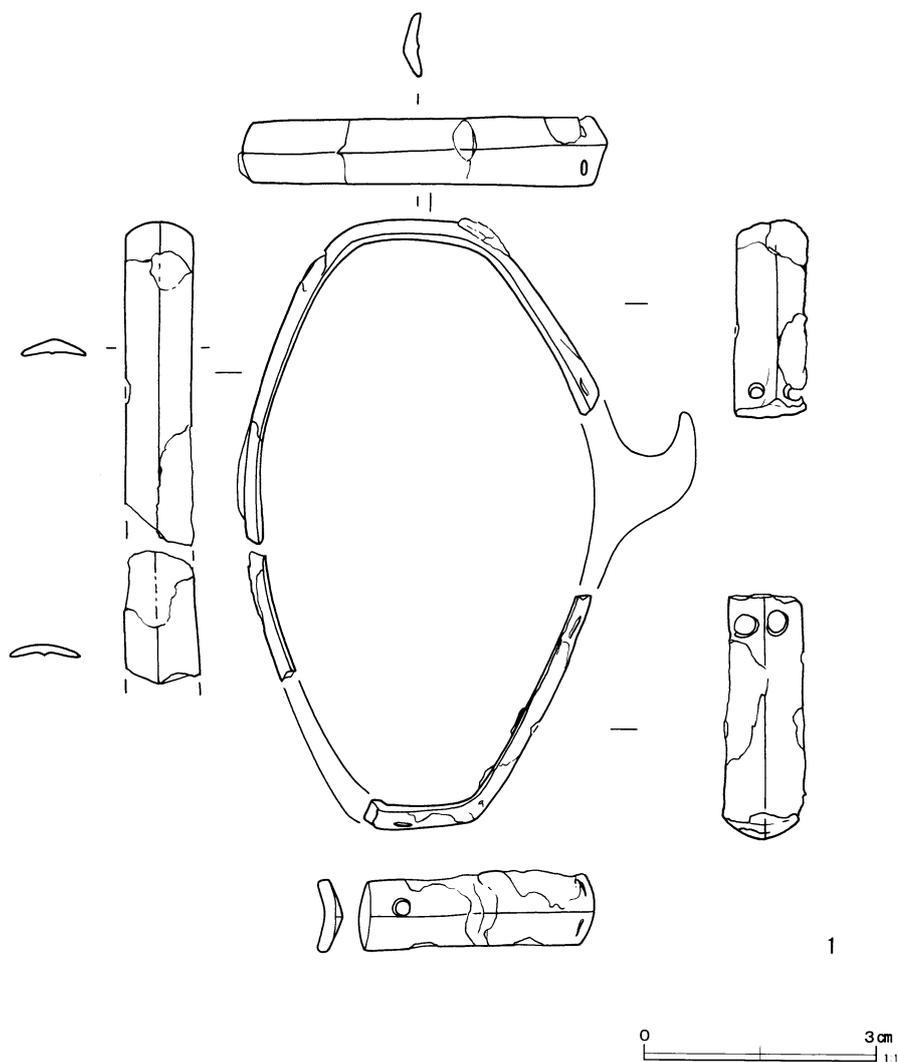
## 2. 有鉤銅釧について

有鉤銅釧は、第16号土壌に堆積した埋土中から、6つの破片となって出土した。銅製の带状金具は、その復元形を検討した結果、鉤部を欠いた有鉤銅釧であることが判明した（第50図1）。

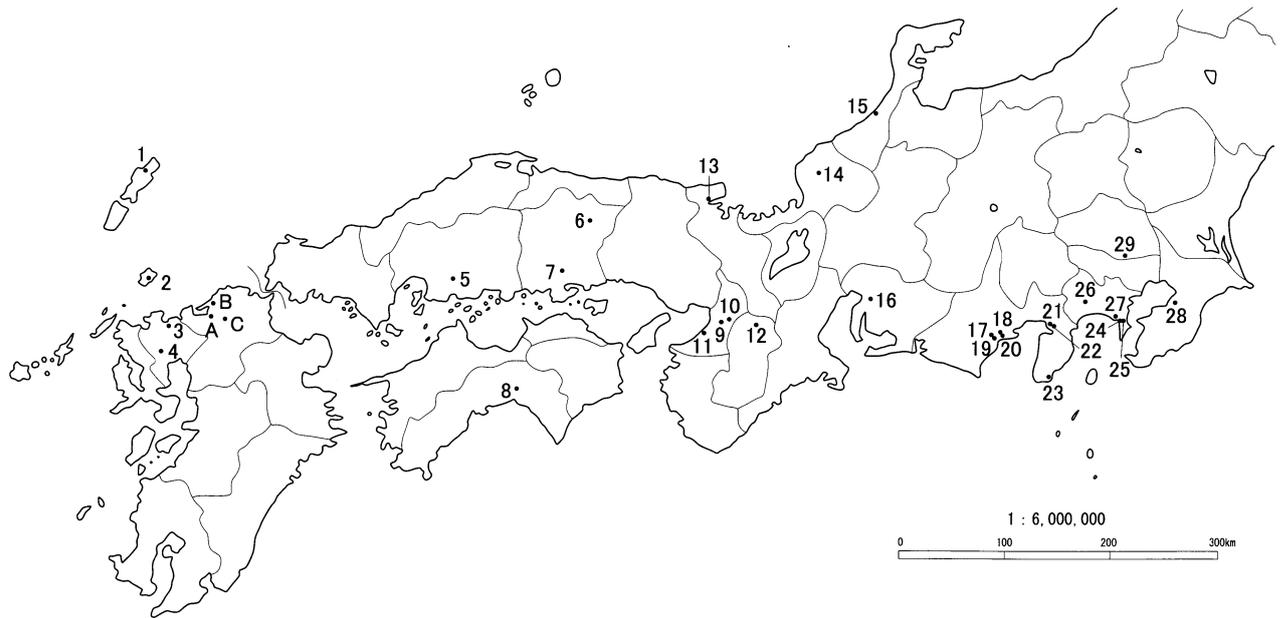
有鉤銅釧は、貝輪を写して製作された貝輪系銅釧のなかでも、ゴホウラ系銅釧に属する。主として弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡で発見され、管見では全国で28遺跡78点の出土例がある。主な分布は、対馬・壱岐を含む北九州から瀬戸内、畿内、北陸、東海、南関東まで広がる。本例は、埼玉県では初の出土例であり、太平洋沿岸では最北にあたる（第51図参照）。

有鉤銅釧が出土した第16号土壌は、後述するが、遺構に伴うと考えられる遺物は存在せず、すべて混入品と考えられている。したがって、本例の年代を共伴土器から決定づけることはできない。そこで、有鉤銅釧そのものの分析から、本例の年代的位置づけを明らかにしていこうと思う。

本例は、環体が扁平で带状になることが大きな特徴である。このような特徴をもつ有鉤銅釧（以下带状有鉤銅釧と仮称する）は、ほかに、小黒例、曲金北例、矢崎例、池子例、根丸島例があり（第52図）、出土遺跡は東海～南関東地方に集中している。木下尚子氏は、有鉤銅釧をその形状や材質などの要素を



第50図 宮台・宮原遺跡出土の有鉤銅釧（復元図）



No.	所在	遺跡名	個数	遺構種類	状態	文献
1	長崎県 対馬市	佐護白岳	2	積石墓(石棺)		水野・樋口・岡崎1953
2-1	長崎県 壱岐市	原の辻(大川地区)	3	甕棺?		安楽・藤田1978/福田・中尾2005
2-2	長崎県 壱岐市	原の辻(原地区)	1		鉤片	福田・中尾2005
3	佐賀県 唐津市	桜馬場	26	甕棺		杉原・原口1961
4	佐賀県 武雄市	茂手	1	掘立柱建物跡		八坂 他1986
5	広島県 東広島市	浄福寺2号	1	竪穴住居跡		山田 他1993
6	岡山県 津山市	荒神峪	1	竪穴住居跡	破片	小郷・白石1999
7	岡山県 岡山市	加茂政所	1	土壌	鉤片	松本 他1999
8	高知県 南国市	田村遺跡群B3区	1	竪穴住居跡	鉤片	前田2004
9	大阪府 大阪市	長原(NG03-6次)	1	竪穴住居跡	鉤片	大庭 他2005
10	大阪府 東大阪市	巨摩廃寺	1	沼状遺構	破片	玉井 他1981
11	大阪府 泉大津市	要池	1	溝		財団法人大阪府文化財センター1981
12	奈良県 奈良市	富雄丸山古墳	1	円墳(粘土槨)		八賀1982
13	京都府 与謝野町	大風呂南1号墓	13	台状墓(木棺直葬)		白数 他2000
14	福井県 鯖江市	西山公園	9	埋葬施設		斎藤1966/福井県1986
15	石川県 金沢市	南新保C	1	方墳周溝	破片	伊藤 他2002
16	愛知県 名古屋市	三王山	2	環濠		水野 他1999
17	静岡県 静岡市	小黒	1	包含層	鉤片	天石2002
18	静岡県 静岡市	駿府城内	1	竪穴住居跡		岡村1993
19	静岡県 静岡市	曲金北第6次	1	水田(排水溝内)	鉤片	鈴木2000/天石2002
20	静岡県 静岡市	登呂第21次	1	包含層	破片	岡村2002
21	静岡県 沼津市	御幸町第2次	1	竪穴住居跡	鉤片	瀬川 他1980
22	静岡県 清水町	矢崎	1	包含層・竪穴住居跡		江藤1937/小野1964/清水町1998
23	静岡県 下田市	了仙寺洞穴	1	洞穴	鉤片	宮本1984
24	神奈川県 逗子市	池子No.1-A地点	1	方形周溝墓?	鉤片	山本・谷口1999
25	神奈川県 逗子市	持田U区	1	竪穴住居跡	破片	赤星 他1975
26	神奈川県 秦野市	根丸島	1	竪穴住居跡	鉤片	伊東 他1976/秦野市1985
27	神奈川県 鎌倉市	手広八反目	1	竪穴住居跡	鉤片	永井 他1984
28	千葉県 市原市	北旭台	1	竪穴住居跡		木對1990
29	埼玉県 朝霞市	宮台・宮原第7地点	1	土壌	破片	本書
鑄型						
A	福岡県 福岡市	香椎松原	1			森1963
B	福岡県 古賀市	浜山B地点	1	竪穴住居跡	破片	中間1982
C	福岡県 筑前町	宮ノ上	1	竪穴住居跡		谷澤1989

第51図 有鉤銅釧出土遺跡一覧

- 赤星直忠 他1975『持田遺跡発掘調査報告(本文編)』逗子市文化財調査報告書第6集 逗子市教育委員会  
 天石夏実2002 「静清平野出土の銅釧・鉄釧・銅環」『ふちゅーる』No.10 平成12年度静岡市文化財年報 静岡市教育委員会 pp41-46
- 安楽勉・藤田和裕1978『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集 長崎県教育委員会  
 伊東秀吉 他1976『根丸島遺跡第一次・第二次発掘調査概報』根丸島遺跡調査団  
 伊藤雅文 他2002『金沢市南新保C遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
 江藤千萬樹1937 「駿河矢崎の弥生式遺跡調査略報—其の東日本弥生式文化の様相に与える重要性に就て—」『考古学』第8巻第6号 東京考古学会 pp247-267
- 大庭重信 他2005『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告XII』財団法人大阪市文化財協会  
 岡村渉1993 「駿府城内遺跡出土の有鉤銅釧」『ふちゅーる』No.1 平成3年度静岡市文化財年報 静岡市教育委員会 pp53-54
- 岡村渉2002 『特別史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書III』静岡市埋蔵文化財調査報告60 静岡市教育委員会  
 小野真一1964 「駿河矢崎遺跡第三次調査略報」『考古館報』4 沼津女子商業高校(小野真一 他1971『駿豆の遺跡研究1』沼津女子商業高校 pp54-60 所載)
- 木對和紀1990 『市原市北旭台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第39集 財団法人市原市文化財センター  
 小郷利幸・白石純1999『荒神峪遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集 津山市教育委員会  
 斎藤優1966 「西山公園出土の銅釧」『福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群』福井県教育委員会  
 財団法人大阪府文化財センター1981『考古展 河内平野を掘る』  
 清水町1998 『清水町史』資料編II(考古)
- 白数真也 他2000『大風呂南墳墓群』岩滝町教育委員会  
 杉原荘介・原口正三1961『佐賀県桜馬場遺跡』『日本農耕文化の生成』東京堂 pp133-156  
 鈴木悦之2000 「曲金北遺跡」『ふちゅーる』No.8 平成10年度静岡市文化財年報 静岡市教育委員会 pp18-21  
 瀬川裕市郎 他1980『御幸町遺跡第2次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告第21集 沼津市教育委員会  
 玉井功 他1981『巨摩・瓜生堂』大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター  
 永井正憲 他1984『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広遺跡発掘調査団  
 中間研志1982 『浜山遺跡B地点』福岡県文化財調査報告書第62集 福岡県教育委員会  
 秦野市1985 『秦野市史』別巻 考古編  
 八賀晋1982 『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館  
 福井県1986 『福井県史』資料編13考古
- 福田一志・中尾篤志2005『原の辻遺跡 総集編I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会  
 前田光雄2004 『田村遺跡群II』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松本和男 他1999『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138 岡山県教育委員会  
 水野清一・樋口隆康・岡崎敬1953『対馬 玄海における絶島、対馬の考古学的調査』東方考古学叢刊乙種第6冊 東亜考古学会
- 水野裕之 他1999『埋蔵文化財調査報告書30 三王山遺跡(第1~5次)』名古屋市文化財調査報告40 名古屋市教育委員会
- 宮本達希1984 「伊豆半島南部における洞穴遺跡と古墳」『静岡県考古学研究』16 静岡県考古学会 pp16-30  
 森貞次郎1963 「福岡県香椎出土の銅釧鍔を中心として—銅釧鍔と銅釧の系譜—」『考古学集刊』第2巻第1号 東京考古学会 pp59-66
- 八坂誠 他1986 『茂手遺跡』六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(下巻) 武雄市文化財調査報告書第15集 武雄市教育委員会
- 谷澤仁1989 「福岡県宮ノ上遺跡」『日本考古学年報40(1987年度版)』日本考古学協会 pp532-535  
 山田繁樹 他1993 『東広島ニュータウン遺跡群II』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター  
 山本暉久・谷口肇1999『池子遺跡群X No.1-A地点』かながわ考古学財団調査報告46 財団法人かながわ考古学財団

もとに、その変容をⅡ~Ⅴまでの4つの段階に設定され、帯状有鉤銅釧をそのうちのⅣ段階に位置づけられた。その中でも、鉤が直角に曲がる小黒例は、やや新しいものとされている(木下1996)。曲金北例もまた、上記の特徴を備えている。本例は、環の形状がこれら2例と共通しており、これらは帯状有鉤銅釧のなかでも新式のものと考えられる。

帯状有鉤銅釧の出土例のうち、遺構(竪穴住居跡)に伴うのは根丸島例と矢崎例であるが、両者とも詳細は不明である。木下氏によると、根丸島例は弥生中期末の住居跡の床上10cmの所で発見されたとされ、矢崎例は弥生中~後期の包含層と弥生後期の住

居跡から出土したという(木下前掲文献)。遺構外の出土資料である曲金北例は、古墳時代前期と考えられる土層中から出土し(鈴木2000)、小黒例は古墳時代前期の包含層から出土している(天石2002)。

木下Ⅳ段階の次のⅤ段階には、富雄丸山古墳例と了仙寺洞穴例があげられている。富雄丸山古墳の築造年代は4世紀末頃とされ(八賀1982)、了仙寺洞穴から出土した須恵器は、もっとも古いもので6世紀後葉であり、ほかに弥生時代にさかのぼる可能性のある遺物は出土していない(宮本1984)。したがってⅤ段階は古墳時代に入ってから製作されたものとみてよさそうである。

このようにみえてくると、帯状有鉤銅釧の年代は、弥生時代後期～古墳時代前期の間に求められ、新式は古墳時代前期に下る可能性を指摘できる。

ただし、帯状有鉤銅釧の出土例のもう一つの大きな共通点である補修孔は、これらが、ある程度長期間使用されたことを示す物証であり、この年代観をそのまま製作年代にあてはめるには、躊躇せざるを得ない。

そこで、本例（を含む帯状有鉤銅釧新式）には、現段階では弥生時代末～古墳時代前期初頭の年代を与えておくことにする。

また、その製作地であるが、木下氏は、帯状有鉤銅釧を「形態的に、鉤部の扁平化した西山公園例段階の有鉤銅釧と、地元の円形銅釧が融合して生まれた（前掲著 pp133）」もので、地元で製作された地方型有鉤銅釧と考えられている。有鉤銅釧の鑄型は、福岡県で3点発見されているが、この指摘と、その分布範囲から、帯状有鉤銅釧の製作地域は、静岡県太平洋岸を中心とした東海地方に求めることが、現状では妥当と考えられる。

以上のような考古学的知見を踏まえると、今回実施した、本例の蛍光X線分析と鉛同位体測定の結果は、非常に興味深いものといえよう。

まず、蛍光X線分析では、本例の材質は銅と錫と鉛の合金であり、錫の割合が25%程度であることが判明した（第4節参照）。この錫の割合は、弥生～古墳時代の出土銅製品のなかでは比較的多く、製品は強度が高まると同時に、銀色に近い発色になるという<sup>(註1)</sup>。管見ではこのほかに蛍光X線分析が実施された有鉤銅釧は3例あり、池子例はほぼ純銅（大澤1999）、三王山例は銅の含有率が高く（平尾・榎本1999）、南新保C例は錫の含有量が高い（伊藤他2002）<sup>(註2)</sup>という結果が出されている。

現段階で、この成分の違いが、製作年代や工人の違いを反映したものなのかどうかは、今の段階ではわからないが、今後のデータの蓄積によって、なんらかの示唆を与えてくれる可能性がある。

一方、鉛同位体比測定の結果では、本例に含まれている鉛は、古墳時代になって使われるようになる華南産の可能性が強いことが判明した。今までに測定された銅釧とは材料の系統が異なるのは明らかであり、素直に判断すれば古墳時代になってから製作されたことを示すとされる（第3節参照）。

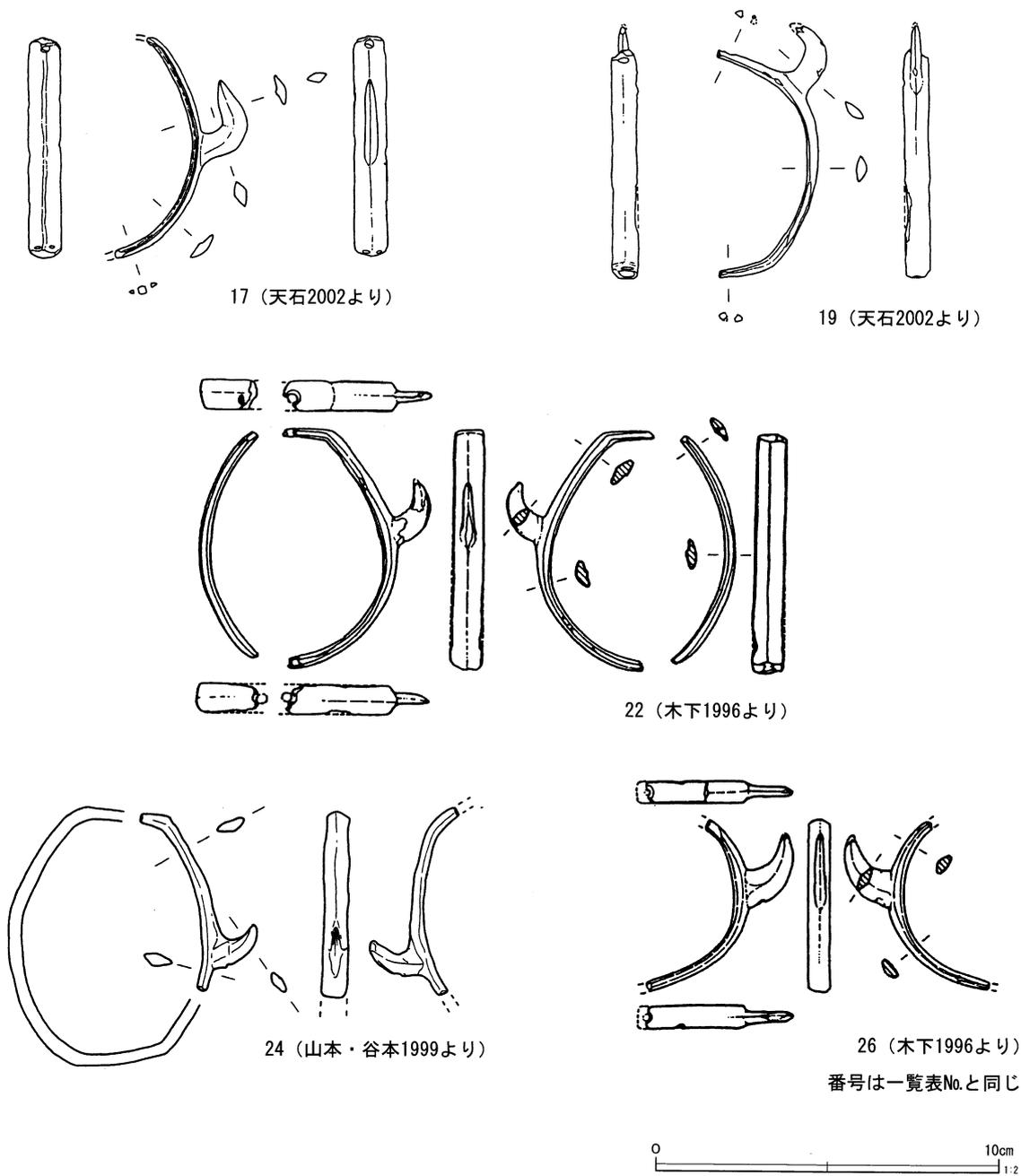
先述したように本例は型式学的に新しく、その製作年代が古墳時代に降るとしても矛盾はない。したがって、考古学側からの見解を、ある意味補強する結果を得たことになる。ただし、本例と同型式である小黒例の測定結果にはこうした特徴は認められないようであり（平尾・馬淵1990）、このことは、原材料と型式の間との相関関係が乏しいことを意味するものかもしれない。いずれにしろ、今後の測定例の増加を大いに期待するところである。

さて、有鉤銅釧は、その出自がゴホウラ貝輪であることから、その成立時には腕輪として使用されていたであろうことは容易に想像がつく。甕棺墓など墳墓には、複数個が副葬される傾向にあり（佐護白岳例、原の辻大川地区例、桜馬場例、大風呂南1号墓例、西山公園例）、この場合には、有鉤銅釧を個人が所有する、威信材的な要素をもつ装身具、もしくは埋葬に伴い象徴的に副葬された祭器とみなすことができる<sup>(註3)</sup>。

一方、集落遺跡では、住居跡などの遺構や、遺構外（包含層など）から単体もしくは破片で出土している例がほとんどを占める。

宮台・宮原遺跡第7地点における本例の出土状況もまたその例に漏れないと考えられる。第16号土壌は、不定形の掘り込みであり、埋葬施設とは考えにくい。共伴する遺物は縄文時代から近世のものが含まれ、すべて破片で量は少ない。こうした状況から、本例はもともとこの土壌に埋納されたものではなく、周辺からほかの遺物とともに流れ込んだものと解釈される。

北條芳隆氏は銅釧のこうした出土のあり方をふまえ、銅釧の社会的機能の第2の側面、すなわち「集



第52図 帯状有鉤銅釧の類例

落内部における共有財として村人の中で一定期間使用され、埋葬祭とかかわることなく廃棄される」「共有」という側面があることを指摘されている（北條2002 引用は pp144）。

この指摘は、本例を含めた帯状有鉤銅釧の多くにみられる、補修孔を必要とするような宝器的扱いをみても首肯できる。また、本例の内面を仔細に観察

すると、両縁とバリの先端に磨耗が認められる。これはこの面が軟質の物体に常に接触するように使用していたためについたものであり、腕輪としての機能と矛盾するものではない<sup>(註4)</sup>。本例のみでの観察結果ではあるが、有鉤銅釧が、生まれたときに有していた、人間の腕に装着するという用い方は、個人の所持品から集団の共有品へという質的变化を遂げ

た後も、変わらなかったと考えられる。

有鉤銅釧の鉤部に、ある種の呪術的性質があることは、木下氏によって指摘されている(木下前掲書)。有鉤銅釧の出土状態を概観すると、鉤部を有する破片もしくは鉤部だけの例は多い<sup>(註5)</sup>。とくに、池子例は、鉤部を中心とした破片の破断面が研磨されており(山本他1999)、有鉤銅釧のなかでも鉤部の存在意義は大きく、他の部分が失われていてもその価値は変化しなかったことを示している。

鉤部のない出土例のうち、本例のように、鉤のみが失われたものは珍しい部類といえよう。失われている鉤部を含む破片にも、同様の補修孔が設けられ、繋がれて使用された期間があったことは想像に難くない<sup>(註6)</sup>。鉤部が廃棄されたあとに失われたのか、廃棄時にすでに失われていたのかを判断することはできないが、鉤部の重要性や、本例の出土状況から、後者の説をとりたい。本例が廃棄されたあとも、残った鉤部はしばし、その社会的機能を発揮しつつ使用されていたのではないだろうか。

今回の調査では、有鉤銅釧の背景にあるべき集落

の存在は確認されなかった。しかし、ほかの調査地点(第2地点・第3地点)からは、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が検出されており、遺跡の範囲内にそのころの集落が存在しているのは確実である。また、隣接する向山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期の大規模な集落で、鑄造鉄斧や銅鐸形土製品など、豊富な遺物が発見されている(照林1995/1996)。このように周辺環境は整っており、この有鉤銅釧のもつ考古学的、地域史的意義は決して小さくはない。今後、別地点の調査が実施されたときに、失われた鉤部が発見される可能性を、荒唐無稽な想像と否定することはできないと考える。

本稿を執筆するにあたって、木下尚子氏には、本例を実見していただき、多くの貴重なご教示をいただいた。大谷宏治氏には静岡県内の出土例についてご教示をいただいた。また、この銅製品が有鉤銅釧と判明したのは本事業団職員大谷徹の示唆のおかげであった。末筆ながらここに記して感謝する次第である。

#### 註

註1 早川泰弘氏のご教示による。

註2 報告では錫の含有率が60%以上とされるが、これでは合金として機能しないという(早川氏ご教示)。おそらく資料自体の錆の影響が大きいと考えられる。

註3 北條芳隆氏が銅釧の社会的機能について論じられた三つの側面のうち、第1と第2の側面にあたる。

註4 木下尚子氏のご教示による。

註5 側部の破片のみでは、有鉤銅釧と確認できない出土例があるかもしれない。

註6 補修孔の破断面側(鉤部のあった側)に使用痕が認められる。木下氏のご教示による。

### 3. 埼玉県朝霞市宮台・宮原遺跡から出土した有鉤銅釧の鉛同位体比

別府大学大学院 文学研究科

平尾良光

原 彰吾

本資料である埼玉県宮台・宮原遺跡から出土した有鉤銅釧の鉛同位体比は表1で示される。これらの値を図1と2で表した。その結果、本資料は見かけ上、中国華南産材料、あるいは中国華北産材料と朝鮮半島産材料の混合とも判断される位置にプロットされた。

鉛同位体比法を利用した材料の今までの研究によれば、古代における日本で利用された青銅材料の産地に関して、次のような時代的な推移が推測されている。1) 弥生時代初期-中期にかけては朝鮮半島産材料が利用される。2) その後、時代の推移と共に中国華北産材料に変化し、朝鮮半島産材料は使われなくなる。3) 弥生時代後期後半になると、中国華北産材料の中でも特定領域'a'の範囲に収まる材料が利用されるようになる。この時代には中国華南産の材料は原則的には利用されない。ただし、中国製の後漢・三国時代の銅鏡は別である。そして、4) 古墳時代になると、その初期から、華南産の材料が利用されるようになり、華北産の材料は原則として利用されなくなる。

今までに出土した有鉤銅釧の例から判断すると、その利用の時期は弥生時代後半が主であるが、古墳

時代初頭にもある。ただし、古墳時代になるとその形が変わってくるとも言われる。また古墳時代初頭に出土した資料に関してはその製作が古墳時代であるかどうかは定かではない。

本有鉤銅釧は宮台・宮原遺跡における発掘過程で、平安時代の遺構を調査しているときに土壌が見つかり、その中から単品として発見された。共存遺物がなかったので時代を判定し難い。しかしながら、有鉤銅釧であること、近くには向山古墳などがあることから、弥生時代後半から、古墳時代初頭と考えられている。

今までに測定された約50の銅釧の値を図1と2に含めると、今回の資料のようにB、B' 領域にはつきり含まれる資料はない。それ故、本資料はこれまでの資料とは材料の系統が異なると判断される。本資料の鉛同位体比を素直に判断すれば、古墳時代になって利用されるようになった材料であり、古墳時代に入っても有鉤銅釧が製造されていたことを示す貴重な資料となろう。華北産材料と朝鮮半島産材料との混合と考えられないことはないが、鉛同位体比とすれば混合と理解するには、かなり難しいと判断される。

表1 埼玉県宮台・宮原遺跡から出土した有鉤銅釧 (BP3049) の鉛同位体比値

	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
有鉤銅釧	8.173	15.644	38.706	0.8608	2.1298
誤差	±0.0010	±0.0010	±0.030	±0.0003	±0.0006

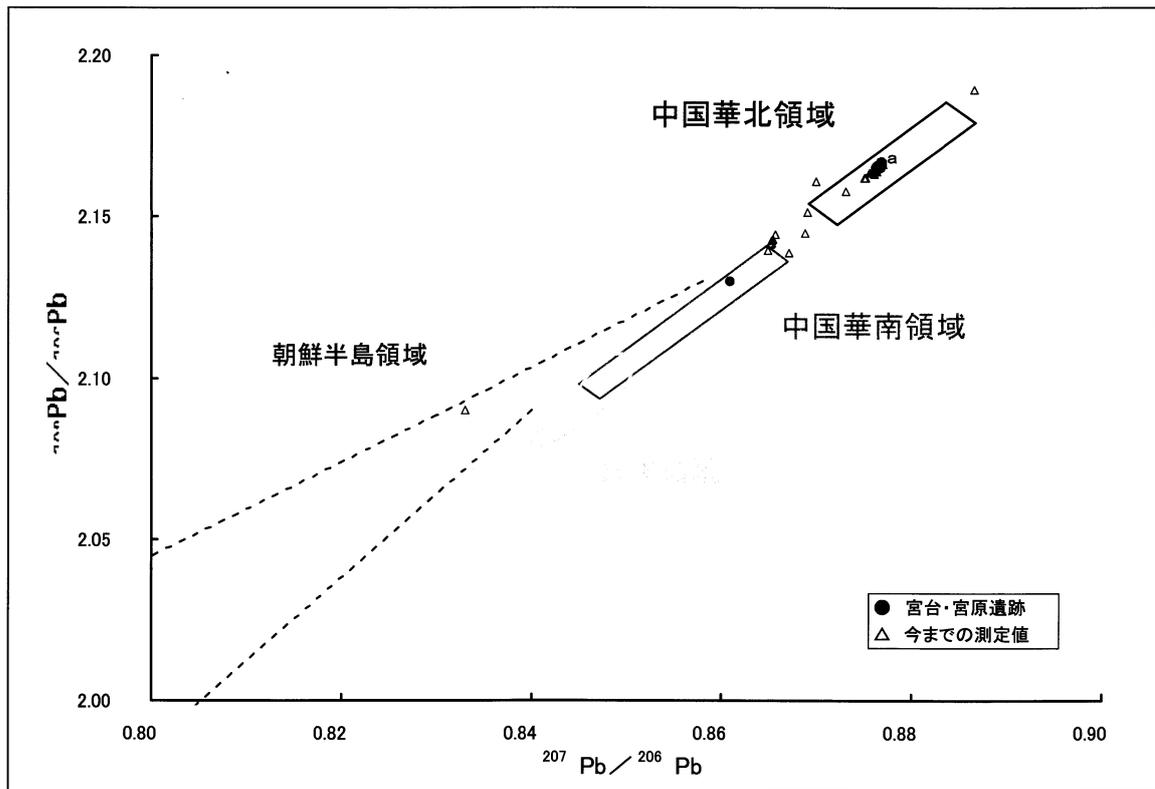


図1 宮台・宮原遺跡から出土した有鉤銅釧の鉛同位体比図（A式図）

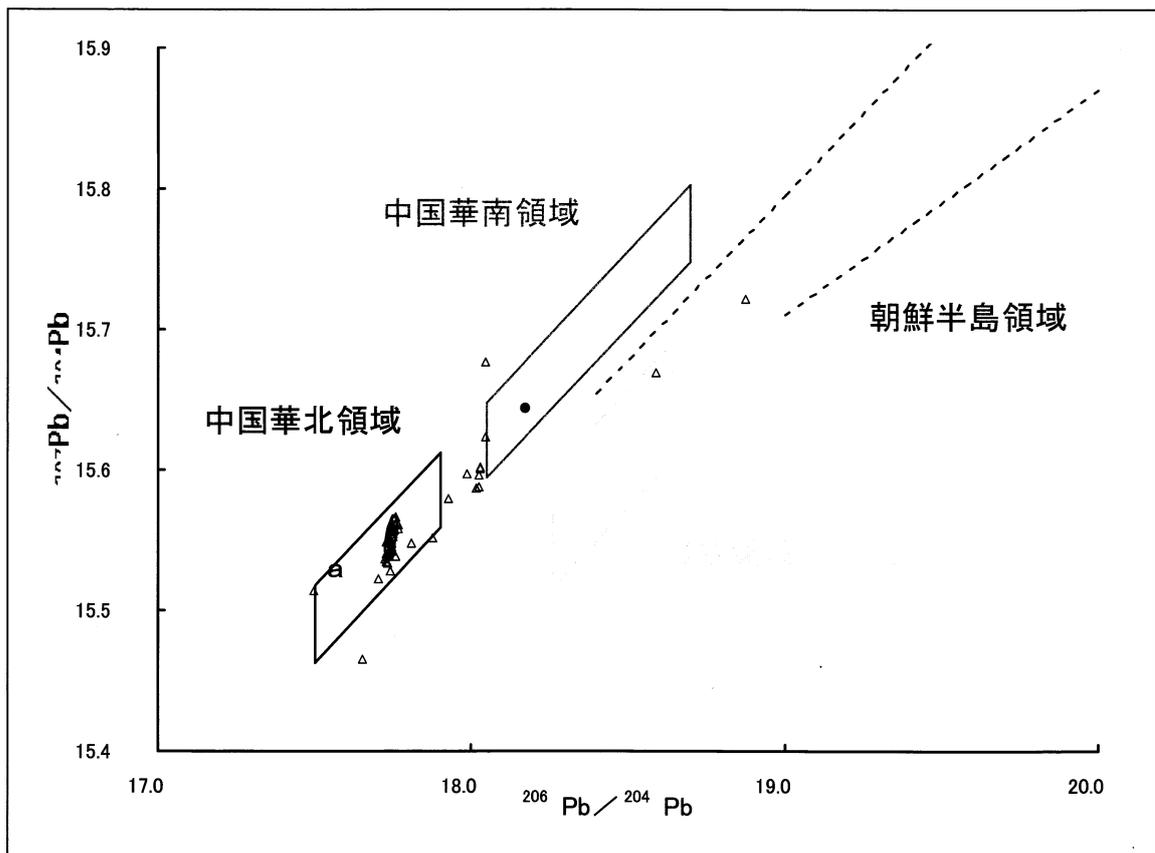


図2 宮台・宮原遺跡から出土した有鉤銅釧の鉛同位体比図（B式図）

## 4. 埼玉県朝霞市宮台・宮原遺跡出土銅鋸の蛍光 X 線分析結果

東京文化財研究所

早川泰弘

### 【分析日時・場所】

2006年2月1日 東京文化財研究所第2化学実験室

### 【分析装置及び条件】

・ 蛍光 X 線分析 (XRF) : セイコーインスツルメンツ(株) 微小部蛍光 X 線分析装置 SEA5230E

X線管球 : Mo (モリブデン)

X線照射条件 : ①  $\phi$  2 mm、45kV $\times$ 16-40 $\mu$  A (測定部位01, 02, 03)

②  $\phi$  0.2mm、50kV $\times$ 1 mA (測定部位04, 05)

測定雰囲気 : 大気

測定時間 : 100秒

定量計算 : 標準試料を使用しないファンダメンタル・パラメータ法

【分析結果】 XRF 測定結果を下記に示すとともに、全測定結果を添付した。

測定部位	検出強度 (cps)				化学組成 (wt. %) * 1		
	Fe-K $\alpha$	Cu-K $\alpha$	Sn-K $\alpha$	Pb-L $\beta$	銅 (Cu)	スズ (Sn)	鉛 (Pb)
01 黒色部	24.5	521.3	743.6	285.7			
02 緑色部	12.7	2164.7	182.1	58.0			
03 薄緑色部	31.5	525.6	863.6	274.3			
04 金属面露出部*2	1.6	245.7	74.9	16.9	72	25	3
05 金属面露出部*2	1.7	209.0	65.8	14.4	71	26	3

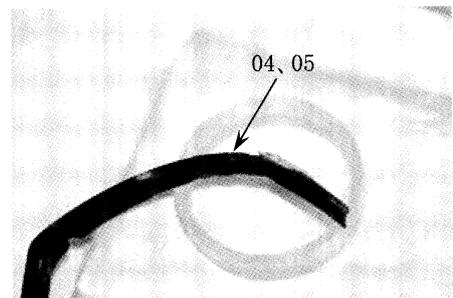
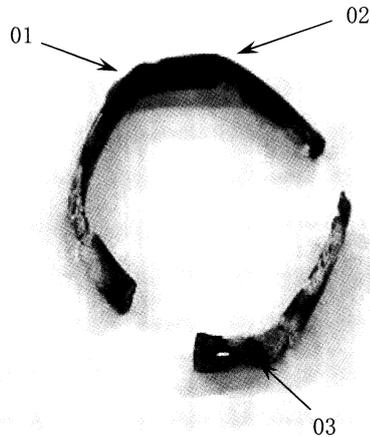
\* 1 バルクファンダメンタル・パラメータ法を用い、Cu、Sn、Pbの3元素の化学組成を算出した。01-03については、表面の腐食生成物の影響が大きいため、化学組成の算出は行わなかった。

\* 2 04と05は同一箇所での測定である。精密ドリルにより露出した地金部(約 $\phi$ 0.5mm)に対して、X線の入射位置を変えて測定したものである。

### 【分析結果に関するコメント】

- ・ 検出された元素は銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb)、鉄 (Fe) の4元素だけである。銅、スズ、鉛の3元素は地金由来、鉄は表面に付着している土壌由来と考えられる。
- ・ 金属面露出部 (04、05) の測定結果から、地金は銅72%-スズ25%-鉛3%程度の青銅であると考えられる。

- ・ 01-03の部位からは Sn が大量に検出されているが、これは腐食生成物の影響である。このため、これらの測定結果については、化学組成の算出は行わなかった。
- ・ Ag あるいは他の金属元素については、今回の測定ではまったく検出されなかった。
- ・ 蛍光 X 線の測定は、試料の大きさ、曲率などによって影響を受けやすく、しかも化学組成の算出に用いたファンダメンタル・パラメータ法は初期条件の設置によって定量値が大きく変化する可能性がある。ここで示した定量値は、これらの変動要因を含んだものであることに注意する必要がある。



**参考・引用文献**（一覧表に掲載したものを除く）

- 安藤広道2003「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観6 弥生・古墳時代 青銅ガラス製品』小学館 pp.291-306
- 大澤正己1999「池子遺跡群出土銅製品の組成分析」『池子遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告46（助かながわ考古財団 pp.957-961
- 木下尚子1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局
- 杉原荘介1968「有鉤銅釧」『明治大学人文科学研究所紀要』第7冊 明治大学 pp.1-13
- 杉原荘介1962『日本青銅器の研究』中央公論美術出版
- 照林敏郎1995「朝霞市向山遺跡第3地点の調査」『第28回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 pp.14-15
- 照林敏郎1996「朝霞市向山遺跡の調査」『第29回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 pp.10-11
- 照林敏郎2004「朝霞市における奈良・平安時代の集落について」『あらかわ』第7号 pp.83-102
- 平尾良光・榎本淳子1999「名古屋市三王山遺跡から出土した銅釧・銅鍔の自然科学的研究」『埋蔵文化財調査報告書30 三王山遺跡（第1～5次）』名古屋市文化財調査報告40 名古屋市教育委員会 pp.160-167
- 平尾良光・馬淵久夫1990「東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査」『都田地区発掘調査報告書 下巻』浜松市教育委員会 pp.590-623
- 北條芳隆2002「銅釧を祖型とする石釧」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻 古代吉備研究会 pp.137-148